

聖大スハの

主日聖體禮儀

五線譜上に **||o||** とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞（祈祷文）が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないようにしてください。

【 讃詞 （十字行の間、ゆっくり繰り返し歌う。） 】

ハリスト スキゆう せ いしゅよ 、 かみのつかいらてんに
 救 世 主 神 使 等 天

お い て なんぢの ふくかつを あがめ う
 爾 復 活 崇 歌

と お う。 われらにもちにおいて いさぎ
 我 等 地 潔

よきこころをも おって なんぢをほめ うたわ
 心 爾 讃 歌

し め た ま あ え 。
 給

※聖堂入口にて

司祭) ^{こうえい} 光 ^{いつせい} 榮は一 ^{いのち} 性に ^し して ^{ほどこ} 生命を ^{わか} 施 ^{せいさんしゃ} す ^き 分れざる ^{いま} 聖 ^{いつ} 三者に ^{よよ} 歸す、今も何時も世世に、

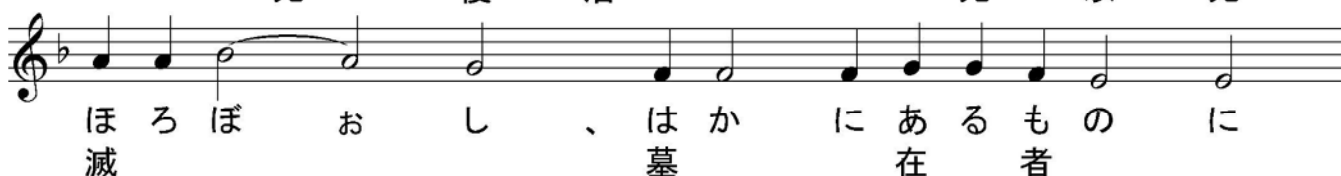


司祭) ^し ハ ^{ふくかつ} リ ^し ス ^し ト ^し ス ^し 死より ^{ほろぼ} 復 ^{はか} 活 ^あ し、 ^{もの} 死 ^{いのち} を ^{たま} 以 ^{たま} て ^{たま} 死 ^{たま} を ^{たま} 滅 ^{たま} し、 ^{たま} 墓 ^{たま} に ^{たま} 在 ^{たま} る ^{たま} 者 ^{たま} に ^{たま} 生命 ^{たま} を ^{たま} 賜 ^{たま} え ^{たま} り。

ハ ^{ふくかつ} リ ^し ス ^し ト ^し ス ^し 死より ^{ほろぼ} 復 ^{はか} 活 ^あ し、 ^{もの} 死 ^{いのち} を ^{たま} 以 ^{たま} て ^{たま} 死 ^{たま} を ^{たま} 滅 ^{たま} し、 ^{たま} 墓 ^{たま} に ^{たま} 在 ^{たま} る ^{たま} 者 ^{たま} に ^{たま} 生命 ^{たま} を ^{たま} 賜 ^{たま} え ^{たま} り。

ハ ^{ふくかつ} リ ^し ス ^し ト ^し ス ^し 死より ^{ほろぼ} 復 ^{はか} 活 ^あ し、 ^{もの} 死 ^{いのち} を ^{たま} 以 ^{たま} て ^{たま} 死 ^{たま} を ^{たま} 滅 ^{たま} し、 ^{たま} 墓 ^{たま} に ^{たま} 在 ^{たま} る ^{たま} 者 ^{たま} に ^{たま} 生命 ^{たま} を ^{たま} 賜 ^{たま} え ^{たま} り。

【 パスハのトロパリ 第5調 】



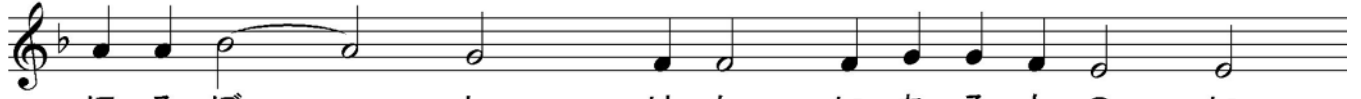


いのちをたまえり。
 生命賜

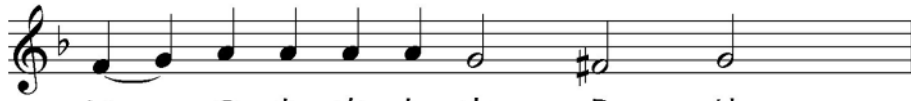
司祭 ^{かみ お そのあだ ち かれ にく もの そのかんばせ に}
 神は興き、其 仇は散るべし、彼を悪む者は其 顔より逃ぐべし。



ハリスト スしよりふくかつし、しをもってしを
 死 復 活 死 以 死



ほろぼおし、はかにあるものに
 滅 墓 在 者

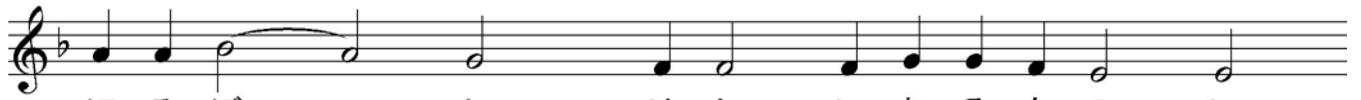


いのちをたまえり。
 生命賜

司祭 ^{けむり ち ごと なんぢかれら ち たま}
 煙の散るが如く、爾 彼等を散らし給え。



ハリスト スしよりふくかつし、しをもってしを
 死 復 活 死 以 死



ほろぼおし、はかにあるものに
 滅 墓 在 者

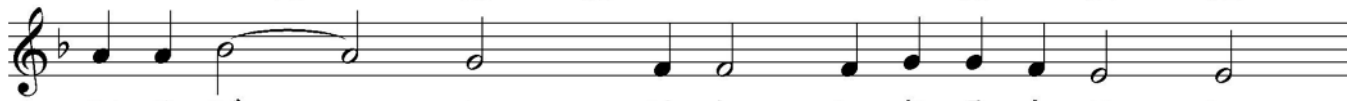


いのちをたまえり。
 生命賜

司祭 ^{ろう ひ よ と ごと か あくにんら かみ かんばせ よ ほろ ただぎじんら たの}
 蠟が火に因りて融くるが如く、斯く悪人等は神の 顔に因りて亡び、惟義人等は樂し
 むべし。



ハリスト スしよりふくかつし、しをもってしを
 死 復 活 死 以 死



ほろぼおし、はかにあるものに
 滅 墓 在 者

いのちをたまえり。
生命賜

司祭) ^{しゅ こ ひ つく}主は此の日を作れり、^{われらこれ もつ よるこ たの}我等之を以て歡び樂しまん。

ハリスト スしよりふくかつし、しをもつてしを
死 復 活 死 以 死

ほろぼおし、はかにあるものに
滅 墓 在 者

いのちをたまえり。
生命賜

司祭) ^{こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ}光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

ハリスト スしよりふくかつし、しをもつてしを
死 復 活 死 以 死

ほろぼおし、はかにあるものに
滅 墓 在 者

いのちをたまえり。
生命賜

司祭) ハリストス^し死^{ふくかつ}より復^し活^しし、死^しを以て死^{ほろぼ}を滅^しし、

はかにあるものにいのちをたま
墓 在 者 生 命 賜

えり。

※司祭が「ハリストス^{ふっかつ}復活！」と呼びかけたら「^{じつ}実に^{ふっかつ}復活！」と答えます。

ロシア語 Христось воскресе には Воистинь воскресе
「ハリストス、ヴァスクリエーシェ！」

ギリシャ語 「Χριστός, ἀνεστήθη！」には「Ἀληθῶς, ἀνεστήθη！」

英語 「Christ is Risen！」には「Indeed, He is Risen！」

ルーマニア語 「Hristos a înviat！」には「Adevărat a înviat！」

アラビア語 「أل مسيحا كام！」には「هكنا كام！」

聖堂に入り、聖体礼儀を始められるよう準備します。十字行に使用した物を元に戻したら、すぐに大聯禱に入ります。祈祷が長いのでさっさと始めましょう。献灯は聯禱が始まってから交代で行うなどして、速やかに祈祷が進むように工夫しましょう。

【 早課 大聯禱 】

司祭) ^{われらあんわ} 我等安和^{しゅ いの}にして主に禱らん、



司祭) ^{うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの}上より降る安和と我等が 靈の救の爲に主に禱らん、



司祭) ^{ぜんせかい あんわ かみ せい しよきょうかい けんりつ およ しゅうじん ごういつ ため しゅ いの}全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、



司祭) ^{こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ ころもつ ここ きた もの ため しゅ いの}此の聖堂、及び信と慎と神を畏る心とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、



司祭) ^{きょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきょう しきい そんびん}教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、司祭の尊品、ハリス

^{よ ほさいしよく ことごと きょうしゅう およ しゅうじん ため しゅ いの}トスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、



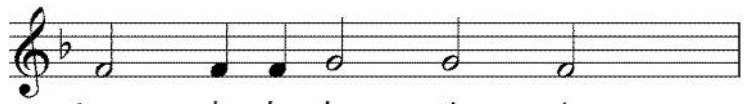
司祭) ^{わがくに てんのう およ くに つかさど もの ため しゅ いの}我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



司祭) ^{こ まち およそ まち ちほう ため およ しん もつ こ うち お もの ため しゅ いの}此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、

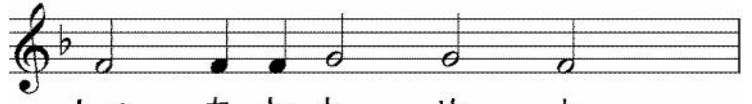


司祭) ^{きこうじゅんわ ごこくほうじょう てんかたいへい ため しゅ いの}氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



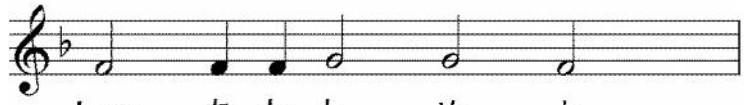
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{こうかい もの りょこう もの やまい うれ もの かんなん あ もの とりこ もの およ}
航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び
^{かれら すくい ため しゅ いの}
彼等の救の爲に主に禱らん、



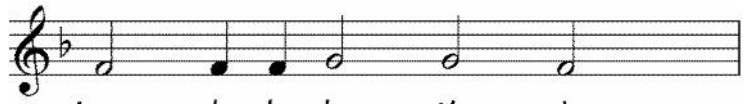
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{われら もろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの}
我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

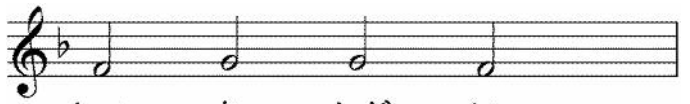
司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも}
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

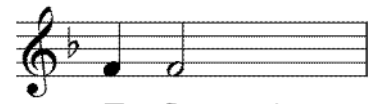
司祭) ^{しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ}
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

^{しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら}
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の
^{いのち もつ かみ いたく}
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ なんぢ に 。
主 爾

司祭) ^{けだし およ こうえいそんきふくはい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ}
蓋、凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



ア ミ ン。

【 ^{カノン} 規程 第一歌頌 】



ふ く か つ の ひ を も っ て 、 ひ と び と や 、 お 己
復 活 日 以 人 人 己

のれを あかすべし、パスハはしゅのパスハ
照 主

なり ハリストオスカ ちはかちうたをたて
神 凱 歌 奉

まつるのわれらを しよりいのちに、ちよ
我 等 死 生 命 地

りてんに うつせばなあり。
天 移

ハリストスしよりふくかつし、
死 復 活

こころをきよめて、ふくかつのちかづき
浄 復 活 近

がたきひかりにて かがやくのハリストスを、あ
難 光 輝

おぎみるべし、かちうたをたてまつり
見 凱 歌 奉

っつ、よろこべよ といいたもうをきく
慶 言 給 聞

べえし。

ハリストスしよりふくかつし、
死 復 活

てんにはたのしめよ、ちにはよろこべ
天 樂 地 歡

よ、みゆるとみえざるあらゆるものはいわ
見 見 祝

えよ、ながきたのしみなあるハリストスふくか活
永 樂 復 活

つせしによおる。
因

ハリストスしよりふくか活つし、しをもってしをほ滅
死 復 活 死 以 死 滅

ろぼし、はかにあるものにいのちをた賜
墓 在 者 生 命 賜

まえり。

【 第三歌頌 】

きたりてあたらしきのみものをのむべし、
來 新 飲 料 飲

いきざるいしよりきせきにていだされしもの
生 石 奇 蹟 出

にあらず、はかよりわきいづるいづみ
非 墓 湧 出 泉

なるハリストス、ながきいのちをわれらにた賜
永 生 命 我 等 賜

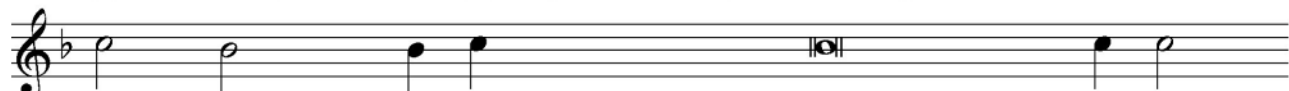
もうものを。
者



ハリストスしよりふくかつし、
死復活



てんとちとぢごくいましてらされしに
天地地獄今照



よって、ばんぶつはハリストスのおきるをいおう
万物起祝



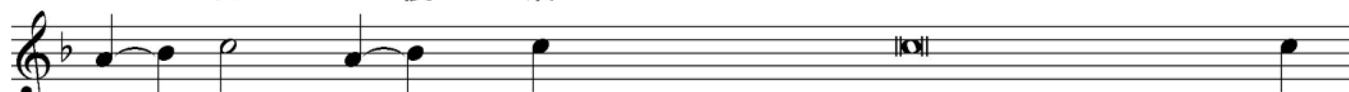
べし、われらをおこしたつればなあ
我等起立



り。



ハリストスしよりふくかつし、
死復活



ハリストスやあ、われきのうなんちとともにほう
我昨日爾借葬



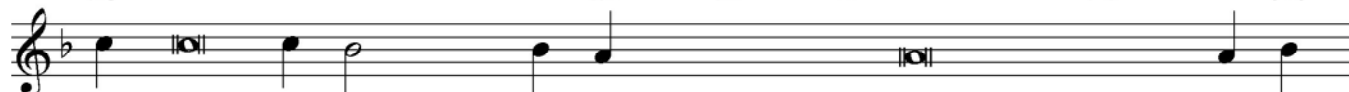
むられ、いまなんちのふくかつにしたがい
今爾復活



おきいる。きのうなんちとともにじゅうじかに
起昨日爾借十字架



くぎうたる、きゅうせいしゅやあ、なんちのく
釘救世主爾國



ににおいて、ともにこうえいをうけさせた給
於借光榮受



まあえ。

ハリストスしよりにふくかっし、しをもってしをほ
 死 復 活 つ し 、 し を も っ て し を ほ
 ろ ぼ し 、 は か に あ る も の に い の ち を た
 墓 在 者 生 命 賜
 ま え り 。

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ ^{しゅ いの} 我等復又安和にして主に禱らん、

しゅあわれめよ。
 主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも} 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅあわれめよ。
 主 憐

司祭) ^{しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ} 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

^{しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら} 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

^{いのち もつ かみ いたく} 生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅなんぢに。
 主 爾

司祭) ^{けだしなんぢ われら かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ} 蓋爾は我等の神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世々に、

アミン。

【 イバコイ 應答歌 】

マリヤとともにおんあたはよあけよ
 借在女等黎明
 りはかにきたり、いしのうつされたるを
 墓来石移
 みて、てんしよりきけり、えいえんの
 見天使用聞永遠
 ひかりにおるものをなんぞひとのごとく
 光居者何人如
 ししゃのうちにたづぬる、ほうむりのころ
 死者中尋る、斂葬衣
 もをみて、いそぎてせかいにつたえよ、
 見急世界傳
 しゅはしをほろぼしてふくかつせり、じんる
 主死滅復活人類
 いをすくうかみのこなればなり。
 救神子

【 第四歌頌 】

かみのよげんしゃアヴァクムわれらとともにたちみ見
 神預言者我等借立見
 るべし、かみのつかいひかりをはなちて
 神使光放
 い言う、いまよはすくいを得たり、
 言今世救得

ぜ えんの うのしゆハリスト スふ く かつ せ し に よ お
 全 能 主 復 活
 る 。

ハリストスしよ り ふ く かつ し 、
 死 復 活

しよ お ぢよ の は つ う み しハリスト ス、ひ と と して わ
 處 女 初 生 人 我

が パスハの ひ つ じ と な れ り 、 き ず な き わ が
 羊 瑕 無 我

パ スハ や 、ハリストスはか み な れ ば な あ
 神

り 。

ハリストスしよ り ふ く かつ し 、
 死 復 活

わ れ ら の ほ ま れ な るハリスト ス、ひ と と せ の ひ
 我 等 譽 期 年 羊

つ じ の ご と く 、 あ ま ん じ て ほ ふ ら る る を う
 如 甘 屠 受

け も ろ び と を き よ む る の パスハと な り て 、
 諸 人 潔

は か よ り ま こ と の ひ の ご と く い で て ひ
 墓 真 日 如 出 光



かある。



ハリストスしよりふくかつし、
死復活



かみのせんぞダヴィド、かげなりしやくきの
神先祖影約櫃



まえによろこびおどれり、かみのひとり人
前喜躍神一人



となるわれらは、しるしのなれるをみて
我等は、徴成見



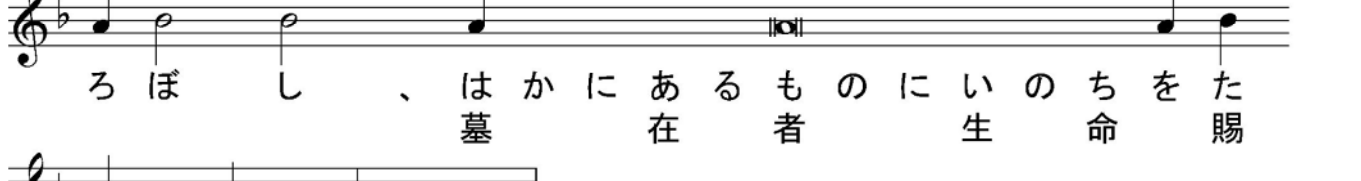
たのしみにたえず、ぜんとうのしゅハリストスふく
樂しみに堪えず、全能の主復



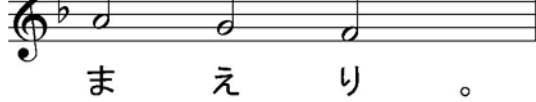
かつせしによおる。
活因



ハリストスしよりふくかつし、しをもつてしをほ
死復活、死以死滅



ろぼし、はかにあるものにいのちをた
賜



まえり。

【 第五歌頌 】



よおあけよりしゅをあおぎした、こうば
黎明主仰慕香

しきあぶらのかわりにほめうたをたてまつ
 膏 代 讃 歌 奉

り、まことのひなるハリストス、もろびとを
 眞 日 衆 人

いかすひかりをはなつをみるべえし。
 活 光 放 見

ハリストスしよりふくかつし、
 死 復 活

ハリストスや、ぢごくにつなわれしもの
 地 獄 繋 者

なんぢのはかりがたきあわれみを見、よろ
 爾 量 難 憐 見 喜

こびすすみてひかりにつき、よよのパスハ
 進 光 就 き 世 世

をほめうとおう。
 讃 歌

ハリストスしよりふくかつし、
 死 復 活

ハリストスはかよりはなむこのごとくに
 墓 新 郎 如

いづ、ともしびをたづさえてかれをむ迎
 出 燭 携 彼 迎

かえ、よろこびのうたをたてまつうり
 歡 歌 奉

よをすくうかみのパスハをともにいおう
 世救神借祝
 べえし。

ハリストスしよりふくかつし、しをもつてしをほ
 死復活死以死滅
 ろぼし、はかにあるものにいのちをた
 墓在者生命賜
 まえり。

【 第六歌頌 】

ハリイストオスやあ、なんぢぢごくにくだり、そ
 爾地獄降
 のかためをやぶりつながれしものと解
 鎖破繋者解
 き、みっかにしてイオナのおおうおよりいで
 三日大魚出
 しごとく、はかよりふくかつせえ
 如墓復活
 り。
 ハリストスしよりふくかつし、
 死復活

わがきゆうせいしゅやあ、なんぢはかみなるによ
我 救 世 主 爾 神 なる によ

りじゆうにてえおのれをいけにえとなしち
自 由 己 己 儀 牲 とな 爲 ち

ちにたてまつりて、はかよりふくかつ
獻 墓 復 活

し、もろびとのちちアダムをともにふく
衆 人 原 祖 借 復

かつせしめえり。
活

ハリストスしよりふくかつし、しをもつてしをほ
死 復 活 死 以 死 滅

ろぼし、はかにあるものにいのちをた
墓 在 者 生 命 賜

まえり。

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ ^{しゅ いの} 我等復又安和にして主に禱らん、

しゅあわれめよ。
主 憐

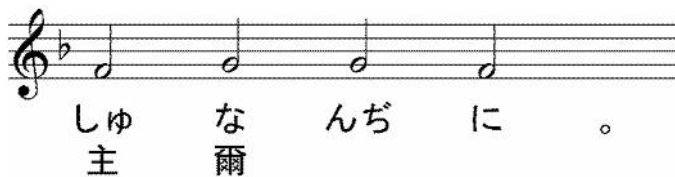
司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも} 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅあわれめよ。
主 憐

司祭) ^{しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ} 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

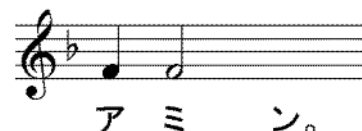
しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) けだしなんぢ へいあん おうおよ わ たましい きゆうしゆ われらこうえい なんぢちち こ せいしん
蓋爾は平安の王及び我が靈の救主なり、我等光榮を爾父と子と聖神に

けん いま いつ よよ
獻ず、今も何時も世に、



【 コンダク 】

し せ ぎ るハリスト スか み よ 、 なんぢは は か に く
死 神 爾 墓 降
だ れ ど も ぢ ご く の ち か ら を や ぶ り 、 か 勝
地 獄 力 破 勝
つ も の と し て ふ く か つ せ り 、 け い こ う
者 復 活 携 香
ぢ ょ に よ ろ こ べ よ と い い 、 なんぢの し と に へ 平
女 慶 言 爾 使 徒 平
い あ ん を あ た え 、 ほ ろ び し も の に ふ く
安 與 亡 者 復
か つ を た ま え り 。
活 賜

【 讃詞 】

ハリストスの ふ く か つ を み て 、 せ い な る し ゅ イ イ ス
 復 活 見 聖 主
 ス ひ と り つ み な き も の を お が む べ え し 、
 獨 罪 者 拜
 ハ リ ス ト ス や 、 わ れ ら な ん ぢ の じ ゅ う じ か を お が あ
 我 等 爾 十 字 架 拜
 み 、 な ん ぢ の せ い な る ふ く か つ を う た い ほ 讃
 爾 聖 復 活 歌 讃
 む 、 な ん ぢ は わ れ ら の か み な れ ば な あ
 爾 我 等 神
 り 、 な ん ぢ の ほ か た の か み を し ら あ ず 、
 爾 外 他 神 知
 た だ な ん ぢ の な を と の お う 。 し ん じ ゃ よ 、 み な き 來
 唯 爾 名 稱 信 者 皆 來
 た り て 、 ハ リ ス ト ス の せ い な る ふ く か つ を お 拜
 聖 復 活 拜
 が む べ え し 、 じ ゅ う じ か に て よ ろ こ び は ぜん
 十 字 架 歡 喜 全
 せ か い に の ぞ み た れ ば な り 、 わ れ ら つ ね
 世 界 臨 我 等 恒
 に し ゅ を ほ め あ げ え て 、 そ の ふ く か つ
 主 讚 揚 其 復 活
 を あ が め う た あ わ ん 、 し ゅ は じ ゅ う じ か に く ぎ
 崇 歌 主 十 字 架 釘

うたるるをしのびて、しをもつてしをほろぼ
忍 死 以 死 滅

し しによ おる。
因

あらかじめいいしごとく、イイススはかよ
預 言 如 墓

りふくか つして、われらにえいえんのい
復 活 我 等 永 遠 生

のちと おおいなるあわれみとをたま
命 大 憐 賜

えり。

【 第七歌頌 】

わあらべをいろりよりすくいししゅ はひと
童 子 爐 救 主 人

となり、ししやすきもののごとおくくるし
為 死 易 者 如 苦

みをうけ、そのくるしみにてししやすきにせ
受 苦 死 易

ざるをきせり、わがせんそのかみや
衣 我 先祖 神

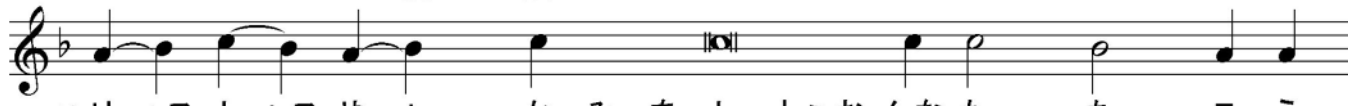
なんぢはひとりあがめほめらるべきしゅなあ
爾 獨 崇 讚 主 主 あ



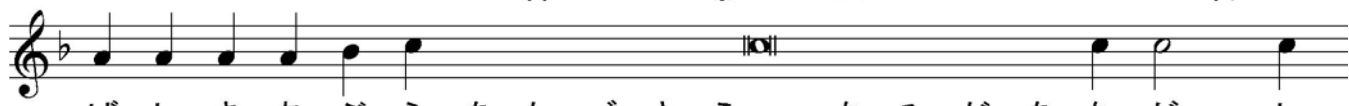
り。



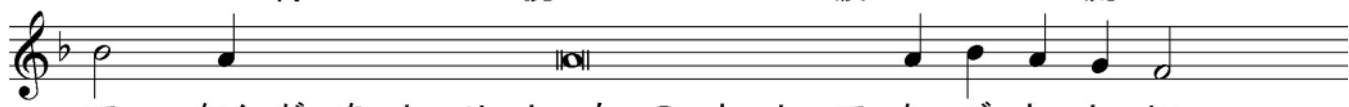
ハリストスしよりふくかつし、
死復活



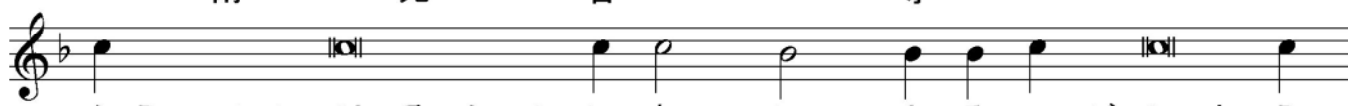
ハリイストオスやあ、かみをしとうおんなたちこう
神慕女香



ばしきあぶらをたづさえ、なみだをながし
膏携涙流



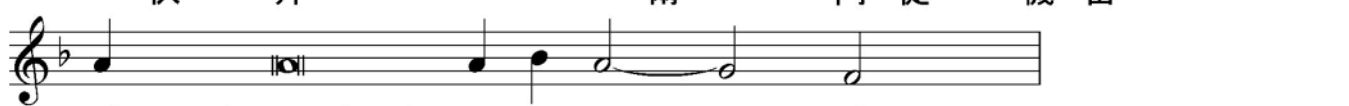
てなんぢをしせしものとしてたづねしに、
爾死者尋



かえっていけるかみにあいよろこびにたえ
却活神遭喜堪



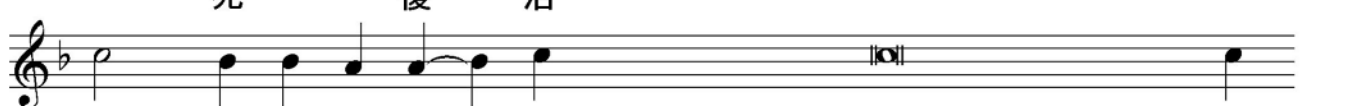
ずふくはいし、なんぢのものとにきみつの
伏拜爾門徒機密



パスハをつたえしらせえり。
傳



ハリストスしよりふくかつし、
死復活



じつにいおうべきこのせいなるすくい
實祝の聖救いの



よるはわがおきるにかがやきさきだつ
夜我起輝光先立



もの、このうちにながきひかりははかより
者、斯の中永光りは墓

からだにていで もろびとをてらせ え
 體 出 衆 人 照
 り。

ハリストスしよりふくかつし、しをもつてしをほ
 死 復 活 死 以 死 滅
 ろぼし、はかにあるものにいのちをた賜
 墓 在 者 生 命 賜
 まえり。

【 第八歌頌 】

このせいなるえらばれしひ日はただひとつ
 斯 聖 擇 日 唯 一
 にして、スポタのおう、まつりのまつり、
 王 祭 祭
 いわいのいわいなり、われらこのひにお於
 祝 祝 我 等 此 日 於
 いてハリストスをよよにあがめほめん。
 世 世 崇 讚
 ハリストスしよりふくかつし、
 死 復 活
 きいたれ、ふくかつのいちぢるしきひにおい
 來 復 活 著 日 於

て、あらたなるぶどうのみ、かみよりのた
 新 葡萄 實 神 樂

のしいみ、ハリストスのくにをうけ、ハリストスカみ
 國 領 神

をよよにほめ うたわん。
 世 世 讚 歌

ハリストスしよりふくかつし、
 死 復 活

シィオンやあ、めをあげてめぐりみよ、
 目 擧 周 見

なんちのこどもひかれるほしのごとおく、
 爾 小 児 光 星 如

ひがしにしとみなみきたよりあつまりて
 東 西 南 北 集

なんちのうちハリストスをよよにあがめほお
 爾 中 世 世 崇 め 讚 お

む。

しせいさんしやわれらのかみや、なんちをあが
 至 聖 三 者 我 等 神 み や 爾 を 崇

めほおむ。

ぜんのうのちちとことばとせいしん、いった
 全 能 の 父 と 言 ば と 聖 い し 神 一 體

いなるせいさんしゃあや、なんぢのなによってわれ
 聖三者 爾名因我
 らせんれいをうけり、なんぢをよよにあが
 等洗禮受 爾世世崇
 めほめん。
 讚
 ハリストスしよりふくかつし、しをもつてしをほ
 死復活 死以死滅
 ろぼし、はかにあるものにいのちをた賜
 墓在者生命賜
 まえり。

【 第九歌頌 】

わがたまあしいはみつかめにはかよりふうくかあ
 我靈 三日目墓 復活
 つしいのちをたまえるハリストスを、ほめあ揚
 生 命 賜 讚 揚
 ぐうる。
 あらたなるイエルサリムやひかりひかれよ、かみ
 新 光 光 神
 のこうえいなんぢにかがやけばなり、
 光 榮 爾 輝

シオンや たのしみいわ え、なんぢいさぎ
 樂 祝 爾 潔

よきかみのははや、なんぢのうみししゆの主
 神 母 爾 生 主

ふくかつをよろこびたまあえ。
 復 活 喜 給 給 。

わがたまあしいは、じゆうにてくるしみを
 我 靈 自 由 苦

うけ、ほおむうらあれ、みつかめにはかより
 受 葬 三 日 目 墓

ふくかつせししゆをほめあぐうる。
 復 活 主 讚 揚 。

あいすべきかなハリストスのことばや、われら等
 愛 言 我 等

とともによをおわるまでわかれざるをやく
 借 世 終 別 約

せり、われらしんじゃはこのやくにのぞみを
 我 等 信 者 此 約 冀 望

かためてよろこびたのしいむ。
 固 喜 樂

ハリストスはあらたなるうパアスハ、いけるのおい犠
 新 生 犠

けえにえ、かみのこひつじ、よのつみを
 牲 神 羔 世 罪



に ない し もおの な あり 。
任 者



せ い な る か な わ が パスハハリスト スや 、 ち え と ち 能
聖 我 智 慧 能



か ら と か み の こ と ば あ や 、 な ん ぢ の く に の く
力 神 言 爾 國 暮



れ な き ひ に お いて 、 わ れ ら に な お し た し
無 日 於 我 等 猶 親 し



く な ん ぢ を う け さ せ た ま あ え 。
爾 領 給 給

【 カタヴァシア 共頌歌 】



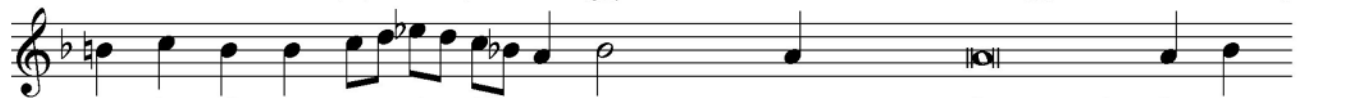
か み の つ か い い つ く し み を み ち こ う む る も の
神 使 慈 満 被 者



に よ ん で い わ あ く 、 い さ ぎ よ き し ょ ぢ よ や 、 よ お ろ お こ お
呼 日 潔 処 女 慶



べ よ 、 ま た い う よ ろ こ べ よ 、 な ん ぢ の こ 子
又 日 慶 爾 子



み つ か め に ふ う く う か あ つ し 、 し せ し も の を お こ
三 日 目 復 活 死 者 起



せ り 、 ひ と び と や た の し め よ 。
人 人 樂



あ ら た な る イ エ ル サ リ ム や ひ か り ひ か れ よ 、 か み
新 光 光 神

の こう え い なんぢに かが や け ば な り 、
 光 榮 爾 輝
 シ オ ン や た の し み い わ え 、 なんぢ い さ ぎ
 樂 祝 爾 潔
 よ き か み の は は や 、 なんぢ の う み し し ゅ の
 神 母 爾 生 主
 ふ く か つ を よ ろ こ び た ま あ え 。
 復 活 喜 給

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ しゅ いの
我等復又安和にして主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐

司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐

司祭) しせいしけつ いたさんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

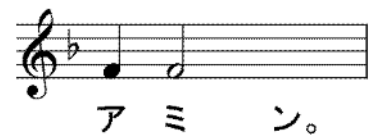
しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく
生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅ な ん ぢ に 。
主 爾

司祭) けだしてん しゅうぐんなんぢ さんよう われら こうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ
蓋天の衆軍爾を讚揚す、我等も光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も

よよ
世世に、



エクサポステラリ
【 差遣詞 】

か み わ が し ゅ や 、 な ん ぢ し せ し も の の ご と く
神 我 主 爾 死 者 如
み に て い ね 、 み っ か め に ふ く か つ し 、
見 寝 三 日 目 復 活
ア ダ ム を お こ お し 、 し を む な し う
起 死 虚
せ り 、 な ん ぢ は ほ ろ び ざ る の パ ス ハ 、 よ お
爾 滅 世
の す う く う い な り 。
救

【 讃揚歌 】

お よ そ お い き あ る も の は し ゅ を ほ め あ げ
凡 呼 吸 者 主 讃 揚
よ 。 て ん よ り し ゅ を ほ め あ げ よ 、 い と
天 主 讃 揚 至
た か き に か れ を ほ め あ げ よ 、 ほ め う た は
高 彼 讃 揚 讃 歌
な ん ぢ か み に き い す 。
爾 神 歸

そのことごとく のてんしよ、かれをほめあげ
 其 悉 天使 彼 讃 揚
 よ、そのことごとく のぐんよ、かれをほめ
 其 悉 軍 彼 讃
 あげよ、ほめうたはなんぢかみにきい
 揚 讃 歌 爾 神 歸
 す。

【 パスハのスティヒラ 】

かみはおき、そのあだはちるべえ
 神 興 其 仇 散
 し。

せいなるパスハ いまやわれらにあらわ
 聖 今 我 等 現
 れえり、あらたなるパアスハ、ひ秘
 新
 みつのパスハ、いととうときパスハ、
 密 至 尊
 パスハリスト スキゆうせ えいしゅ、きずなき
 救 世 主 瑕
 パアスハ、お大 おいなるパスハ、しんじやの
 信者

パスハ、てんごくのもんをわれらにひらくの
 天國 門 我 等 啓

パアスハ、すべてのしんじゃをせいにするの
 凡 信者 聖

パスハなあり。

けむりのちるがごとく、ふきはらわ
 煙 散 如 吹 払

るべえし。

さいわいをしらせるおんなどもおや、
 福 報 女 達

ことをみてきたりシオンにいうべえし、
 事 観 來 言

ハリストスのふっかつのよろこばしきしらせを
 復活 喜 報

われらよりうけよおと、イエルサリムや
 我 等 受

ハリストスおうはなむこのごとくはかよりいづ
 王 新 郎 如 墓 出

るをみて、よろこび、いわい、たの
 見 喜 祝 樂

しめえよ。

あくにんかみのまえにほろび、ただぎじん
 悪人神の前亡、惟義人

たのしむべえし。

あぶらをたづそうるおんなどもあさはやく
 香膏を携女達も朝は早く

いのちをたもうものはかにきたり、い
 生命賜者墓来、石

しにぎするかみのつかいにあう、かれ
 坐神使に遇、彼

にいえるは、なんぞいけるものをしせしもの
 言何生者死者

のうちにたづぬるや、なんぞくちざるも者
 中尋何朽者

のをくちるとしてかなしみなくや、
 朽哀泣

ゆいてそのもんとにふくかつをつたえよ。
 往其門徒復活傳

しゅはこのひをつくれり、これをいおうてたの
 主此日作之祝樂

しむべえし。

たのしきパスハ、パスハしゅのおパスハ、あ
 樂主崇

がむべきいペアスハ、われらにあらわれえり、
 我等現

パスハに^よってわれら^ともによろおこび
 因我等借喜

たがいのあいをあらわすべえし、うれいよ
 互愛顯憂患

りのすくいなるかなパスハや、ハリストスみや
 拯宮

よりいづるがごとおくはかよりひかり
 出如墓光

いで、おんなをよろこびにみてて
 出女欣喜滿

いう、しとどもにつたえよおと。
 云使徒達傳

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
 光榮父子聖神歸今

いつもよよに、アミン。
 何時世世

ふくかつのひ、われらをてらせり、
 復活の日我等照

いおうてたがいにあいいだくべえし、われ
 祝慶互相抱我

らをにくむものにもまたいうべえし、
 等を嫉者もまた曰

きょうだいや、ふくかつによりてみなたが
 兄弟 復 活 縁 皆 互
 いにゆるして、あいともにかくうた
 恕 相 借 斯 歌
 わん。

ハリストスしよりふくかつし、しをもってしを
 死 復 活 死 以 死
 ほろぼおし、はかにあるものに
 滅 墓 在 者
 いのちをたまえり。
 生 命 賜

ハリストスしよりふくかつし、しをもってしを
 死 復 活 死 以 死
 ほろぼおし、はかにあるものに
 滅 墓 在 者
 いのちをたまえり。
 生 命 賜

ハリストスしよりふくかつし、しをもってしを
 死 復 活 死 以 死
 ほろぼおし、はかにあるものに
 滅 墓 在 者
 いのちをたまえり。
 生 命 賜

※司祭が「ハリストス復活！」と呼びかけたら「実に復活！」と答えます。

【 コンスタンチヌーポリの大主教聖金ロイオアンの復活祭説教 】

司祭) 誰か敬虔にして神を愛する者ならば、斯の美しき祭を樂しむべし。誰か善智の僕
ならば、喜びて其主の歡樂に入るべし。誰か齋して勞せしならば、今銀一枚を取るべ
し。誰か第一時より工作せしならば、今日至當なる値を受くべし。誰か第三時の後に
來たりしならば、感謝して祝うべし。誰か第六時を過ぎて至りしならば、聊も思い煩
うべからず、蓋毫も失う所なし。誰か第九時にまで遅わりしならば、少しも疑わ
ずして就くべし。誰か唯第十一時にのみ至りしならば、其遅わりたるを畏るべからず。
蓋主宰は寛大にして、末の者を第一の者の如くに接け、第十一時に來たりし者を
第一時より工作せし者の如くに息わしむ。後の者をも恤み、先の者をも慮る、
彼にも予え、此にも賜う。行をも受け、志をも嘉す。功をも敬い、望をも賞
む。故に皆我が主の歡樂に入れ、第一の者も第二の者も報賞を受けよ。富める者及び貧
しき者は相共に祝え。節制の者及び怠惰の者は日を尊べ。齋せし者及び齋せ
ざりし者は今日樂しめ。筵は豐盛なり、皆食いて飽くべし。犢は肥大なり、一人も飢え
て出づべからず。皆信の筵を樂しめ、皆慈愛の富を享けよ。何人も貧窮を憂うべから
ず、蓋公共の國は現れたり。何人も罪の爲に泣くべからず、蓋墓より赦免は輝
けり。何人も死を畏るべからず、蓋救世主の死は我等を釈きたり。彼は此に圍まれ
て之を滅せり。彼は地獄に降りて地獄を虜にせり。彼は其肉體に捫りし者を悲しま
せたり。之を預知せしイサイヤも此の事と呼びて言う、地獄は爾を下に迎えて悲しめりと。
悲しめり、蓋空しくせられたり。悲しめり、蓋辱しめられたり。悲しめり、蓋殺さ
れたり。悲しめり、蓋仆されたり。悲しめり、蓋縛られたり。肉身を受けて、神に著け
り。地を受けて、天に遇えり。見たる所を取りて、見ざる所に陥れり。死よ、爾の刺は
安にか在る、地獄よ、爾の勝は安にか在る。ハリストス復活して、爾は墜ちたり。
ハリストス復活して、悪魔は仆れたり。ハリストス復活して、天使等は歡ぶ。ハリストス

復活して、生命は凱旋す。ハリストス復活して、死者は一も墓に在らず、蓋ハリスト

ス死より復活して、死せし者の中に初實と爲れり。彼に光榮及び權柄は世世に歸す、

「アミン」。

(現代語訳)

さあ、心から神を愛する人々よ、この美しく光り輝く祭を楽しもう。

さあ、賢いしもべたちよ、それぞれの喜びを胸にたずさえ、主ご自身の歓喜と一つになろう。

長い齋(ものいみ)をしっかり守った者は、さあ銀一枚(一デナリ)を受け取りなさい。

(あなたが長い大齋の最初から、そう、あのぶどう園の労働者たちのように)朝早くから働いたなら、今日、胸を張って当然の報酬を受け取りなさい。

午前中から来たのなら、感謝してその報酬を喜びなさい。

お昼から来たのでも、何の心配もいらない。同じだけ受け取れるのだから。

午後によく来たとしても、何をとまどっている…、さあ、この食卓に着きなさい。

とうとう日暮れ近くになるまで重い腰を上げなかったあなたも、遅れたからといって、何も怖がることはない。

そうなのだ、この宴会の主人は実に寛大だ。最後の者も最初の者と同じように迎えてくれる。日暮れ近くにきた者も、早朝から働いた者と同じように憩わせてくれる。後から来た者も隣み、最初から来た者も忘れはしない。彼にも与え、他の者にも賜う。行いも受け入れてくださるし、志でも祝福して下さる。功績(てがら)も認めてくれ、望みも励まして下さる。

さあ、だから、この主ご自身の歓喜(よろこび)に入ろうではないか。第一の者も第二の者も、報酬を受け取りなさい。富める者も貧しい者も、共に祝いなさい。節制した者も怠けた者も、この日を喜びなさい。齋した者もしなかった者も、さあ、いま楽しみなさい。この宴(うたげ)は溢れこぼれんばかりに豊かだ。

さあみんな、おなか一杯に食べなさい。子牛はまるまる肥えているではないか。この宴から空腹で帰ってゆく者が、一人でもいてはいけない。さあみんな、この信仰の宴を楽しみなさい。この慈しみの富を受け取りなさい。

誰も、もう、貧しさを憂いてはいけない。王国が打ち立てられ、すべての人々が招かれているのだから。

誰も、もう、罪のために泣いてはいけない。主の墓から赦しが輝き出したのだから。

誰も、もう、死を恐れてはならない。救世主(ハリストス)の死が私たちを解放したのだから。

ハリストスは死に包囲されたけれども、逆に死を討ち滅ぼした。ハリストスは地獄に降って、地獄を捕らえた。彼は、そのお体に触れた地獄を悔やませた。預言者イサイヤが言った通りだ。「地獄はあなたを組み敷いてしまってから、悔いて悲しんだ」と。

地獄は悲しんだ。そこが空っぽになってしまったから。地獄は悲しんだ。恥をかかされてしまったから。地獄は悲しんだ。葬り去られてしまったから。地獄は悲しんだ。打ち倒されてしまったから。地獄は悲しんだ。縛られてしまったから。

地獄は主の肉体を受け取って、神に向かい合う羽目になってしまった。地獄は地上に生きた者であるハリストスを受け取って、天国に出くわしてしまっただけで、地獄は目に見える肉体を受け取って、見ることのできない者の力に圧倒されてしまった。

死よ、おまえの刺(はり)はどこにいつてしまったのか? 地獄よ、おまえの勝利はどこへいつてしまったのか?

ハリストスは復活して、おまえは失墜した。ハリストスは復活して、悪魔は倒された。

ハリストスは復活して、天使らは歓喜する。ハリストスは復活して、「いのち」は凱旋する。

ハリストスは復活して、墓の中にはもう死者はいない。

ハリストスが死より復活して、死者たちの復活の初穂となったから!

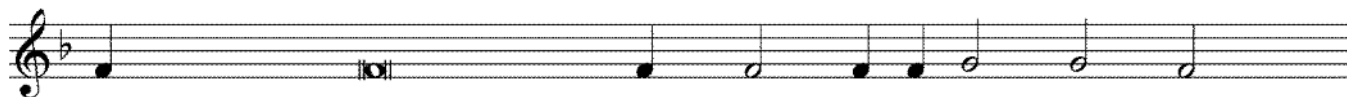
光榮と權柄は、世世に主に歸す アミン。

【 聖人のトロパリ 】

なんぢがくちのおんちようはひのひかりのごとくか
 爾 口 恩 寵 火 光 如 輝
 がやきて、ぜんちをてらし、せかいのために
 全地 照 世界 爲
 むよくのたからをえ得、われらのためにへり
 無 慾 寶 得 我 等 爲 謙
 くだりのたかきをあらわせり。しんぷきんこ
 遜 高 顯 神 父 金 口
 うイオア ンよ、な おなんぢのこ と ば を もってお訓
 猶 爾 言 以 訓
 し えて、こ と ば なるハリストスかみに われら
 言 神 我 等
 の た ま し い の す く わ れ ん こ と を い の り た ま
 靈 救 禱 給
 え。

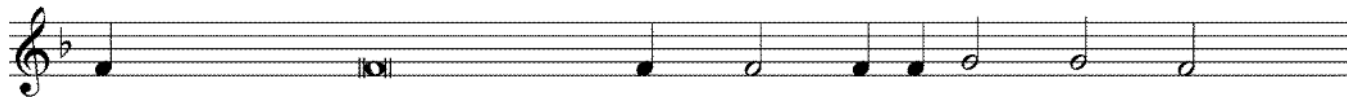
【 重聯禱 】

司祭) ^{かみ}神よ、^{なんぢ}爾の^{おお}大なる^{あわれみ}憐に^よ因りて^{われら}我等を^{あわれ}憐めよ、^{なんぢ}爾に^{いの}禱る、^き聆き^い納れて^{あわれ}憐めよ、
 しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ。
 主 憐 主 憐 主 憐
 司祭) ^{またわ}又我が^{くに}國の^{てん}天皇^う及^{およ}び^{くに}國を^{つかさど}司^{もの}る^{ため}者の^{いの}爲に^{いの}禱る、



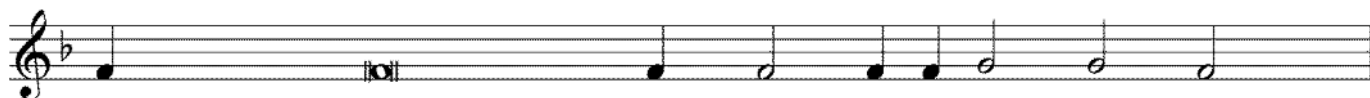
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またきょうかい}又 ^{つかさど}教會を ^{そんき}司 ^{われら}る ^{ぜんにっぽん}尊貴なる ^{ふしゅきょう}我等の ^{およ}全 ^お日本の ^{およ}府主 ^お教 ^{およ}セラフィム、及び ^おハリストスに於
ける ^{ことごと}悉 ^{われら}くの ^{けいてい}我等の ^{ため}兄弟の ^{いの}爲に禱る、



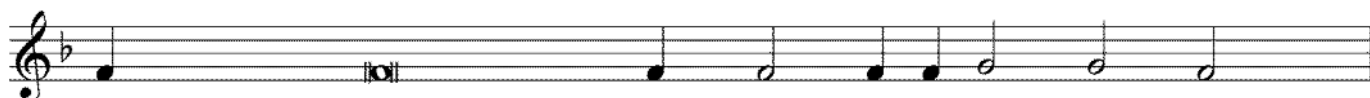
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またつね}又 ^{きおく}恒に ^{ふく}記憶せらるる、^{せいどう}福 ^{こんりゆうしゃ}たるこの ^{およ}聖堂の ^{すで}建 ^{ねむ}立 ^{ことごと}者、及び ^{ふそけい}已に ^{ふそけい}寝りし ^{ふそけい}悉 ^{ふそけい}くの ^{ふそけい}父祖兄
弟、^{てい}此の ^{ところ}處 ^{しよほう}と ^{ほうむ}諸方 ^{せいきょう}とに ^{もの}葬 ^{ため}られたる ^{いの}正 ^{いの}教 ^{いの}の ^{いの}者の ^{いの}爲に禱る、



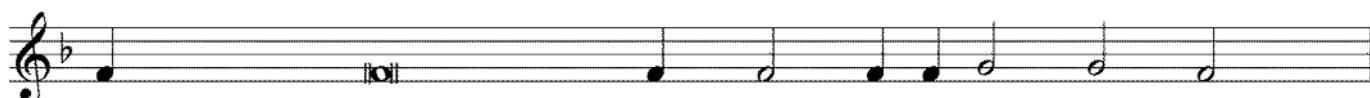
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またかみ}又 ^{しよぼく}神の ^{せいどう}諸 ^{けいてい}僕、^{じれん}この ^{せいめい}聖堂の ^{へいあん}兄弟に、^{そうけん}慈 ^{きゅうしょく}憐、^{けんこ}生 ^{かん}命、^{かん}平 ^{かん}安、^{かん}壮 ^{かん}健、^{かん}救 ^{かん}贖、^{かん}眷 ^{かん}顧、^{かん}寛
宥、^{ゆう}及び ^{およ}諸 ^{しよざい}罪の ^{ゆるし}赦 ^{たま}を ^{ため}賜 ^{いの}わんが ^{いの}爲に禱る、



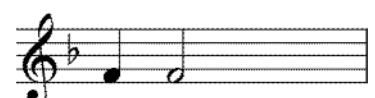
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またこ}又 ^{しそん}此の ^{せいどう}至尊なる ^{もの}聖堂に ^{たてまつ}物を ^{ぜんぎょう}獻 ^{おこな}り、^{これ}善 ^{ろう}業 ^{これ}を行 ^{うた}い、^{およ}之 ^{およ}に ^{およ}勞 ^{およ}し、^{およ}之 ^{およ}に ^{およ}歌 ^{およ}い、^{およ}及 ^{およ}び ^{およ}此
に ^た立 ^{なんぢ}ちて ^{おおい}爾 ^{ゆたか}の ^{あわれみ}大 ^{あお}にして ^{のぞ}豊 ^{もの}なる ^{ため}憐 ^{いの}を ^{いの}仰 ^{いの}ぎ ^{いの}望 ^{いの}む ^{いの}者 ^{いの}の ^{いの}爲 ^{いの}に ^{いの}禱 ^{いの}る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

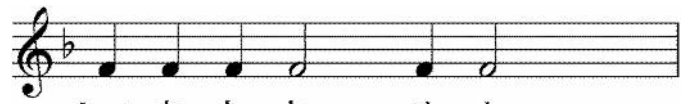
司祭) ^{けだしなんぢ}蓋 ^{じれん}爾 ^{ひと}は ^{あい}慈 ^{かみ}憐 ^{われら}にして ^{なんぢちち}人 ^こを ^{せいしん}愛 ^{けん}する ^{いま}神 ^{いま}なり、^{いま}我 ^{いま}等 ^{いま}光 ^{いま}榮 ^{いま}を ^{いま}爾 ^{いま}父 ^{いま}と ^{いま}子 ^{いま}と ^{いま}聖 ^{いま}神 ^{いま}に ^{いま}獻 ^{いま}ず、^{いま}今
も ^{いつ}何 ^{よよ}時 ^{よよ}も ^{よよ}世 ^{よよ}に、



ア ミ ン。

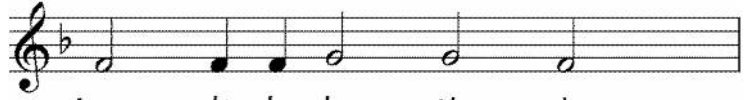
【 増聯禱 】

司祭) ^{われらしゅ}我等 ^{まえ}主 ^わの ^{あさ}前 ^{いのり}に ^ま吾 ^{くわ}が ^{くわ}朝 ^{くわ}の ^{くわ}禱 ^{くわ}を ^{くわ}増 ^{くわ}し ^{くわ}加 ^{くわ}えん、



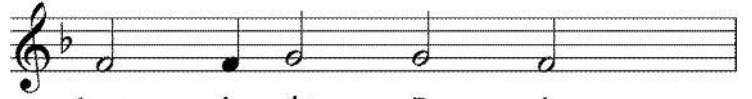
しゅあわれ めよ。
主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも} 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



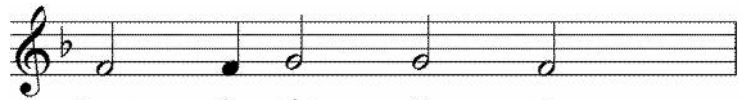
しゅあわれ めよ。
主 憐

司祭) ^{こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと} 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



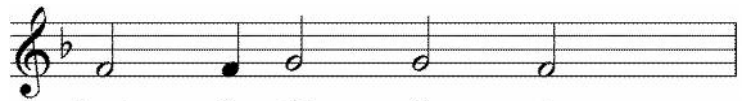
しゅ たま えよ。
主 賜

司祭) ^{へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま しゅ もと} 平安の天使、正しき教師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、



しゅ たま えよ。
主 賜

司祭) ^{われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと} 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



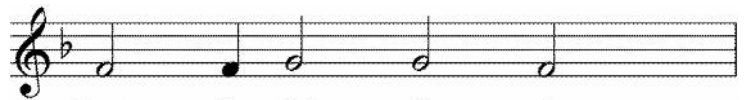
しゅ たま えよ。
主 賜

司祭) ^{われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと} 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



しゅ たま えよ。
主 賜

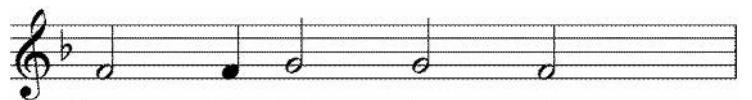
司祭) ^{われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと} 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



しゅ たま えよ。
主 賜

司祭) ^{われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ} 我等の生命の終がハリストスに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハ

^{りすとすのおそ べ しんばん おい よろ ことえ たま もと} リストスの畏る可き審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



しゅ たま えよ。
主 賜

司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、

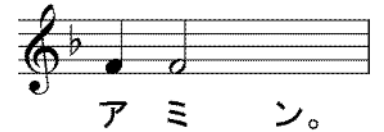
諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等

の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) 蓋爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も

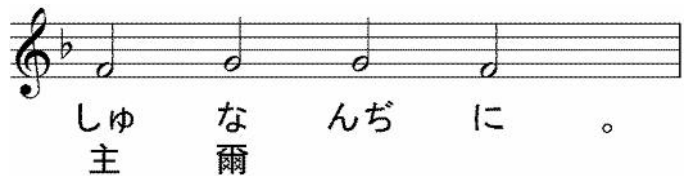
何時も世に、



司祭) 衆人に平安



司祭) 我等の首を主に屈めん



司祭) (黙經) 主我が神、天を屈めて人類を救うが爲に降りし者よ、爾の諸僕と爾の嗣

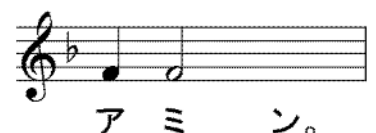
業とを顧み給え、蓋爾の諸僕は、爾畏るべくして人を愛する審判者

に首を屈め、己の頸を伏し、人の助を俟たず、乃爾の憐を俟ち、爾

の救を仰ぐ、求む彼等を恒に護り、彼等を此の夕にも、次て至る夜にも、凡

の敵凡の悪魔の姦謀と虚しき思慮と悪しき意念とより護り給え、

願わくは爾父と子と聖神の國の權柄は讚揚讚榮せられん、今も何時も世に、



司祭) ^{えいち} 睿智、

ふくをくだせ。
福

司祭) ^{えいざい しゅ} 永在の主ハリストス ^{われら かみ つね あが ほ} 我等の神は恒に崇め讃めらる、 ^{いま いつ よよ} 今も何時も世世に、

アミン。

かみよ、わがくにのてんのうとせいきょうか
神 我 國 天 皇 正 教 会

いのおしえとせいきょうのハリストティアニンらをよよに
教 正 教 等 世 世

かためたまえ。
固 給

司祭) ^{し ふくかつ} ハリストス死より復活し、 ^{し もつ し ほろぼ} 死を以て死を滅し、

はかにあるものにいのちをたま
墓 在 者 生 命 賜

えり。しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわ
主 憐 主 憐 主 憐

れめよ、ふくをくだせ。
福 降

司祭) ^{し ふくかつ} 死より復活し、 ^{し もつ し ほろぼ} 死を以て死を滅し、 ^{はか あ もの いのち たま} 墓に在る者に生命を賜いし ^{われら まこと} ハリストス我等の眞の

^{かみ そのしじょう はは およ しよせいじん きとう より} 神は、其至淨なる母、及び諸聖人の祈禱に因て、我等を ^{われら あわれ すく} 憐み救わん。 ^{かれ ぜん} 彼は善にし

^{ひと あい しゅ} て人を愛する主なればなり、

アミン。

ハリスト スしよ りふくか つし、しをもつてしを
死 復 活 死 以 死

ほろぼ おし、はか にあるもの に
滅 墓 在 者

いのちをたま えり。
生 命 賜

ハリスト スしよ りふくか つし、しをもつてしを
死 復 活 死 以 死

ほろぼ おし、はか にあるもの に
滅 墓 在 者

いのちをたま えり。
生 命 賜

ハリスト スしよ りふくか つし、しをもつてしを
死 復 活 死 以 死

ほろぼ おし、はか にあるもの に
滅 墓 在 者

いのちをたま えり。
生 命 賜

われらにもながいきいのちをたま えり、しゅ主
我 等 永 生 命 賜 主

の みっ か め の ふ く か つ を お が む 。
三 日 目 復 活 拜

か み よ 、 わ が く に の て ん の お う 、 お よ び
神 我 國 天 皇 及

く に を つ か さ ど る も の 、 わ れ ら の ふ し ゆ
國 司 者 我 等 府 主

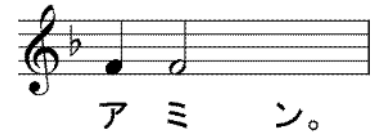
き ょ う セ ラ フ ィ ム 、 お よ び こ と ご と く の せ い き ょ う
教 及 悉 正 教

の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン ら を 、 い く と せ に も ま も り
等 幾 歳 も 護

た ま え 。
給

【 時課 】※第一、三、六時課同じ。

司祭) われら かみ つね あが ほ いま いつ よよ
我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、



【 パスハのトロパリ 第5調 】

ハリスト スしより 死 復 活 つかつし、しを 死 以 して 死
滅 ぼ せ ば、は 墓 中 に 在 る 者 の 命 を 賜 へ ば。

ハリスト スしより 死 復 活 つかつし、しを 死 以 して 死
滅 ぼ せ ば、は 墓 中 に 在 る 者 の 命 を 賜 へ ば。

ハリスト スしより 死 復 活 つかつし、しを 死 以 して 死
滅 ぼ せ ば、は 墓 中 に 在 る 者 の 命 を 賜 へ ば。

【 ハリストスの復活を見て 第6調 】

ハリストスの ふ く か つ を み て 、 せ い な る し ゅ イ ス ス
 復 活 見 聖 主
 ひ と り つ み な き も の を お が む べ え し 、
 獨 罪 者 拜
 ハリスト スや、 わ れ ら なんぢのじゅ う じ か を お が あ
 我 等 爾 十 字 架 拜
 み 、 なんぢのせ い な る ふ く か つ を う たい ほ 讃
 爾 聖 復 活 歌 讃
 む 、 なんぢは わ れ ら の か み な れ ば な あ
 爾 我 等 神
 り 、 なんぢのほ か た の か み を し ら あ ず 、
 爾 外 他 神 知
 た だ なんぢの な を と の お う。 し ん じ ゃ よ、 み な き 来
 唯 爾 名 稱 信 者 皆 来
 た り て 、 ハリストスのせ い な る ふ く か つ を お 拜
 聖 復 活
 が む べ え し 、 じゅ う じ か に て よ ろ こ び は ぜん
 十 字 架 歡 喜 全
 せ か い に の ぞ み た れ ば な り 、 わ れ ら つ ね
 世 界 臨 我 等 恒
 に し ゅ を ほ め あ げ え て 、 そ の ふ く か つ
 主 讚 揚 其 復 活
 を あ が め う た あ わ ん、 し ゅ は じゅ う じ か に く ぎ
 崇 歌 主 十 字 架 釘

うたるるをしのびて、しをもつてしをほろぼ
忍 死 以 死 滅
し しによ お る。
因

【 イパコイ 第8調 応答歌 第8調 】

マ リ ヤ と と も に あ り し お ん な た ち は よ あ け よ
借 在 女 等 黎 明
り は か に き た り 、 い し の う つ さ れ た る を
墓 来 石 移
み て 、 て ん し よ り き け り 、 え い え ん の
見 天 使 聞 永 遠
ひ か り に お る も の を な ん ぞ ひ と の ご と く
光 居 者 何 人 如
し しゃ の う ち に た づ ぬ る 、 ほ う む り の こ ろ
死 者 中 尋 斂 葬 衣
も を み て 、 い そ ぎ て せ か い に つ た え よ 、
見 急 世 界 傳
し ゅ は し を ほ ろ ぼ し て ふ く か つ せ り 、 じん る
主 死 滅 復 活 人 類
い を す く う か み の こ 子 な れ ば な り 。
救 神 子

【 コンダク 第8調 】

し せ ぎ る ハ リ ス ト ス か み よ 、 な ん ぢ は は か に く
死 神 爾 墓 降

だれども ぢごくのちからをやぶり、か勝
 地獄 力 破 勝

つものとしてふくか つかせり、けいこう
 者 復 活 携 香

ぢよによろこべよとい い、なんぢのしとにへ平
 女 慶 言 爾 使 徒 平

いあんをあたえ、ほろびしものにふく
 安 與 亡 者 復

か つかたまえり。
 活 賜 賜 。

【 トロパリ 第8調 】

かたどりがたきハリストスよ、なんぢはからだに
 像 難 爾 體

てはかにあり、たましいにてかみとして
 墓 在 靈 神

ぢごくにあり、とおぞくとともにてんどう
 地獄 在 盜 賊 借 天堂

にあり、ちちおよびせいしんとともにほう
 在 父 及 聖 神 借 寶

ざにありて、いっさいをみてたまえ
 座 在 一 切 を 満 給

り。

こ お え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 。
 光 榮 父 子 聖 神 歸 す 。

ハリス ト オス よ 、 わ れ ら の ふ く かつ の み な も と な る
 我 等 復 活 源

なん ぢ の は か は 、 い の ち を ほ ど こ す も の 、 ち
 爾 墓 生 命 施 者 地

ど う よ り う る わ し き も の 、 じ つ に お よ そ
 堂 美 者 實 凡

の お う の み や よ り も ひ か れ る も の と し て
 王 宮 光 者

あ ら わ れ た り 。
 現

【 生神女讃詞 第8調 】

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 今 何 時 世 世

し じ ょ お し ゃ の せ い せ ら れ た る し ん み ょ う の す ま い よ 、
 至 上 者 聖 神 妙 居 處

よ ろ こ べ 、 け だ し し ょ う し ん ぢ ょ よ 、 なん ぢ に よ
 慶 蓋 生 神 女 爾 縁

り て よ ろ こ び は か く よ ぶ も の に た ま わ り
 欣 喜 斯 呼 者 賜

た り 、 い た り て む て ん な る ぢ ょ さ い よ 、
 至 無 玷 女 宰

な あんぢ は おんな の う ち に しゅく ふ く せ ら れ
 爾 女 中 祝 福

え た り 。

しゅあ わ れ め 、 しゅあ わ れ め 、 しゅあ わ れ め よ 、
 主 憐 主 憐 主 憐

しゅあ わ れ め 、 しゅあ わ れ め 、 しゅあ わ れ め 、 しゅあ
 主 憐 主 憐 主 憐 主 憐

わ れ め 、 しゅあ わ れ め 、 しゅあ わ れ め よ 、 しゅ
 主 憐 主 憐 主

あ わ れ め 、 しゅあ わ れ め 、 しゅあ わ れ め よ 。
 憐 主 憐 主 憐

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
 何 時 世 世

ヘ ル ヴ ィ ム よ り と 尊 う と く セ ラ フ ィ ム に な ら び な く
 尊 並

さ か え 、 み さ お を や ぶ ら ず し て か み こ と
 榮 貞 操 壊 神 言

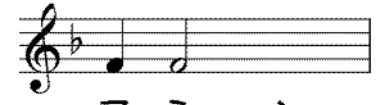
ば を う み し 、 じ つ の し ょ う し ん ぢ よ た る な ん ぢ
 生 實 生 神 女 爾

を あ が め ほ む 。
 崇 讚



しんぷ よ、しゆの な をもって ふく をく だ せ、
 神 父 主 名 以 福 降

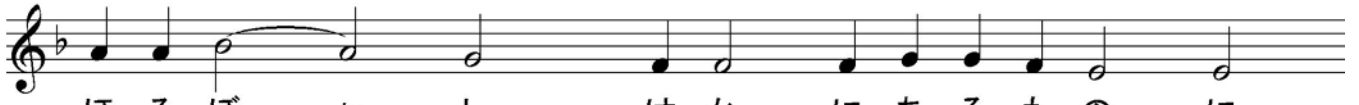
司祭) ^{しゆ}主 ^{われら}イイス ^{かみ}スハリス ^{われら}トス ^わ我等 ^{しよ}の ^{せい}神 ^{しんぷ}よ、^{きとう}吾 ^よが ^{われら}諸 ^{あわ}聖 ^{あわ}神父 ^{あわ}の ^{あわ}祈 ^{あわ}禱 ^{あわ}に ^{あわ}依 ^{あわ}り ^{あわ}て ^{あわ}我 ^{あわ}等 ^{あわ}を ^{あわ}憐 ^{あわ}れ ^{あわ}め ^{あわ}よ、



ア ミ ン。



ハリス ト スし よ り ふ く か つ し、 し を も っ て し を
 死 復 活 死 以 死



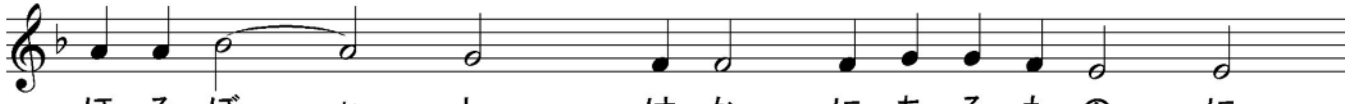
ほ ろ ぼ お し、 は か に あ る も の に
 滅 墓 在 者



い の ち を た ま え り。
 生 命 賜



ハリス ト スし よ り ふ く か つ し、 し を も っ て し を
 死 復 活 死 以 死



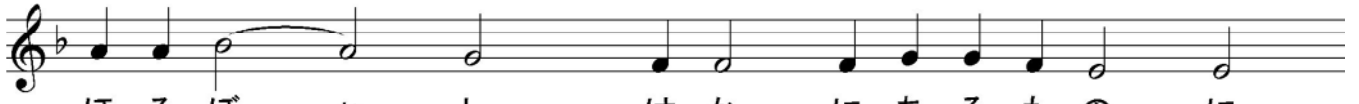
ほ ろ ぼ お し、 は か に あ る も の に
 滅 墓 在 者



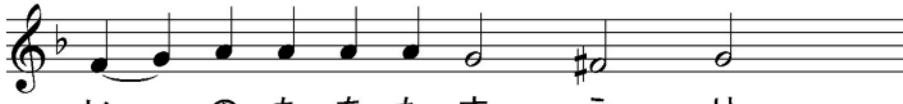
い の ち を た ま え り。
 生 命 賜



ハリス ト スし よ り ふ く か つ し、 し を も っ て し を
 死 復 活 死 以 死



ほ ろ ぼ お し、 は か に あ る も の に
 滅 墓 在 者



い の ち を た ま え り。
 生 命 賜

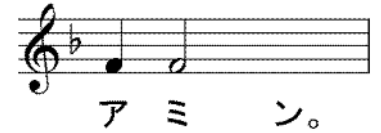
こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今
 い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。 し ゅ あ わ れ め 、 し ゅ
 何 時 世 世 主 憐 主
 あ わ れ め 、 し ゅ あ わ れ め よ 、 ふ く を く だ
 憐 主 憐 福 降
 せ 。

司祭 ^{し ふくかつ し もつ し ほろぼ はか あ もの いのち たま われら まこと} 死より復活し、死を以て死を滅し、墓に在る者に生命を賜いしハリストス我等の眞の
^{かみ そのしじょう はは およ しよせいじん きとう より われら あわれ すく かれ ぜん} 神は、其至淨なる母、及び諸聖人の祈禱に因て、我等を憐み救わん。彼は善にし
^{ひと あい しゅ} て人を愛する主なればなり、

ア ミ ン。

【 聖体礼儀 】

司祭) ^{ちち こ せいしん くに あが ほ} 父と子と聖神の國は崇め讃めらる、^{いま いつ よよ} 今も何時も世に、



司祭) ^{し ふくかつ し もつ し ほろぼ はか あ もの いのち たま} ハリストス死より復活し、死を以て死を滅し、墓に在る者に生命を賜えり。

ハリストス^{し ふくかつ し もつ し ほろぼ はか あ もの いのち たま}死より復活し、死を以て死を滅し、墓に在る者に生命を賜えり。

ハリストス^{し ふくかつ し もつ し ほろぼ はか あ もの いのち たま}死より復活し、死を以て死を滅し、墓に在る者に生命を賜えり。

【 パスハのトロパリ 第5調 】

ハリスト スしよ り ふくか つし 、 しを もつて しを
死 復 活 死 以 死

ほろぼ おし 、 はか に ある もの に
滅 墓 在 者

いのちを たま えり 。
生 命 賜

ハリスト スしよ り ふくか つし 、 しを もつて しを
死 復 活 死 以 死

ほろぼ おし 、 はか に ある もの に
滅 墓 在 者

いのちを たま えり 。
生 命 賜

ハリスト スしよ り ふくか つし 、 しを もつて しを
死 復 活 死 以 死

ほろぼ おし 、 はか に ある もの に
滅 墓 在 者

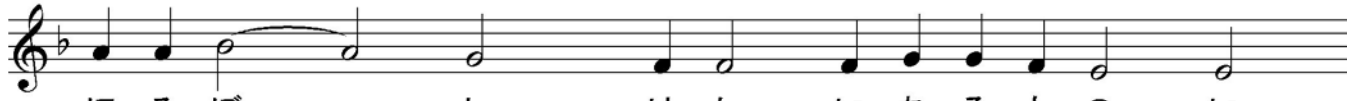


いのちをたまえり。
 生命賜

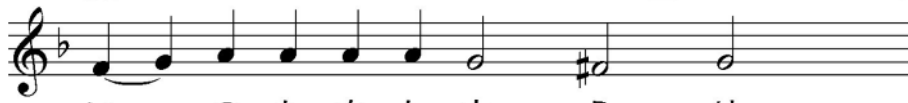
司祭) ^{かみ お そのあだ ち かれ にく もの そのかんばせ に} 神は興き、其 仇は散るべし、彼を悪む者は其 顔より逃ぐべし。



ハリスト スしよりふくかつし、しをもってしを
 死 復 活 死 以 死



ほろぼおし、はかにあるものに
 滅 墓 在 者

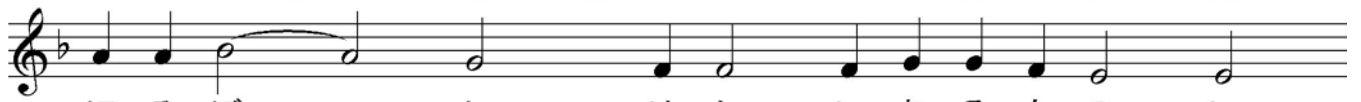


いのちをたまえり。
 生命賜

司祭) ^{けむり ち ごと なんぢかれら ち たま} 煙の散るが如く、爾 彼等を散らし給え。



ハリスト スしよりふくかつし、しをもってしを
 死 復 活 死 以 死



ほろぼおし、はかにあるものに
 滅 墓 在 者



いのちをたまえり。
 生命賜

司祭) ^{ろう ひ よ と ごと か あくにんら かみ かんばせ よ ほろ ただぎじんら たの} 蠟が火に因りて融くるが如く、斯く悪人等は神の 顔に因りて亡び、惟義人等は樂し
 むべし。



ハリスト スしよりふくかつし、しをもってしを
 死 復 活 死 以 死



ほろぼおし、はかにあるものに
 滅 墓 在 者

いのちをたまえり。
生命賜

司祭) ^{しゅ こ ひ つく}主は此の日を作れり、^{われらこれ もつ よるこ たの}我等之を以て歡び樂しまん。

ハリスト スしよりふくかつし、しをもってしを
死 復 活 死 以 死

ほろぼおし、はかにあるものに
滅 墓 在 者

いのちをたまえり。
生命賜

司祭) ^{こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ}光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

ハリスト スしよりふくかつし、しをもってしを
死 復 活 死 以 死

ほろぼおし、はかにあるものに
滅 墓 在 者

いのちをたまえり。
生命賜

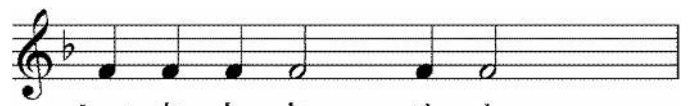
司祭) ^{し ふくかつ し もつ し ほろぼ}ハリストス死より復活し、死を以て死を滅し、

はかにあるものにいのちをたま
墓 在 者 生 命 賜

えり。

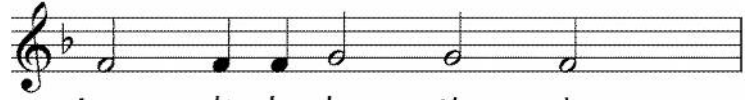
【 大聯禱 】

司祭) ^{われらあんわ しゅ いの}我等安和にして主に禱らん、



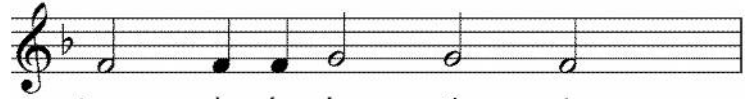
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{う え くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの} 上より降る安和と我等が 靈 の 救 の 爲に主に禱らん、



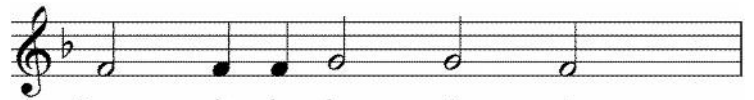
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{ぜんせかい あんわ かみ せい しよきょうかい けんりつ およ しゅうじん ごういつ ため しゅ いの} 全世界の安和、神の聖なる諸 教 會の堅立、及び衆 人の合 一の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

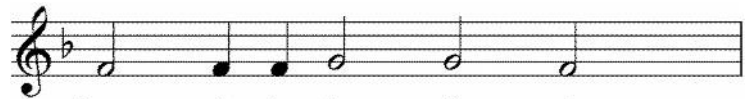
司祭) ^{こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ こころ もつ ここ きた もの ため しゅ いの} 此の聖堂、及び信と 慎 と神を畏る 心 とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

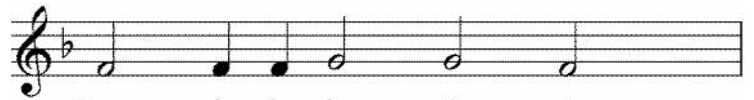
司祭) ^{きょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきょう しさい そんびん} 教 會を 司 る尊貴なる我等の全日本の府主 教 セラフィム、司祭の尊品、ハリス

^{よ ほさいしよく ことごと きょうしゅう およ しゅうじん ため しゅ いの} トスに因る輔祭 職、悉 くの教 衆、及び衆 人の爲に主に禱らん、



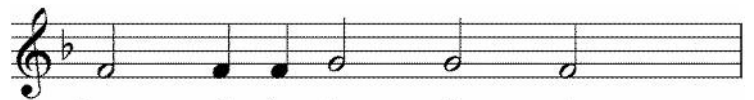
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{わがくに てんのう およ くに つかさど もの ため しゅ いの} 我國の天皇、及び國を 司 る者の爲に主に禱らん、



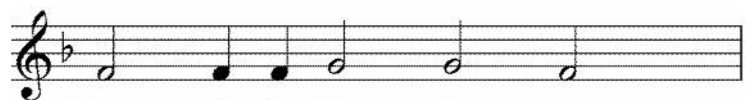
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{こ まち およそ まち ちほう ため およ しん もつ こ うち お もの ため しゅ いの} 此の都邑と 凡 の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{きこうじゅんわ ごこくほうじょう てんかたいへい ため しゅ いの} 氣候 順和、五穀 豊穰、天下 泰平の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び

かれら 救の爲に主に禱らん、



司祭) 我等 諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、

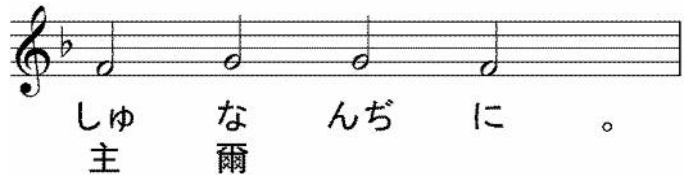


司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



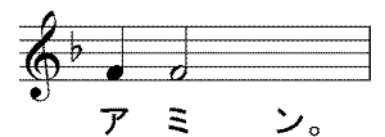
司祭) (黙誦：主我が神よ、爾の權柄は像り難く、光榮は測り難し、爾の仁慈は限

り無く、仁愛は言い難し、求む主宰よ、爾の慈憐に因りて、親ら我等と此の

聖堂とを眷み、我等及び我等と偕に禱る者に爾の豊なる恩澤と爾の

愛憐とを施し給え、)

司祭) 蓋、凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、



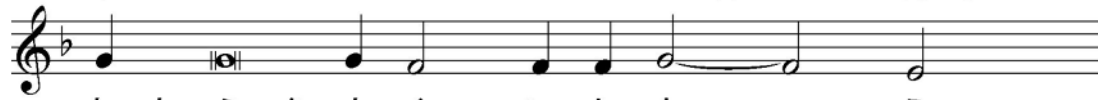
【 第一アンティフォン 第65聖詠 第2調 】



ぜんちよ、かみによろこびてよべ。
全地 神 歡 呼



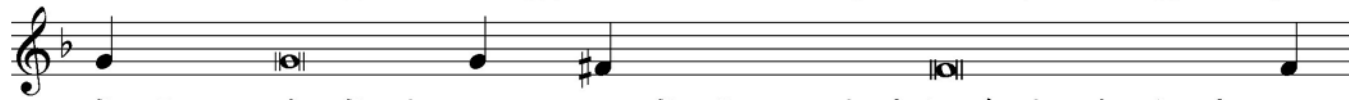
きゅうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによりて
救 世 主 生 神 女 祈 禱 因



われらをすくいたまあえ。
我 等 救 給



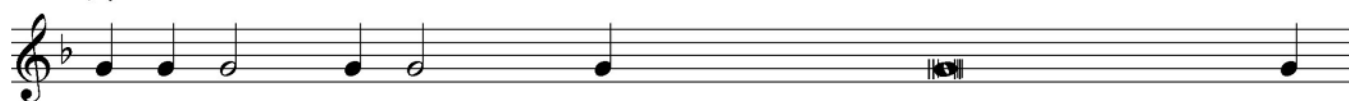
ぜんちよ、かみによろこびてよび、その名のこ光
全地 神 歡 呼 其 名 光



うえいをうたい、こうえいとさんびとをかれに
榮 歌 光 榮 讚 美 彼



きせよ。
歸



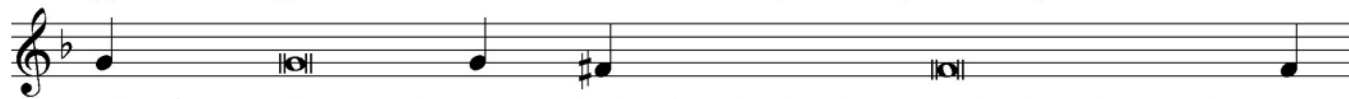
きゅうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによりて
救 世 主 生 神 女 祈 禱 因



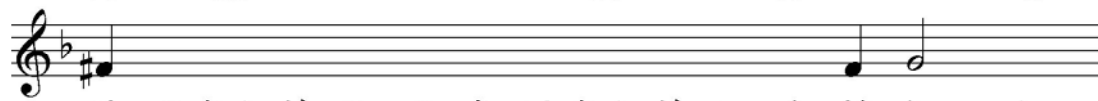
われらをすくいたまあえ。
我 等 救 給



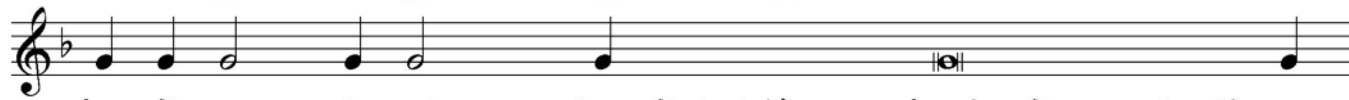
かみにいうべし、なんぢはそのぎょうじにおいて
神 謂 爾 其 行 事 於



なんぞおそるべき、なんぢがちからのおおきによ
何 畏 爾 力 多 由



りてなんぢのてきはなんぢにくだらん。
爾 敵 爾 降



きゅうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによりて
救 世 主 生 神 女 祈 禱 因



 われらをすくいたまあえ。

 我等救給



 しじょうしゃよ、ねがわくはぜんちはなんぢにこうは

 至上者願全地爾叩拝



 いし、なんぢをうたい、なんぢのなにうたわん。

 爾歌爾名歌



 きゅうせいしゅよ、しょうしんぢよのきとうによりて

 救世主生神女祈祷因



 われらをすくいたまあえ。

 我等救給



 こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも

 光榮父子聖神歸今



 いつもよよに、アミン。

 何時世世



 きゅうせいしゅよ、しょうしんぢよのきとうによりて

 救世主生神女祈祷因



 われらをすくいたまあえ。

 我等救給

【 小聯禱 】

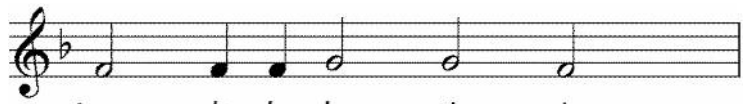
司祭) われらまたまたあんわ しゅ いの 我等復又安和にして主に禱らん、



 しゅあわれめよ。

 主憐

司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

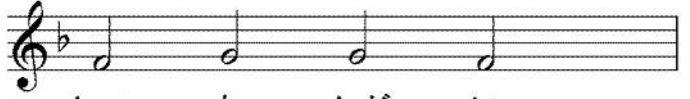


しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ} 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

^{しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら} 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

^{いのち もつ かみ いたく} 生命を以て、ハリストス神に委託せん、



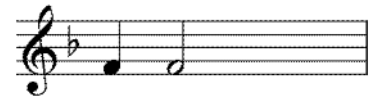
しゅ な んぢ に 。
主 爾

司祭) (黙誦: ^{しゅわ かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ なんぢ きょうかい} 主我が神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會

^{じゅうまん まも なんぢ どう び あい もの せい なんぢ しんせい ちから} の充滿を守り、爾が堂の美なるを愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力

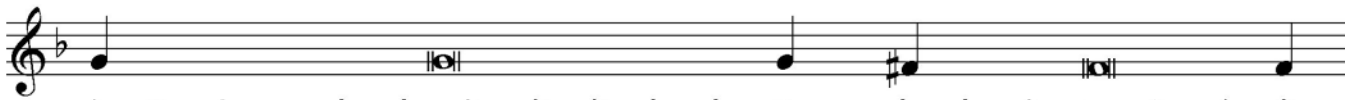
^{もつ かれら こうえい われらなんぢ たの もの のこ なか} を以て彼等を光榮し、我等爾を恃む者を遺す勿れ、)

司祭) ^{けだしけんべいおよ くに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ} 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、

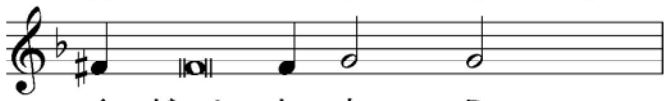


ア ミ ン。

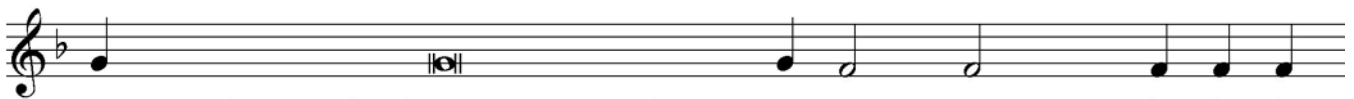
【 第二アンティフォン 第66聖詠 第2調 】



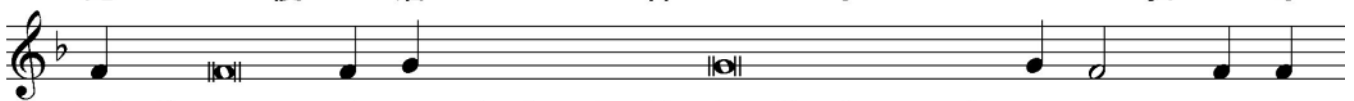
か み よ 、 わ れ ら を あ わ れ み 、 わ れ ら に ふ く を
神 我 等 憐 我 等 福



く だ し た ま え 、
降



し よ り ふ く か つ せ し か み の こ よ 、 わ れ ら
死 復 活 神 子 我 等



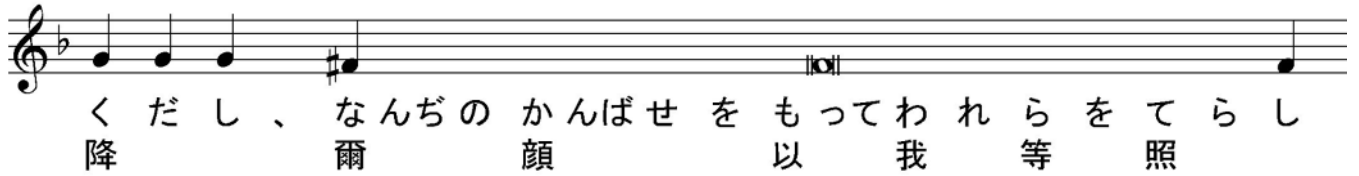
なんぢ に ア リ ル イ ヤ を う と う も の を す く い た 給
爾 歌 者 救 給



ま あ え 。



か み よ 、 わ れ ら を あ わ れ み 、 わ れ ら に ふ く を
神 我 等 憐 我 等 福



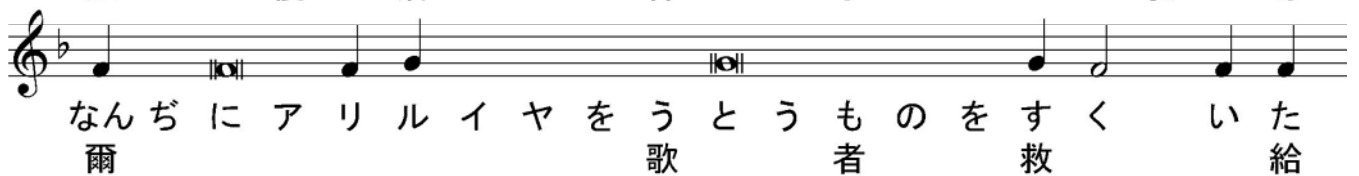
く だ し 、 な ん ぢ の か ん ば せ を も っ て わ れ ら を て ら し
降 爾 顔 以 我 等 照



た ま え 。
給



し よ り ふ く か つ せ し か み の こ よ 、 わ れ ら 等
死 復 活 神 子 我 等



な ん ぢ に ア リ ル イ ヤ を う と う も の を す く い た 給
爾 歌 者 救 給



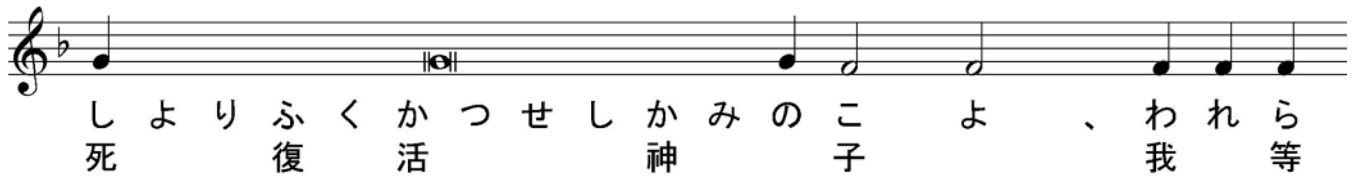
ま あ え 。



な ん ぢ の み ち の ち に し ら れ 、 な ん ぢ の す く い の ば ん
爾 途 地 知 爾 救 萬



み ん の う ち に し ら れ ん た め な り 。
民 中 知 爲



し よ り ふ く か つ せ し か み の こ よ 、 わ れ ら 等
死 復 活 神 子 我 等



な ん ぢ に ア リ ル イ ヤ を う と う も の を す く い た 給
爾 歌 者 救 給



ま あ え 。

かみよ、ねがわくはしょみんなんちをさんようし、しょ
 神 願 諸民爾 讚揚 諸

みんことごとくなんちをさんよう
 民悉 爾 讚揚 せん。

しよりふくかつせしかみのこよ、われら等
 死 復 活 神 子 我 等

なんちにアリルイヤをうとうものをすくいた給
 爾 歌 者 救 給

ま あ え 。

【 神の獨生の子 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今

いつもよよに、アミン。
 何時 世 世

かみのどくせいのこならびにことばよ、
 神 獨 生 子 並 言

しせざるものにしてわれらをすくわんがため
 死 者 我 等 救 爲

あまんじてせいなるしょうしんぢよ・えいていどうぢよ
 甘 聖 生 神 女 永 貞 童 女

マリヤよりみをとり、かみのせいをかえ
 身 取 神 性 易

ずしてひととなりじゅうじかにくぎうたれ、
 人 十 字 架 釘

しをもってしをふみやぶりしハリストスカみよ、
 死 以 死 踏 破 神 神 み よ、

せいさんしゃのいつとしてちちとせいしんとと
 聖 三 者 一 父 聖 神 共

もにさんえいせらるるのしゅよ、われらをす
 讚 榮 主 我 等 救

くいたまあえ。
 給

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわしゅいの
 我等復又安和にして主に禱らん、

しゅあわれめよ、しゅあわれめよ。
 主 憐 主 憐

司祭) かみなんぢおんちようもつわれらたすすくあわれまも
 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しせいしけついたさんびわれらこうえいちよさいしょうしんぢよえいていどうぢよ
 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじんきおくわれらおのれみおよたがいおのおのみもつならびことごとわれら
 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのちもつかみいたく
 生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅなんぢに、
 主 爾

司祭) (黙誦：われらここうどうわごうきとうたまかつにさんにんなんぢなよあつもの
 我等に此の共同和合の祈禱を賜い、曾て二三人爾の名に依りて集まる者に

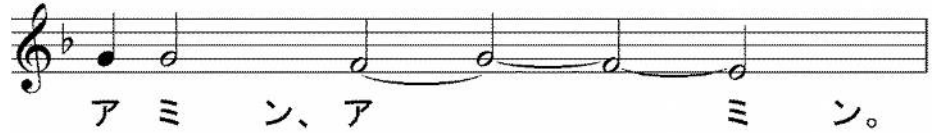
そのもとところたまやくしゅなんぢみづかいまなんぢしよぼくねがいその
 も其求むる所を賜うを約せし主よ、爾親ら今も爾が諸僕の願を其

りえきためかなわれらこんせなんぢしんりしらいせえいえん
 利益の爲に應わしめて、我等に今世には爾の眞理を識り、來世には永遠の

いのちえたま
 生命を得るを給え、)

司祭) ^{けだしなんぢ ぜん} 蓋 爾 ^{ひと あい} は善にして人 ^{かみ} を愛する神なり、^{われらこうえい なんぢちち こ} 我等光榮を 爾 ^{せいしん けん} 父と子と聖神に ^{いま} 献ず、今も

^{いつ よよ} 何時も世に、



【 第三アンティフォン 第67聖詠 第5調 】

かみはおき、そのあだはちるべえ
神興其仇散
し。かれをにくむものはそのかんばせよりに逃
ぐべえし。
ハリストスしよりふくかつし、しをもってしを
死復活死以死
ほろぼおし、はかにあるものに
滅墓在者
いのちをたまえり。
生 命 賜
けむりのちるがごとく、なんぢかれらをち散
煙 散 如 爾 彼 等 散
らしたま あ え。
給
ハリストスしよりふくかつし、しをもってしを
死 復 活 死 以 死

ほろぼおし、はかにあるものに
滅 墓 在 者

いのちをたまえり。
生 命 賜

ろうがひによりてとくるがごとく、かく
蠟 火 因 融 如 斯

あくにんらはかみのかんばせ
悪 人 等 神 顔

によりてほろおび、ただぎじんらはたの
因 亡 惟 義 人 等 樂

しみ、かみのまえによろこぶべえ
神 前 欣

し。

ハリストスしよりふくかつし、しをもってしを
死 復 活 死 以 死

ほろぼおし、はかにあるものに
滅 墓 在 者

いのちをたまえり。
生 命 賜

司祭) (黙誦: 主宰・主・我等の神、諸天に天使及び、天使首の品級と軍隊とを立て

て爾が光榮の奉事者となしし者よ、求む我等の入るに伴いて、彼の我等と

ともつとともなんぢしぜんさんえいせいてんしらいいたたまけだしおよ

そ光榮尊貴伏拝は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、)

司祭) ^{えいち} 睿智、^{つつし} 肅 ^た みて立て、

【 聖入の句 】

イズラ イリのみなもとよりいづるものよ、
源 出 者
きょうかいにおいてしゆかみをあがめほめえ
教 會 於 主 神 崇 讃
よ。

ハリストスしよりふくかつし、しをもってしを
死 復 活 死 以 死
ほろぼおし、はかにあるものに
滅 墓 在 者
いのちをたまえり。
生 命 賜

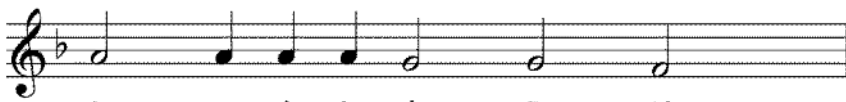
【 ^{イパコイ} 應答歌 】

マリヤとともにありしおんなたちはよあけよ
借 在 女 等 黎明
りはかにきたり、いしのうつされたるを
墓 来 石 移
みて、てんしよりきけり、えいえんの
見 天 使 聞 永 遠
ひかりにおるものをなんぞひとのごとく
光 居 者 の を 何 人 と の 如 く

ししゃのうちにたづぬる、ほむりのころ
 死者中尋、斂葬衣
 もをみて、いそぎてせかいにつたえよ、
 見急世界傳
 しゅはしをほろぼしてふくかつせり、じんる
 主死滅復活人類
 いをすくうかみのこなればなり。
 救神子

【コンダク 第8調】

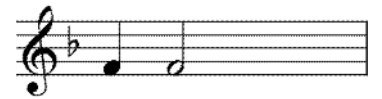
こうえいはちちとことせいしんにきす。い今
 光榮父子聖神歸
 まもいつもよよに、アミン。
 何時世世
 しせざるハリストスカみよ、なんぢははかにく降
 死神爾墓降
 だれどもぢごくのちからをやぶり、か勝
 地獄力破り、か勝
 つものとしてふくかつせり、けいこう香
 者復活携香
 ぢよによろこべよといい、なんぢのしとにへ平
 女慶言爾使徒平
 いあんをあたえ、ほろびしものにふく
 安んをあ與え、亡者に復



か つ を た ま え り 。
活 賜

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行おう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 もつわれらのぞわれらおよじゆうじゆうつみゆるわたましいからだ
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
 しんぢよこせいなんぢよろこびなしよせいじんきとうよ
 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、

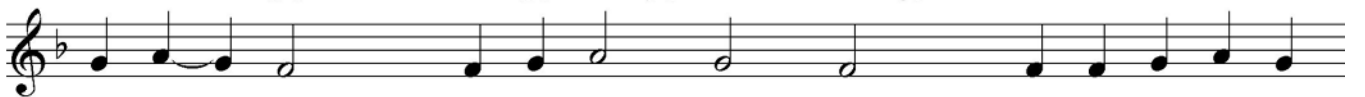


ア ミ ン。

【 聖三祝文に代えて 】



ハリストスに おいて えせんを うけ し も の ハリスト スを
於 洗 受 者



きたあり、ア ril ル イ ヤ、ハリストスに おい
衣 於



て えせんを うけ し も の ハリスト スをきたあり、
洗 受 者 衣

ア リ ル イ ヤ 、ハリスツスに お いて え せんを う
 於 洗 受
 け し も の ハリスツ スを き た あ り 、 ア リ ル
 者 衣
 イ ヤ 、 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き 歸
 光 榮 父 子 聖 神
 す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。ハリスツ
 今 何 時 世 世
 スを き た あ り 、 ア リ ル イ ヤ 。ハリスツスに お 於
 衣
 いて え せんを う け し も の ハリスツ スを き た あ
 洗 受 者 衣
 り 、 ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、第八の調、主は此の日を作れり、我等之を以て歡び樂しまん、

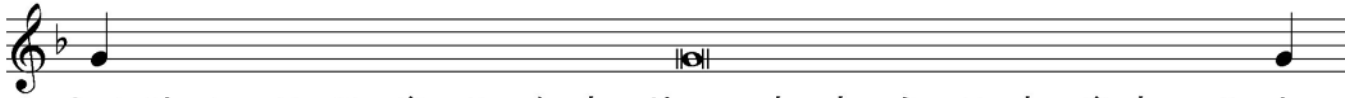
しゅ は こ の ひ を つ く れ り 、 わ れ ら こ れ を も っ て よ
 主 此 日 作 我 等 之 以 歡



ろこびたのしまん。

樂

誦經) ^{しゅ さんえい} 主を讚榮せよ、^{けだしかれ じんじ} 蓋 彼は仁慈にして、^{そのあわれみ よよ} 其 憐 は世世にあればなり、



しゅはこのひをつくれり、われらこれをもってよ
主 此 日 作 我 等 之 以 歡



ろこびたのしまん。

樂

誦經) ^{しゅ このひ つく} 主は此の日を作れり、



われらこれをもってよろこびたのしまん。
我 等 之 以 歡 樂

【 ^{アポストロス} 使徒經 1端 聖使徒行實1章1～8節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしとこうじつ よみ} 聖使徒行實の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{われだいいち しよ つく およ はじ おこな ところ おし ところ} フェオフィルよ、我 第一の書を作りて、凡そイススの始めて行いし所、誨えし所

^{しる そのえら しと せいしん よ めい くだ てん のぼ ひ いた かれ} を録して、其 選びたる使徒に、聖 神に因りて、命を降して、天に升起し日に迄れり。彼

^{くるしみ う のち おお かくしょう もつ かれら まえ おのれ い しめ しじゅうにち} は 苦を受けし後、多くの確 證を以て、彼等の前に己の活くるを視し、四十日の

^{あいだかれら あらわ かみ くに こと かた つい かれら あつ これ めい い} 間 彼等に現れて、神の國の事を語れり。遂に彼等を集めて、之に命じて曰えり、イ

^{はな なんぢら われ き ところ ちち きやく もの ま けだし} エルサリムを離れずして、爾 等が我に聞きし所の、父の許約せし者を待て。蓋 イオア

^{みづ もつ せん きづ なんぢら ひひさ せいしん よ せん う ここ} ンは水を以て洗を授けたり、爾 等は日久しからずして、聖 神に由りて洗を受けん。是に

^{おい かれらあつま かれ と い しゅ なんぢ こ とき おい くに おこ} 於て彼等集りて、彼に問いて曰えり、主よ、爾 は此の時に於てイスライリの國を興す

^{かれ これ い ちち おのれ けんない お ときおよ き なんぢら し ところ あら} か。彼は之に謂えり、父が己の權内に置きし時及び期は、爾 等の知るべき所に非ず。

^{しか せいしん なんぢら のぞ とき なんぢらちから う ぜん} 然れども聖 神の爾 等に臨まん時、爾 等能力を受けて、エルサリム、全イウデヤ、サマ

^{およ ち はて いた わ ため しょうしゃ な} リヤ、及び地の極に至るまで、我が爲に 證者と爲らん。

(比較用 聖書協会共同訳) テオフィロ様、私は先に第一巻を著して、イエスが行い、また教え始めてから、お選びになった使徒たちに聖霊を通して指示を与え、天に上げられた日までのすべてのことについて書き記しました。イエスは苦難を受けた後、ご自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。そして、食事を共にしているとき、彼らにこう命じられた。「エルサレムを離れず、私から聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。ヨハネは水で洗礼(バプテスマ)を授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって洗礼(バプテスマ)を受けるからである。」さて、使徒たちは集まっていたとき、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねた。イエスは言われた。「父がご自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。ただ、あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、私の証人となる。」

【 アリルイヤ 第4調 】

司祭) ^{なんぢ} 爾 ^{へいあん} に平安、

誦経) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦経) アリルイヤ、

Musical notation for the first line of the hymn:

Musical notation for the second line of the hymn:

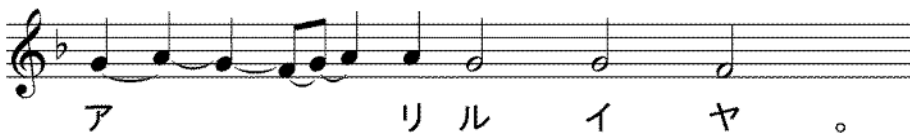
誦経) ^{なんぢお} 爾 ^{あわれみ} 起きて ^た 憐 をシオンに垂れん、

Musical notation for the first line of the second hymn:

Musical notation for the second line of the second hymn:

誦経) ^{しゅ} 主は ^{てん} 天より ^ち 地を ^{かんが} 鑒 みたりに、

Musical notation for the first line of the third hymn:



ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦：人^{ひと}を愛^{あい}する主^{しゅさい} 宰^わよ、我^わが心^{こころ}に神^{かみ}を知る智慧^{しちえ}の 淨^{いさぎよ}き光^{ひかり}を輝^{かがや}かし、我^わが思^し
 念^{ねん}の目^めを啓^{ひら}きて、爾^{なんぢ}が福^{ふく}音^{いん}の教^{おしえ}を悟^{さと}らしめ給^{たま}え、我^わが衷^{うち}に爾^{なんぢ}の福^{ふく}たる 誠^{いましめ}
 を畏^{おそ}るる 畏^{おそれ}をも入^いれて、我^{われら}等^{ことごと}が 悉^{にくたい}くの肉^{よく}體^ふの慾^{およ}を踏^{なんぢ}み、凡^{よろこ}そ爾^よの喜^ぶ
 所^{ところ}を思^{おも}い且^かつ行^{おこな}いて、屬^{ぞくしん}神^{せい}の生^{かつ}活^すを過^{いた}ぐるを致^{たま}させ給^{けだし}え、蓋^{かみ} ハリス^トス神^{かみ}
 よ、爾^{なんぢ}は我^わが 靈^{たましい}と體^{からだ}との光^{こう}照^{しょう}なり、我^{われら}等^{なんぢ} 爾^{なんぢ}と 爾^{なんぢ}の無^{むげん}原^{ちち}の父^{しせい}と至^し聖^{せい}至^{せい}
 善^{ぜん}にして生^{いのち}命^{ほどこ}を施^{なんぢ}す 爾^{しん}の神^{こう}とに光^{えい}榮^{けん}を獻^{いま}ず、今^{いつ}も何^よ時^よも世^よ世^よに、ア^{ミン}。)

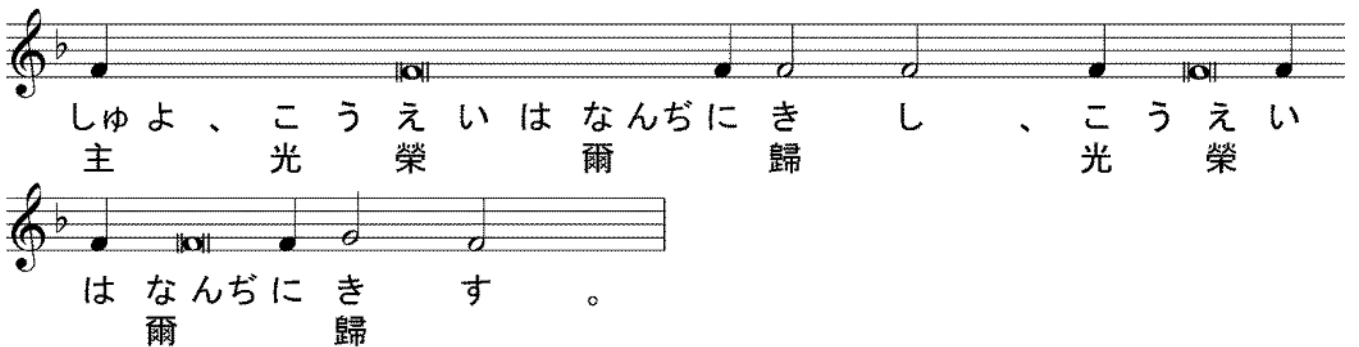
【 エヴァンゲリオン 福音經 イオアン福音書 1端 1章1～17節 】

司祭) 睿^{えいち}智^{つし}、肅^たみて立^{せい}て聖^{ふく}福^{いん}音^{けい}經^きを聴^{しゅう}くべし、衆^{じん}人^{へい}に平^{あん}安^ん、



なんぢのしんにも。
爾神

司祭) イオアン傳^{でん}の聖^{せい}福^{ふく}音^{いん}經^{けい}の讀^{よみ}、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸

司祭) 謹^{つし}みて聴^きくべし、 (※可能ならば、複数の言語で読む習慣がある。)

司祭) 太^{はじめ}初^{ことば}に言^あ有り、言^{ことば}は神^{かみ}と共^{とも}に在^あり、言^{ことば}は即^{すなわち}神^{かみ}なり。是^この言^{ことば}は太^{はじめ}初^{ことば}に神^{かみ}と共^{とも}
 在^あり。萬^{ばん}物^{ぶつ}は彼^{かれ}に由^よりて造^{つく}られたり、凡^{およ}そ造^{つく}られたる者^{もの}には、一^{いつ}も彼^{かれ}に由^よらずして造^{つく}
 られしは無^なし。彼^{かれ}の中^{うち}に生^{いのち}命^あ有り、生^{いのち}命^あは人^{ひと}の光^{ひかり}なり。光^{ひかり}は暗^{くら}に照^{やみ}り、暗^{くら}は之^{これ}を蔽^{おほ}
 わざりき。神^{かみ}より遣^{つか}されし人^{ひと}あり、其^{その}名^なはイオアンなり。彼^{かれ}は證^{しょう}の爲^{ため}に來^{きた}り、光^{ひかり}の
 事^{こと}を證^{しょう}し、衆^{しゅう}人^{じん}をして彼^{かれ}に因^よりて信^{しん}ぜしめん爲^{ため}なり。彼^{かれ}は光^{ひかり}に非^{あら}ず、乃^{すなわち}光^{ひかり}の
 事^{こと}を證^{しょう}せん爲^{ため}に遣^{つか}されたり。眞^{まこと}の光^{ひかり}あり、凡^{およ}そ世^よに來^{きた}る人^{ひと}を照^{てら}す者^{もの}なり。彼^{かれ}嘗^{かつ}

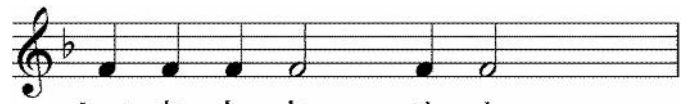
て世に在り、世は彼に由りて造られたり、而して世は彼を知らざりき。己に屬する者に來
 れり、而して己に屬する者は彼を受けざりき。彼を受け、其名を信ずる者には、彼神
 の子と爲る權を賜えり。是れ血氣に由るに非ず、情欲に由るに非ず、人欲に由るに非ず、
 乃神に由りて生れし者なり。言は肉體と成りて、我等の中に居りたり、恩寵と眞
 實とに滿てられたり。我等彼の光榮を見たり、父の獨生子の如き光榮なり。イオアン彼
 の事を證し、呼びて曰えり、我が嘗て、私の後に來る者は、私の前と爲れり、蓋其本
 我より先なる者なりと言ひしは、即斯の人なり。彼の充滿より我等皆恩寵の上
 に恩寵を受けたり。蓋律法はモイセイに由りて授けられ、恩寵と眞實とはイイス
 ハリストスに由りて來れり。

(比較用 聖書協会共同訳) 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初
 めに神と共にあった。万物は言によって成った。言によらずに成ったものは何一つなかった。言の
 内に成ったものは、命であった。この命は人の光であった。光は闇の中で輝いている。闇は光に勝
 たなかった。一人の人が現れた。神から遣わされた者で、名をヨハネと言った。この人は証しのため
 に來た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じる者となるためである。
 彼は光ではなく、光について証しをするために來た。まことの光があった。その光は世に來て、す
 べての人を照らすのである。言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。
 言は自分のところへ來たが、民は言を受け入れなかった。しかし、言は、自分を受け入れた人、そ
 の名を信じる人々には、神の子となる權能を与えた。この人々は、血によらず、肉の欲によらず、
 人の欲にもよらず、神によって生まれたのである。言は肉となって、私たちの間に宿った。私たち
 はその光を見た。それは父の独り子としての光榮であつて、恵みと真理とに滿ちていた。ヨハネ
 は、この方について証しをし、大声で言った。『私の後から來られる方は、私にまさっている。私
 よりも先におられたからである』と私が言ったのは、この方のことである。」私たちは皆、この方の
 滿ち溢れる豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを与えられた。律法はモーセを通して与えられ、
 恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
 主 光 榮 爾 歸 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸

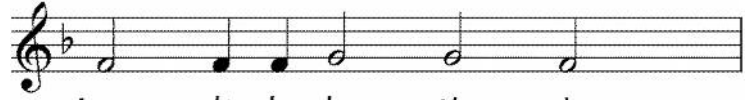
【 重聯禱 】

司祭) われらみなたましい まつと い われら おもい まつと い
 我等皆 靈 を全うして曰わん、我等の思 を全うして曰わん、



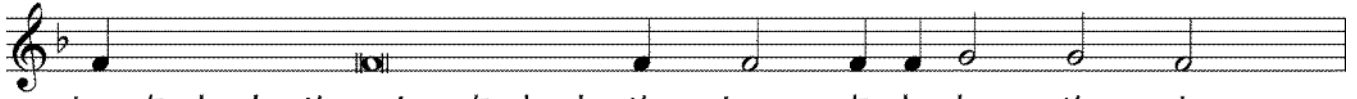
しゅあわれめよ。
主 憐

司祭) ^{しゅぜんのうしや われつそ しみ なんぢ いの き い あわれ} 主全能者、吾が列祖の神よ、爾に禱る聆き納れて憐めよ、



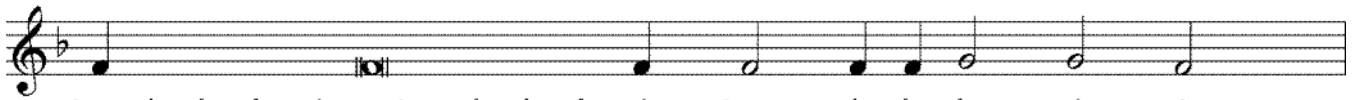
しゅあわれめよ。
主 憐

司祭) ^{しみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ} 神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、



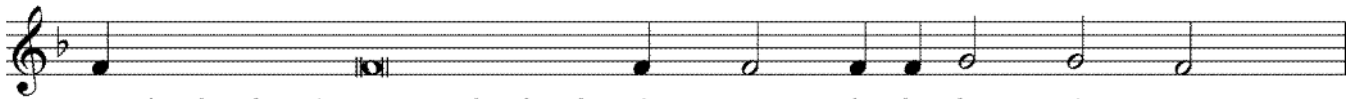
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またわ くに てんのうおよ くに つかさど もの ため いの} 又我が國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またきょうかい つかさど そんなき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう およ お} 又教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、及びハリストスに於
^{ことごと われら けいてい ため いの} ける悉くの我等の兄弟の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またわれら けいてい しよしさい しよしゅうどうしさい およ お われら しゅうけいてい} 又我等の兄弟、諸司祭、諸修道司祭、及びハリストスに於ける我等の衆兄弟の
^{ため いの} 爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またつね きおく ふく しせい せいきょう パトリアルフ せいどう こんりゅうしや およ} 又恒に記憶せらるる、福たる至聖なる正教の総主教、この聖堂の建立者、及び
^{すで ねむ ことごと ふそけいてい こ ところ しよほう ほうむ せいきょう もの ため いの} 已に寝りし悉くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の爲に禱
る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またこの至尊なる聖堂に物を獻り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び此

に立ちて爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、

Musical notation for the first prayer. The melody is on a single staff in G major. Below the staff, the lyrics are: しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。主憐主憐主憐

(※ 特別な災害や特別な感謝がある時、重聯禱にその旨追加する場合があります。その場合も「主憐め、主憐め、主憐めよ。」と応えて歌う。)

司祭) (黙誦：主我が神よ、爾の諸僕より此の熱切の祈禱を受け、爾が憐の多きに因

りて我等を憐み、爾の恵を我等と凡そ爾の豊なる憐を仰ぐ爾の

民に遣し給え、)

司祭) 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今

も何時も世世に、

Musical notation for the Amen prayer. The melody is on a single staff in G major. Below the staff, the lyrics are: アミン。

【 啓蒙者の聯禱 】

司祭) 啓蒙者よ、主に禱るべし、

Musical notation for the first prayer of the enlightenment prayer. The melody is on a single staff in G major. Below the staff, the lyrics are: しゅあわれめよ。主憐

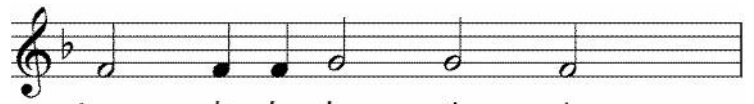
司祭) 信者よ、啓蒙者の爲に禱らん、願くは主は彼等に憐を垂れん、

Musical notation for the second prayer of the enlightenment prayer. The melody is on a single staff in G major. Below the staff, the lyrics are: しゅあわれめよ。主憐

司祭) 眞實の言を以て彼等を啓蒙せん、

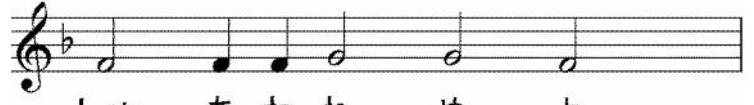
Musical notation for the third prayer of the enlightenment prayer. The melody is on a single staff in G major. Below the staff, the lyrics are: しゅあわれめよ。主憐

司祭) 義の福音經を彼等に啓かん、



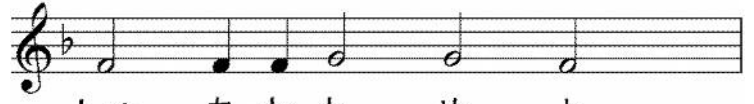
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{かれら そのせい こう すと きょうかい いつ} 彼等を其聖・公・使徒の教會に一にせん、



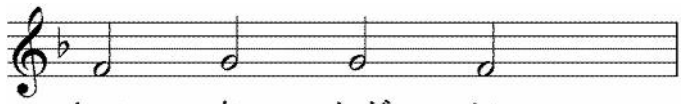
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ かれら すく あわれ たす まも} 神よ、爾の恩寵を以て、彼等を救い憐み助け護れよ、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{けいもうしゃ なんぢら こうべ しゅ かが} 啓蒙者よ、爾等の首を主に屈めよ、



しゅ なんぢ に 。
主 爾

司祭) (黙誦：主我が神、高きに居り卑きを臨み、^{しゅわ かみ たか お ひく のぞ なんぢ どくせいし かみ わ しゅ} 爾の獨生子・神・我が主イイススハリ

^{つかわ にんげん すくい もの なんぢ ぼく けいもうしゃ そのこうべ なんぢ} ストスを遣して人間の救となしし者よ、爾の僕・啓蒙者・其首を爾

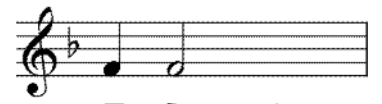
^{かが もの かえり とき したが かれら ふくせい よくぼん しょざい ゆるし ふきゆう} に屈めし者を顧み、時に随いて、彼等に復生の浴盤、諸罪の赦、不朽

^{ころも たま かれら なんぢ せい こう すと きょうかい いつ かれら なんぢ えら} の衣を賜い、彼等を爾が聖・公・使徒の教會に一にし、彼等を爾の選

^{むれ あわ たま} ばれたる群に合せ給え、)

司祭) ^{ねがわ かれら われら とも なんぢちち こ せいしん しそんしえい な さんよう いま いつ} 願くは彼等も我等と偕に、爾父と子と聖神の至尊至榮の名を讃揚せん、今も何時

^{よよ} も世世に、

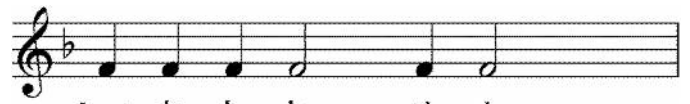


ア ミ ン。

【 信者の聯禱1 】

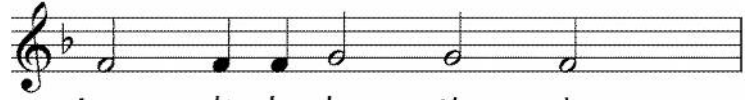
司祭) ^{しゅうけいもうしゃい けいもうしゃい しゅうけいもうしゃい けいもうしゃひとり ただしん} 衆啓蒙者出でよ、啓蒙者出でよ、衆啓蒙者出でよ、啓蒙者一人もなく、唯信

^{じゃまたまたあんわ しゅ いの} 者復又安和にして主に禱らん、



しゅあわれ めよ。
主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちやう もつ われら たす すく あわれ まも} 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

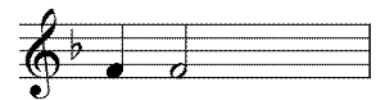


しゅ あわれ めよ。
主 憐

司祭) ^{えいち} 睿智、

司祭) (黙誦: ^{しゅ ばんぐん かみ なんぢ われら いま なんぢ せい さいだん まえ た なんぢ} 主、萬軍の神や、爾が我等に、今も爾の聖なる祭壇の前に立ち、爾の
^{じれん ふふく われら つみ しゅうじん あやまち ため きとう ゆる たま} 慈憐に俯伏し、我等の罪と衆人の過との爲に祈禱するを赦し給いしを
^{なんぢ かんしゃ かみ われら いのり い われら なんぢ しゅうじん ため なんぢ} 爾に感謝す、神よ、我等の禱を納れ、我等を爾が衆人の爲に、爾に
^{いのり ねがい むけつ まつり けん た もの たま われらなんぢ せいしん} 祈と願と無血の祭とを獻ずるに勝る者となし給え、我等爾が聖神の
^{ちから こ なんぢ ほうじ ため た もの ていざい つまづき そのりょうしん} 力にて此の爾の奉事の爲に立てし者を、定罪なく、躓なく、其良心の
^{いさぎよ しょう もつ いづれ ときいづれ ところ なんぢ よ かな もの なんぢ} 潔き證を以て、何の時何の處にも爾を籲ぶに適う者となして、爾
^{われら き なんぢ あいれん おお よ われら ため じんじ もの いた} 我等に聴き、爾が哀憐の多きに依りて、我等の爲に仁慈の者となるを致せ
、)

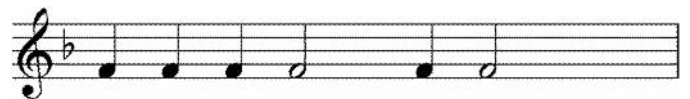
司祭) ^{けだしおよ こうえいそんきふくはい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ} 蓋凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



ア ミ ン。

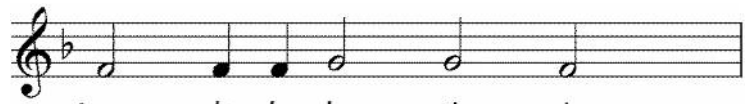
【 信者の聯禱2 】

司祭) ^{われらまたまたあんわ しゅ いの} 我等復又安和にして主に禱らん、



しゅあわれ めよ。
主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちやう もつ われら たす すく あわれ まも} 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しゅ あわれ め よ。
主 憐

司祭) ^{えいち} 睿智、

司祭) (黙誦: ^{ぜん}善にして人^{ひと}を愛する主^{あい}や、我等^{しゅ}復^{われら}且^{また} 数^{かつしば} 爾^{なんぢ}に俯^ふ伏^{ふく}し、爾^{なんぢ}に禱^{いの}る、我等

^{いのり}の禱^{かえり}を顧^{われら}みて、我等^{たましい}の靈^{からだ}と體^{およ}とを凡^{にくたい}そ肉^{れいしん}體^{けがれ}と靈^{いさぎよ}神^いとの穢^よより潔

くし、我等^{われら}に、玷^{きず}なく、定^{ていざい}罪^{なんぢ}なく、爾^{せい}の聖^{さいだん}なる祭^{まえ}壇^たの前^{たま}に立^{かみ}つを賜^{かみ}え、神^{かみ}や、

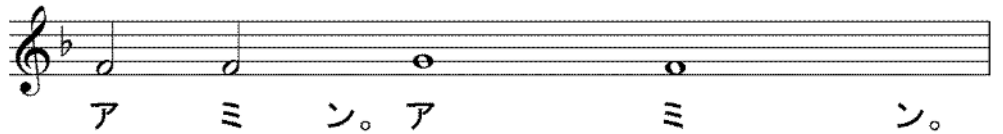
われら^{とも}と偕^{きとう}に祈^{もの}禱^{いのち}する者^{しん}にも、生^{ぞくしん}命^{ちしき}と信^{しんぼ}と屬^{あた}神^{たま}の智^{かれ}識^かとの進^え歩^{たま}を與^{たま}え給^{たま}え、彼

等^らが常^{つね}に畏^{おそれ}と愛^{あい}とを以^{もつ}て爾^{なんぢ}に務^{つと}めて、玷^{きず}なく、定^{ていざい}罪^{なんぢ}なく、爾^{せい}の聖^{せい}機^き密^{みつ}を

う^う領^{なんぢ}け、爾^{てんごく}の天^い國^たに入^{もの}るに勝^えうる者^{たま}となるを得^{たま}せしめ給^{たま}え、)

司祭) 我等^{われら}常^{つね}に 爾^{なんぢ}が權^{けん}柄^{べい}の下^{もと}に護^{まも}られて、光^{こう}榮^{えい}を 爾^{なんぢ}父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{しん}に獻^{けん}ずるが爲^{ため}なり、

いま いつ よよ
今も何時も世に、



ア ミ ン。ア ミ ン。

【 ヘルヴィムの歌 】



われら 慎 っ し い ん
我 等 慎 っ し い ん



で ヘル ヴィ ムに の っ と 法



り、 ヘル ヴィ ムに



の 法 お っ と り、

せ い さ んの う た あ
 聖 三 の 歌 た め
 を い の ち を ほ ど
 生 の 命 を 施 せ
 こ す の せ い さ ん
 聖 三
 しゃ に た て ま つ り
 者 獻
 て 、
 こ の お よ の つ と め
 此 の 世 の 勤 勞
 を し り ぞ く べ し
 退
 し り ぞ お く べ え し 。

司祭) (黙誦: 肉體の慾と快樂とに縛られし者は、一も爾光榮の王に來り、或は近
 づき、或は奉事するに堪うるなし、蓋爾に奉事するは、天軍の爲にも大に
 して畏るべきなり、然れども爾は言い難く量り難き爾の仁愛に因りて、本性
 を易えず失わずして人となり、我等の爲に司祭首となり、又萬有の主宰なる
 に縁りて、我等に此の奉事の無血祭の聖事を傳え給えり、蓋主我が神や、爾
 は獨天地の事を宰理す、爾はヘルヴィムの寶座に荷わるる者、セラフィムの主、
 イズライリの王、獨聖にして聖者の中に息う者なり、故に我爾獨善にし
 て善く納るる者に禱る、我罪ありて堪えざる爾の僕を顧み、我が靈と心と

よこしま しりよ きよ われしんびん おんちよう こうむ もの なんぢ せいしん ちから
 を 邪 なる思慮より淨め、我 神品の恩 寵を被れる者を、爾 が聖神の力
 に藉りて、此の 爾の聖なる 食案の前に立ち、爾 が至 淨なる聖體至尊なる聖
 けつ きみつ おこな た もの たま けだしわれこうべ かが なんぢ つ なんぢ
 血の機密を行 うに堪うる者となし給え、蓋 我首を屈めて爾に就き、爾に
 いの なんぢ かんばせ われ さ なか われ なんぢ ぼくしゅう うち しりぞ なか
 禱る、爾の 顔を我より避くる勿れ、我を爾が僕衆の中より却くる勿れ、
 すなわちわれつみあ あた なんぢ ぼく こ さいもつ さき いた たま けだし
 乃 我罪有りて當らざる 爾の僕に此の祭物を獻ぐるを致させ給え、蓋 ハリ
 ストス我が神よ、 爾は獻ずる者と獻ぜらる者、受くる者と頌たる者なり、我
 らこうえい なんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん いのち ほどこ なんぢ しん けん
 等光榮を爾と爾の無原の父と至聖至善にして生命を施す 爾の神とに獻
 ず、いま いつ よよ
 今も何時も世に、)

司祭) (黙誦: 我等奥密にしてヘルヴィムを 像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、
 いまこ よ おもんばかり ことごと しりぞ べ てんし ぐん み にな たてまつ ばん
 今此の世の 慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い 奉る萬
 ゆう おう いただ よ われらおうみつ
 有の王を戴 かんとするに縁る、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ。我等奥密に
 してヘルヴィムを 像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、いまこ よ
 おもんばかり ことごと しりぞ べ てんし ぐん み にな たてまつ ばんゆう おう
 慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い 奉る萬有の王を
 いただ よ われらおうみつ
 戴 かんとするに縁る、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ。我等奥密にしてヘルヴ
 ムを 像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、いまこ よ おもんばかり
 ことごと しりぞ べ てんし ぐん み にな たてまつ ばんゆう おう いただ
 悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い 奉る萬有の王を戴 かんとす
 るに縁る、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ。

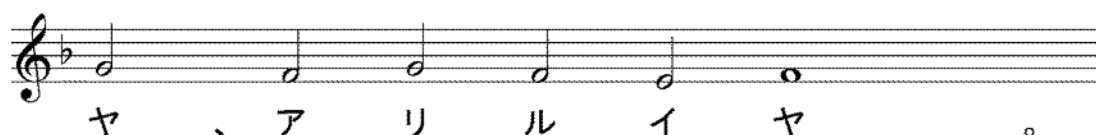
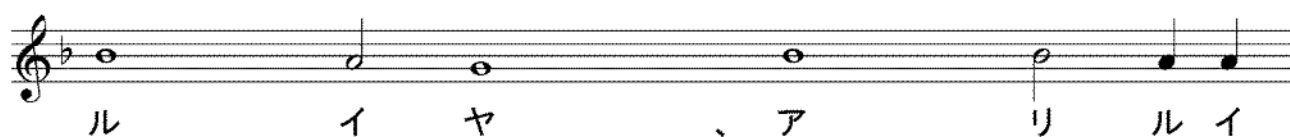
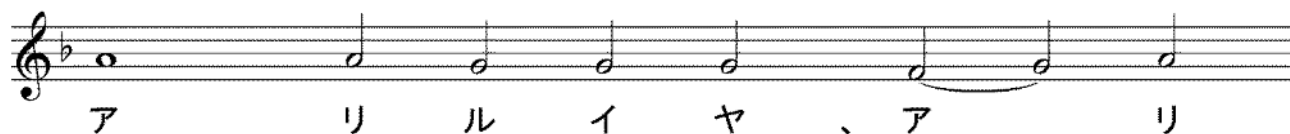
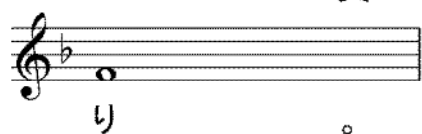
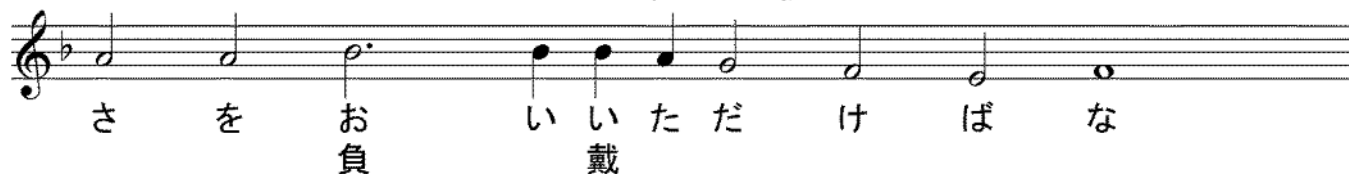
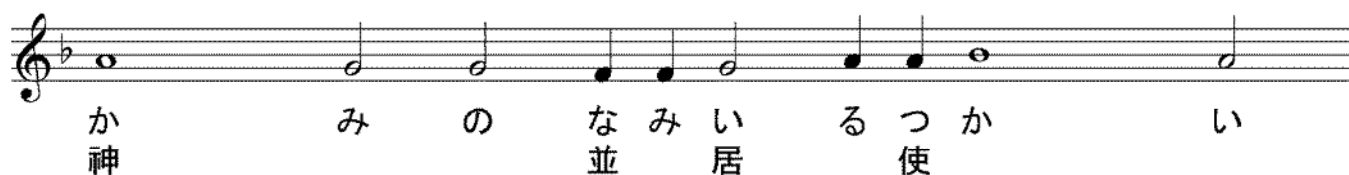
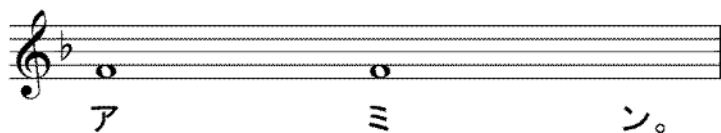
かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ
 神よ、我罪人を淨め給え、神よ、我罪人を淨め給え、神よ、我罪人を淨
 たま
 め給え、)

【 大聖入 】

司祭) 願くは主・神は其國に於て、我が國の天皇及び國を 司る者を恒に記憶せん、
 いま いつ よよ
 今も何時も世に、
 ねがわ しゅ かみ そのくに おい きょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきょう
 願くは主・神は其國に於て、教會を 司る尊貴なる我等の全日本の府主教セ
 つね きおく いま いつ よよ
 ラフィムを恒に記憶せん、今も何時も世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい すで ねむ ふしゅきょう ふしゅきょう ふしゅ
願 くは主・神は其國に於て、已に寢りし府主教 セルギイ、府主教 イリネイ、府主
きょう ふしゅきょう ふしゅきょう だいしゅきょう しゅきょう
教 ウラディミル、府主教 フェオドシイ、府主教 ダニイル、大主教 ニコライ、主教
ニコライ、主教 ペトル、(及び殊に記憶せらるる 某) 我等の已に寢りし家族、兄弟
しまい もろもろ えんしゃ ほうゆうら つね きおく いま いつ よよ
姉妹、諸の縁者、朋友等を恒に記憶せん、今も何時も世世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい なんぢしゅうせいきょう ら およ こと きおく
願 くは主・神は其國に於て、爾衆正教のハリストティアニン等(及び殊に記憶
せらるる 某) を恒に記憶せん、今も何時も世世に、



司祭) (黙誦: 尊とうときイオシフは爾なんぢの潔いさぎよき身を木より下し、淨きよき布ぬのに裹つつみ、香こうりょう料おほにて覆

い、新あらたなる墓はかに藏おさめり、

ハリストスよ、爾なんぢは神かみなるにより、體からだにて墓はかに在り、靈あにて地獄ぢごくに在り、

右盜うとうと偕ともに天堂てんどうに在り、父ちちと聖せいしん神ともと共に寶座ほうざに在り、限かぎりなき者ものとして一切いつさい

を満みて給たまえり、

ハリストスよ、我わが復ふくかつ活いづみの泉なんぢたる爾はかの墓いのちは、生命ほどこを施ものす者ちどう、地堂うるわより美

しき者もの、実じつに如何いかなる王おうの宮みやよりも耀かがやける者ものと顯あらわれたり、

尊とうときイオシフは爾なんぢの潔いさぎよき身を木より下し、淨きよき布ぬのに裹つつみ、香こうりょう料おほにて覆

い、新あらたなる墓はかに藏おさめり、

主しゅよ、爾なんぢの恵めぐみに因よりて恩おんをシオンたに垂たれ、イエルサリムじょうえんの城た垣たまを建たて給たまえ、

其そのとき時に爾なんぢ義ぎの祭まつり、獻ささげ物ものと燔やきまつり祭よろこを喜うび饗そのときけん、其ひとびと時に人なんぢ人の爾の

祭壇さいだんに犢こうしを奠そなえんとす、)

【 増聯禱 】

司祭) 我われ等らしゅ主まえのわ前いのりに吾まが禱くわを増まし加くわえん、



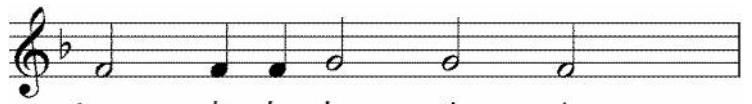
司祭) 獻ささげたる尊とうとき祭品さいひんの爲ために主しゅに禱いのらん、



司祭) 此この聖堂せいどう、及および信しんと慎つつしみと神かみを畏おそる心こころとを以もつて此こに來きたる者ものの爲ために主しゅに禱いのらん、

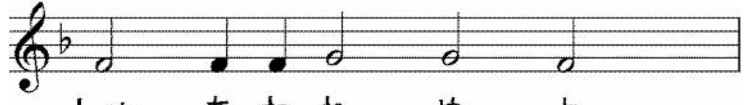


司祭) 我われ等ら諸もろの憂うれい愁いかりと忿怒あやうきと危難まぬかとを免ためるが爲しゅに主いのに禱のらん、



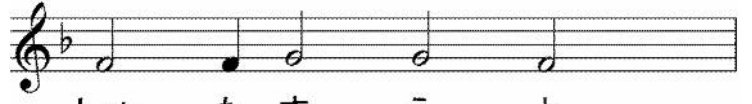
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも}
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと}
此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) ^{へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま しゅ もと}
平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、



しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) ^{われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと}
我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



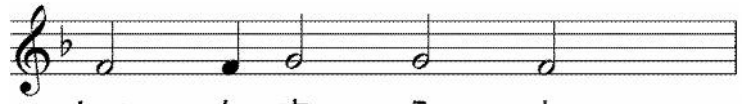
しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) ^{われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと}
我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) ^{われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと}
我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) ^{われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ}
我等の生命の終がハリストスに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハ

^{おそ しんばん おい よろ こたえ たま もと}
リストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、

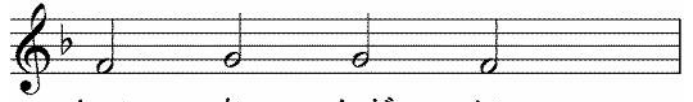


しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、

諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等

の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ な ん ぢ に 。
主 爾

司祭) (黙誦：主・神・全能者、獨聖にして心を盡して爾を籲ぶ者より讚美の祭を

受くる者よ、我等罪人の禱をも受けて爾の聖なる祭壇に携え、我等を、

我が罪と衆人の過との爲に、爾に獻物と屬神の祭とを獻ずるに勝

うる者となし給え、我等に爾の前に恩寵を得せしめて、我等の祭は爾に

善く納れらる者となり、爾が恩寵の善神は臨みて、我等の中と此の供えら

れたる祭品と爾の衆人にとに居るを致させ給え、)

司祭) 爾の獨生子の慈憐に因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の神と

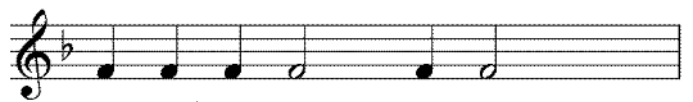
偕に崇め讃めらる、今も何時も世世に、



ア ミ ン。

【 ニケア・コンスタンチヌーポリ全地公会にて採択されし信經 】

司祭) 衆人に平安、

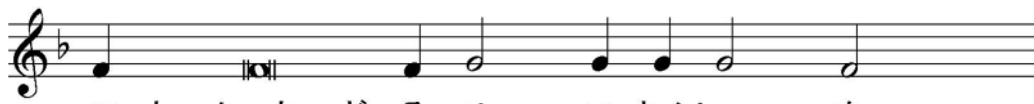


なんぢのし んにも 。
爾 神

司祭) 我等互に相愛すべし、同心にして承け認めんが爲なり、



ち ち と こ と せ い し ん の 、 い っ た い に し
父 子 聖 神 の 一 體



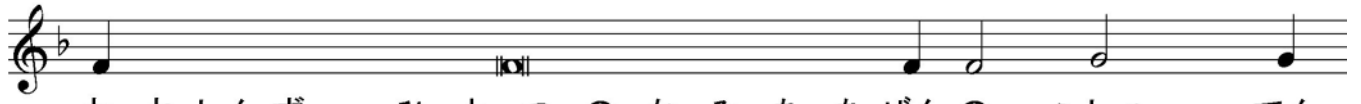
て わ か れ ざ る せ い さ ん し ゃ を 、
分 聖 三 者

司祭) (黙誦: ^{しゅわれ ちから われなんぢ あい しゅ われ かため われ かくれが しゅわれ ちから}主我の力よ、我爾を愛せん、主は我の防固、私の避所なり、主我の力

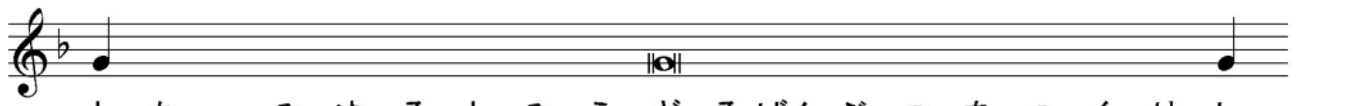
^{われなんぢ あい しゅ われ かため われ かくれが しゅわれ ちから われなんぢ}よ、我爾を愛せん、主は我の防固、私の避所なり、主我の力よ、我爾を

^{あい しゅ われ かため われ かくれが}愛せん、主は我の防固、私の避所なり、)

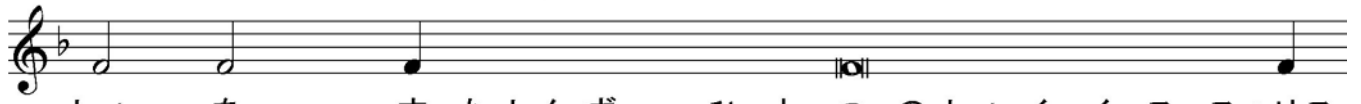
司祭) ^{もんもん かつし き}門、門、敬みて聴くべし、



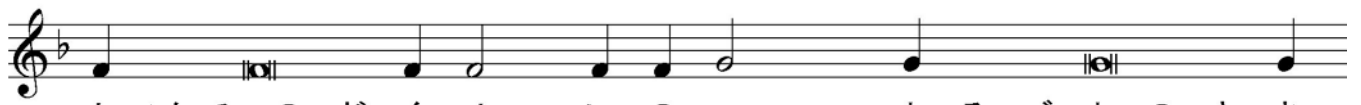
わ れ し ん ず 、 ひ と つ の か み ち ち ぜ ん の う し ゃ 、 て ん
我 信 一 神 父 全 能 者 天



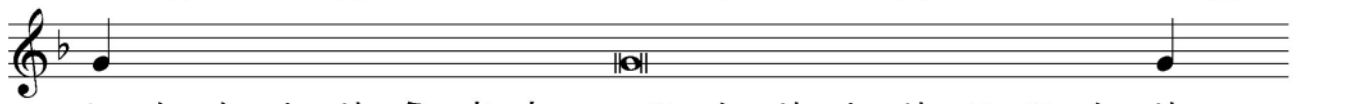
と ち 、 み ゆ る と み え ざ る ば ん ぶ つ を つ く り し
地 見 見 萬 物 造



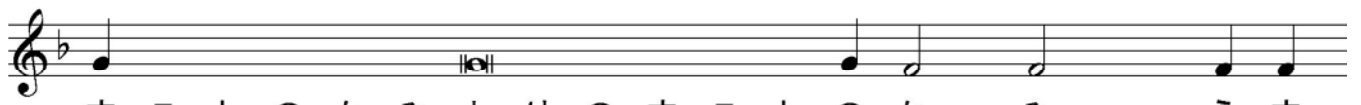
しゅ を 、 ま た し ん ず 、 ひ と つ の しゅ い い す す は り す
主 又 信 一 主



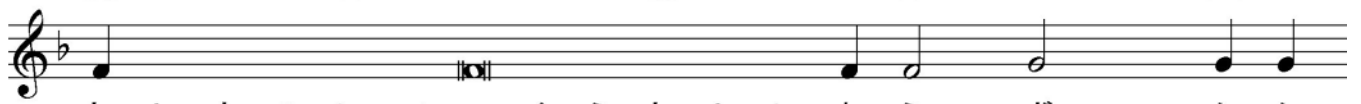
ト ス か み の ど く せ い の こ 子 、 よ ろ づ よ の さ き
神 獨 生 い の 子 萬 世 前



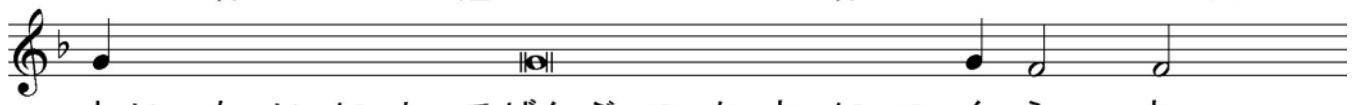
に ち ち よ り う ま れ 、 ひ か り よ り の ひ か り 、
父 生 光 光



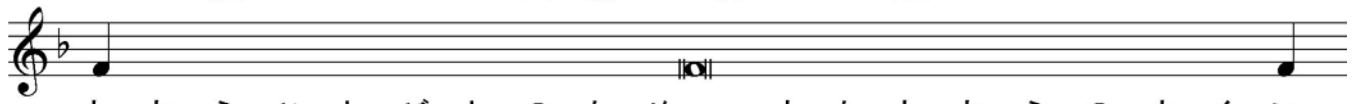
ま こ と の か み よ り の ま こ と の か み 、 う ま
真 神 真 神 生



れ し も の に て つ く ら れ し に あ ら ず 、 ち ち
者 造 非 父



と い っ た い に し て ば ん ぶ つ か れ に つ く ら れ 、
一 體 萬 物 彼 造



わ れ ら ひ と び と の た め 、 ま た わ れ ら の す く い
我 等 人 人 の た め 又 我 等 救

の た め に てん よ り く だ り 、 せ い しん お よ び
 の た め に てん よ り く だ り 、 せ い しん お よ び
 童 貞 女 マ リ ヤ よ り み を と り ひ と と な
 り 、 わ れ ら の た め に ポ ン テ ィ イ ピ ラ ト の と き じゅう
 我 等 の た め に ポ ン テ ィ イ ピ ラ ト の と き じゅう
 じ か に く ぎ う た れ 、 く る し み を う け ほ う
 字 釘 苦 受 葬
 む ら れ 、 だ い さ ん じ つ に せ い し ょ に か な い て
 第 三 日 聖 書 應
 ふ く か つ し 、 てん に の ぼ り 、 ち ち の み ぎ に
 復 活 天 升 父 右
 ざ し 、 こ う え い を あ ら わ し て い け る も の
 坐 光 榮 顯 生 者
 と し せ し も の と を し ん ぱ ん す る た め に ま た き た
 死 者 の と を し ん ぱ ん す る た め に ま た き た
 り 、 そ の く に お わ り な か ら ん を 、 ま た し ん
 其 國 終 又 信
 ず 、 せ い しん し ゅ い の ち を ほ ど こ す も の ち ち よ り
 聖 神 主 生 命 施 者 父
 い で 、 ち ち お よ び こ と と も に お が ま れ ほ 讚
 出 父 及 子 共 拜 讃
 め ら れ 、 よ げ ん し ゃ を も っ て か つ て い い し を 、
 預 言 者 を も っ て か つ て い い し を 、

またしんず、ひとつのせいなるおおやけなるし使
 又 信 一 聖 公 使

とのきょうかいを、われみとむ、ひとつの
 徒 教 會 い を 、 わ れ み と む 、 ひ と つ の

せんれい、もってつみのゆるしをうるを、
 洗 禮 以 罪 赦 得

われのごむししゃのふくかつ、ならびに
 我 望 死 者 復 活 つ 、 な ら び に

らいせいのいのちを、アミン。
 來 世 生 命

【 アナフォラ 】

司祭) ^{ただ た おそ た つつし あんわ せい ささげもの たてまつ} 正しく立ち、畏れて立ち、敬みて安和にして聖なる獻物を奉らん、

したしみのささげもの、ほめあげの
 親 獻 物 讚 揚

まつりを、
 祭

司祭) ^{ねがわ わ しゆ めぐみ かみちち いつくしみ せいしん したしみ なんぢしゅうじん} 願くは我が主イイススハリストスの恩、神父の慈、聖神の親は、爾衆人
 と偕に在らんことを、

なんぢのしんとも、
 爾 神

司祭) ^{こころうえ むか} 心上に向うべし、

しゆにむかえり、
 主 向

司祭) ^{しゆ かんしゃ} 主に感謝すべし、

ち ち と こ と せ い し ん、い っ た い に し て
 父 子 聖 神 一 體

わ か れ ざ る せ い さ ん し ゃ は 、 と お と み お が
 分 聖 三 者 尊 拜

ま る べ し 。

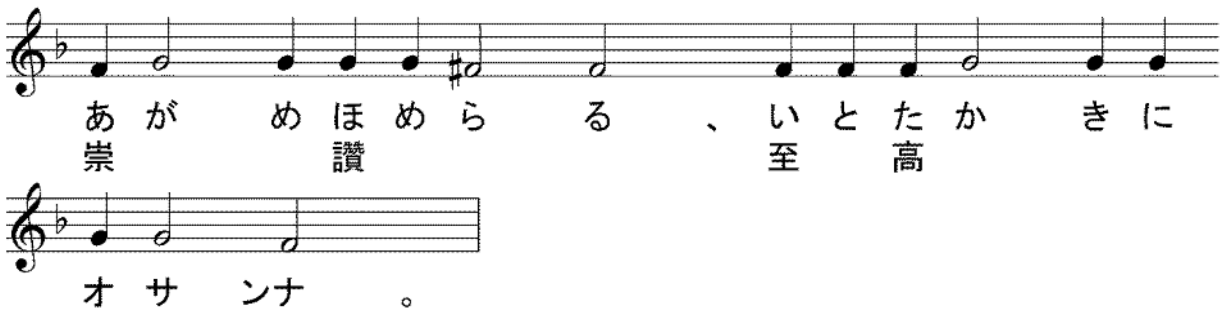
司祭) (黙誦: ^{なんぢ かしょう なんぢ さんよう なんぢ さんび なんぢ かんしゃ なんぢ いつさいおさ}爾を歌頌し、爾を讃揚し、爾を讚美し、爾に感謝し、爾が一切治
^{ところ おい なんぢ ふ おが とうぜん ぎ けだしなんぢ なんぢ どくせいし}むる處に於て爾に伏し拜むは當然にして義なり、蓋爾と爾の獨生子
^{なんぢ せいしん い がた し がた み べ はか べ なが あ}と爾の聖神は、言い難く、知り難く、見る可からず、測る可からず、永く在り、
^{つね かわ かみ なんぢ われら む ゆう おちい もの またおこ およ}恒に變らざる神なり、爾は我等を無より有となし、陥りし者を復起し、及
^{われら てん のぼ なんぢ らいせい くに たま いた ばんじ おこな や}び我等を天に升らしめて、爾が來世の國を賜うに至るまで萬事を行いて止
^{これら ため およ われら し ところ し ところ あらわ ところ あらわ}めず、此等の爲に、凡そ我等が知る所、知らざる所、顯れし所、顯れ
^{ところ われら たま しょおん ため われらなんぢ なんぢ どくせいし なんぢ}ざりし所の我等に賜わりし諸恩の爲に、我等爾と爾の獨生子と爾の
^{せいしん かんしゃ またこ ほうじ ため なんぢ かんしゃ なんぢこれ われら て う}聖神とに感謝す、又此の奉事の爲に爾に感謝す、爾之を我等の手より領
^{あまん たま しか せんせん てんししゅおよ まんまん てんし およ}くるを甘じ給えり、然れども千千の天使首及び萬萬の天使、ヘルヴィム及
^{りくよく もの たもく もの たか かけ もの つばさ そな もの なんぢ まえ}びセラフィム、六翼の者、多目の者、高く翔る者、翼を具うる者は爾の前
 に立ちて、)

司祭) ^{かちうた うた よ さけ い}凱歌を歌い、籲び、叫びて曰う、

せ い せ い せ い な る し ゅ さ ぶ ゃ お フ、 て ん ち に
 聖 聖 聖 主 主 天 地

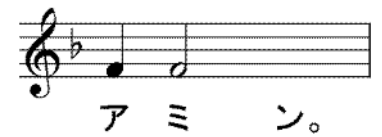
なんぢの こ お え い は あ ま ね し 、 い と た か
 爾 光 榮 普 至 高

き に オ サ ン ナ 、 し ゅ の な に て き た る も の は
 主 名 來 者



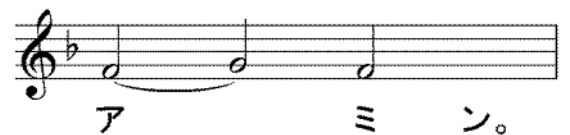
司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい われら こ ふく ぐん とも よ い せい かな しせい}人を愛する主宰よ、我等も此の福たる軍と偕に籲びて曰う、聖なる哉、至聖
^{かな なんぢ なんぢ どくせいし なんぢ せいしん せい かな しせい かな なんぢ}なる哉、爾と爾の獨生子と爾の聖神、聖なる哉、至聖なる哉、爾の
^{こうえい いげん なんぢ なんぢ せかい あい なんぢ どくせいし たま いた およ}光榮は威嚴なり、爾は爾の世界を愛して、爾の獨生子を賜うに至り、凡
^{これ しん もの ちんりん まぬか えいせい え かれきた およ われら お}そ之を信ずる者に沈淪を免れて永生を得せしむ、彼來りて、凡そ我等に於
^{ていせい せいぜん わた よ ただ い みづか おのれ せかい いのち たため}ける定制を成全し、付されし夜、正しく言えば親ら己を世界の生命の爲に
^{わた よ そのせい しじょうむてん て へい と かんしゃ しゅくさん せいせい}付しし夜、其聖にして至淨無玷なる手に餅を取り、感謝し、祝讃し、成聖
^{さ そのせい もんとおよ しと あた い}し、擘きて其聖なる門徒及び使徒に予えて曰えり、)

司祭) ^{と くら これわ たい なんぢら たため さ もの つみ ゆるし え いた}取りて食え、是我が體、爾等の爲に擘かるる者、罪の赦を得るを致す、



司祭) (黙誦: ^{おなじ ばんさん のち しゃく と いわ}同く晚餐の後に爵を執りて曰く、)

司祭) ^{みなこれ の これわれ しんやく ち なんぢら およ おお ひと たため なが もの つみ ゆるし}皆之を飲め、是我の新約の血、爾等及び衆くの人爲に流さるる者、罪の赦を
^{え いた}得るを致す、



司祭) (黙誦: ^{ゆえ われら こ すくい ほどこ いましめ およ およ われら たため あ こと すなわちじゅう}故に我等此の救を施す誠、及び凡そ我等の爲に有りし事、即十
^{じか はか だいさんじつ ふくかつ てん のぼ こと みぎ ざ こと こうえい さいど こうりん}字架、墓、第三日の復活、天に升る事、右に坐する事、光榮なる再度の降臨
^{きおく}を記憶して、)

司祭) ^{なんぢ たまもの なんぢ しょぼく しゅう たためいつさい たため なんぢ たてまつ}爾の賜を、爾の諸僕より、衆の爲一切の爲に爾に獻りて、

しゆ 主 う や あ、 な んぢ
 を あ 崇 が め う た い、
 な んぢ を ほ め め あ
 げ、 な んぢ に か んしゃ
 感 謝 し、 わ 我 が か 神
 み や な んぢ に い の 禱、
 な んぢ に い の 禱、
 る。

司祭) (黙誦: われらまたなんぢ これいち むけつ ほうじ けん ねが いの せつ もと なんぢ の
 聖 神を我等及び此の奠えたる祭品に遣し給え、)

司祭) (黙誦: だいさんじ なんぢ しせいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら と
 第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取り

あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた かみ いさぎよ
 上ぐること勿れ、尚我等爾に祈る者の衷に之を新にせよ、神よ、潔き
 こころ われ つく ただ たましい われ うち あらた たま
 心を我に造り、正しき靈を我の衷に改め給え、

だいさんじ なんぢ しせいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら と
 第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取

あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた われ なんぢ
 り上ぐること勿れ、尚我等爾に祈る者の衷に之を新にせよ、我を爾の

かんばせ お なか なんぢ せいしん われ と あ なか
 顔より逐うこと勿れ、爾の聖神を我より取り上ぐること勿れ、

だいさんじ なんぢ しせいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら と
第三時に 爾の至聖神を 爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取

あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた
り上ぐる事勿れ、尚我等 爾に祈る者の衷に之を新にせよ、)

司祭) この餅を將て、 爾のハリストスの尊體と成し、アミン。

この 爵 中の者を將て、 爾のハリストスの尊血と成し、アミン。

爾の聖神を以て之を變化せよ、アミン。アミン。アミン。

(黙誦: 願くは此は領くる者の爲に、 靈の警醒となり、 諸罪の赦となり、 爾

が聖神の體合となり、 天國を得ることとなり、 爾に於ける勇敢となり、 審案

あるいは定罪とならざらんことを、

また 靈智なる奉事を、 信を以て寝りし元祖・列祖・太祖・預言者・使徒・

傳道者・福音者・致命者・表信者・節制者、及び凡そ信を以て終り

し義なる 靈の爲に 爾に獻ず、)

司祭) 特に至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マ

リヤの爲、

【 常に福に代えて 】

かみのつかい いくしみを みちこうむるもの
神 使 慈 満 被 者
に よんでいわあ く、 いさぎよきしよぢよや、 よおろおこお
呼 日 潔 処 女 慶
べよ、 またいうよろこべよ、 なんぢのこ
又 日 慶 爾 子
みつかめにふうくうかあつし、 しせしものをおこ
三日目 復活 死 者 起
せり、 ひとびとやたのしめよ。
人 人 樂

あ ら た な る イエルサリムや ひ か り ひ か れ よ 、 か み
 新 光 光 神
 の こ う え い な ん ぢ に か が や け ば な り 、
 光 榮 爾 輝
 シ オ ン や た の し み い わ え 、 な ん ぢ い さ ぎ
 樂 祝 爾 潔
 よ き か み の は は や 、 な ん ぢ の う み し し ゅ の
 神 母 爾 生 主
 ふ く かつ を よ ろ こ び た ま あ え 。
 復 活 喜 給

司祭) (黙誦: ^{せいよげんしゃ} 聖預言者・^{ぜんく} 前駆・^{じゅせん} 授洗イオアン、^{こうえい} 光榮にして^{さんび} 讚美たる^{せいしと} 聖使徒、及び^{およ} 爾^{なんぢ} が^{しよ} 諸

^{せいじん} 聖人の^{ため} 爲に^{けん} 獻ず、^{かみ} 神よ、^{かれら} 彼等の^{きとう} 祈禱に^よ 因りて^{われら} 我等を^{かえり} 顧み、^{ならび} 並に^{およ} 凡そ^{えいせい} 永生

^{ふくかつ} の復活の^{のぞみ} 望を^{いだ} 懐きて^{ねむ} 寝りし^{もの} 者を^{きおく} 記憶して、^{かれら} 彼等を^{なんぢ} 爾が^{かんばせ} 顔の^{ひかり} 光の^{てら} 照す

^{ところ} 所に^{あんそく} 安息せしめ^{たま} 給え、

また^{なんぢ} 爾に^{いの} 禱る、^{しゅ} 主よ、^{なんぢ} 爾が^{しんじつ} 眞實の^{ことば} 言を^{ただ} 正しく^{つた} 傳うる^{せいきょうしゃ} 正教者の^{およ} 凡の

^{しゅきょうひん} 主教品、^{およ} 凡の^{しさいひん} 司祭品、^よ ハリストスに^{ほさいひん} 因る^{およ} 輔祭品、及び^{ことごと} 悉くの^{しんぴん} 神品を^き 記

^{おく} 憶せよ、

また^こ 此の^{れいち} 靈智なる^{ほうじ} 奉事を、^{ぜんせかい} 全世界の^{ため} 爲、^{せい} 聖・^{こう} 公・^{しと} 使徒の^{きょうかい} 教會の^{ため} 爲、^{けつじょう} 潔淨

にして^{とうと} 尊く^{いのち} 生を^{わた} 度る^{もの} 者の^{ため} 爲、^わ 我が^{くに} 國の^{てんのう} 天皇及び^{くに} 國を^{つかさど} 司る^{もの} 者の^{ため} 爲に

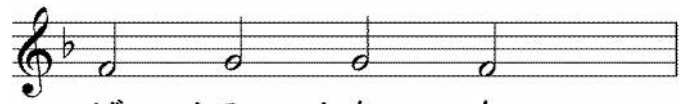
^{なんぢ} 爾に^{けん} 獻ず、^{しゅ} 主よ、^{かれら} 彼等に^{たいへい} 泰平の^{こくせい} 國政を^{たま} 賜え、^{われら} 我等も^{かれら} 彼等の^{へいわ} 平和により、^{およ} 凡

の^{けいけん} 敬虔と^{けつじょう} 潔淨とを^{もつ} 以て、^{てんせいあんぜん} 恬静安然にして^{いのち} 生を^{わた} 度らんが^{ため} 爲なり、)

司祭) 主よ、殊に^{しゅ} 教^{こと} 會^{きょうかい} を^{つかさど} 司^{そんき} る^{われら} 尊貴なる^{ぜんにほん} 我等の^{ふしゅきょう} 全日本の^{きおく} 府主^{かれ} 教^{しゅ} セラフィムを^{きおく} 記憶し、^{かれ} 彼

を^{へいあん} 平安・^{ぶなん} 無難・^{そんき} 尊貴・^{そうけん} 壮健・^{ちょうじゅ} 長壽なる^{もの} 者、及び^{およ} 爾^{なんぢ} が^{しんじつ} 眞實の^{ことば} 言を^{ただ} 正しく^{つた} 傳うる^{もの} 者

として、^{なんぢ} 爾の^{せい} 聖なる^{きょうかい} 教會に^{あた} 與え^{たま} 給え、



ば んみ んを も 。
萬 民

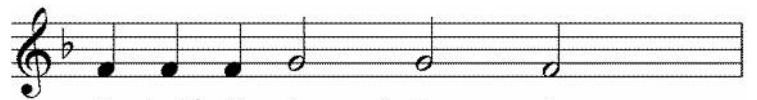
司祭) (黙誦：主よ、我等が居る所しゅ われら お ところの此の都邑と凡の都邑と地方、及び信を以て此の中に
居る者お ものを記憶せよ、主よ、航海する者しゅ こうかい、旅行する者もの りょこう、病を患う者もの やまい、艱難
に遭う者あ もの、擄となりし者もの およ、及び彼等の救を記憶せよ、主よ、爾の諸聖堂しゅ なんぢ しよせいどう
に物を獻り、善業もの たてまつ ぜんぎょうを行う者おこな、及び貧者もの およ ひんしゃを記念する者を記憶し、及び我
等衆人らしゅうじん なんぢに爾の憐あわれみを垂れ給え、)

司祭) 並に我等に、口を一にし心を一にして、爾父なんぢちちと子と聖神こ せいしんの至尊しそんしげん至な嚴さんえいの名を讚榮
讃頌さんしょうするを賜え、今も何時もいま いつ よよ世世に、



ア ミ ン。

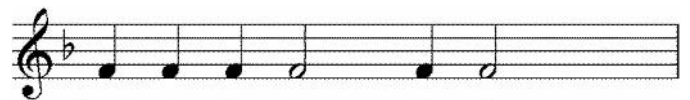
司祭) 願ねがわくは大なる神おおい かみ、我が救主わ きゆうしゅイイススハリストスの憐あわれみは、爾衆人なんぢしゅうじんと偕ともに在ら
んことを、



なんぢの し んと も 、
爾 神

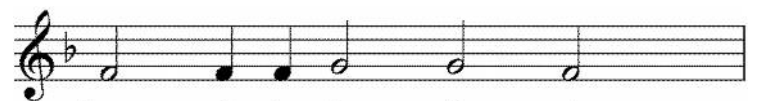
【 増聯禱 】

司祭) 我等諸聖人われらしよせいじんを記憶して、復又安和またまたあんわにして主しゅに禱らん、



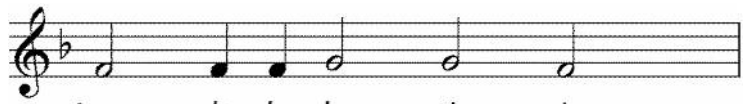
しゅあわれ めよ 。
主 憐

司祭) 已に獻すで けんぜられ及び聖およ せいにせられし尊とうとき祭品さいひんの爲ために主しゅに禱らん、



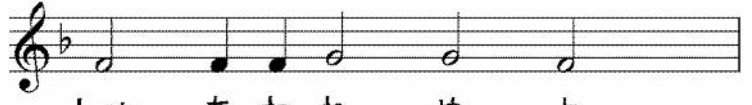
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 人を愛する我が神ひと あい わ かみが、之これを其聖なる天そのせい てんじょう上の無形むけいの祭壇さいだんに置き、屬神お ぞくしんの馨香けいこうとし
て享け、我等に報いて、神妙しんみょうの恩寵おんちようと聖神せいしんの賜たまものとを降すが爲くだに禱らん、



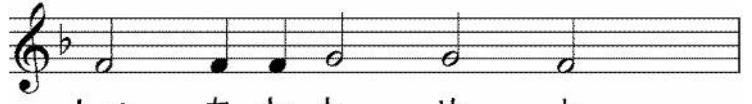
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) われらもろもろ ^{うれい いかり あやうき まぬか} の憂愁と忿怒と危難とを免 ^{ため} るるが爲に主に ^{しゅ いの} 禱らん、



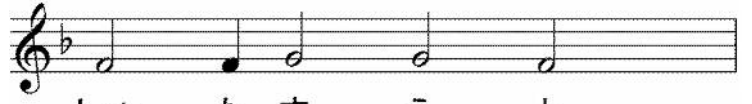
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ} 神よ、爾の恩寵を以て、我等を ^{われら たす すく} 助け救い ^{あわれ まも} 憐み護れよ、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい} 此の日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に ^{しゅ もと} 求む、



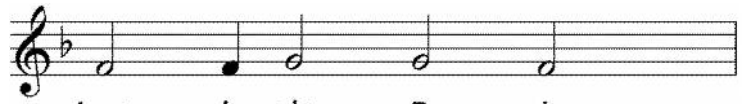
しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) ^{へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま} 平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を ^{しゅ もと} 賜わんことを主に求む



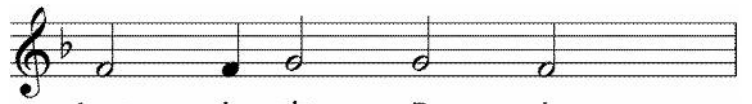
しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) ^{われら つみ あやまち なだ ゆる} 我等の罪と過とを宥め赦さんことを ^{しゅ もと} 主に求む、



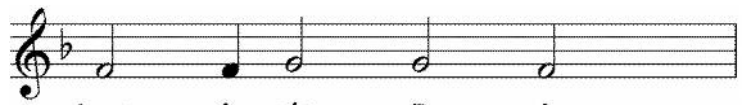
しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) ^{われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま} 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を ^{しゅ もと} 賜わんことを主に求む、



しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) ^{われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ} 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て ^{しゅ もと} 終らんことを主に求む、



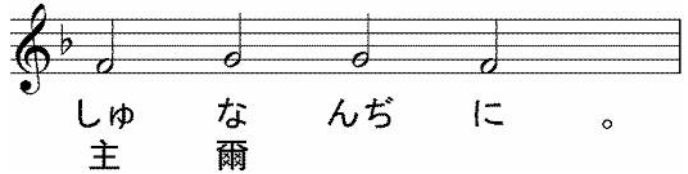
しゅ たま え よ 。
主 賜

司祭) ^{われら いのち おわり} 我等の生命の終が ^{かな やまい はぢ} ハリスティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及び ^{へいあん およ} 及び

リストスの^{おそ}畏るべき^{しんばん}審判に於て^{おい}宜しき^{よろ}對^{こたえ}をなす^{たま}を賜^{もと}わんことを求む、



司祭) 信の^{しん}同^{どう}一^{いつ}と^{せいしん}聖神の^{たいごう}體合とを^{もと}求めて、我等^{われら}己^{おのれ}の身^み及び^み互^{たがい}に^{おのおの}各^みの身を^{もつ}以て、^{ならび}并
に^{ことごと}悉^{われら}くの我等^{いのち}の生命^{もつ}を以て、^{かみ}ハリストス^{いたく}神に委託^{せん}せん、



司祭) (黙誦: 人^{ひと}を愛^{あい}する主^{しゅさい}宰^{われら}よ、我等^わは我^{ことごと}が^{いのち} 悉^{のぞみ}くの生命^{なんぢ}と望^{ゆだ}とを^{ねが}爾^いに委^{ねが}ねて、願^い
い^{いの}祈^{せつ}り切^{もと}に求^{われら}む、我等^{きよ}に、淨^{りょうしん}き良^{もつ}心^{なんぢ}を以^{てんじょう}て、爾^{おそ}が天^{きみつ}上^{おそ}の畏^{きみつ}るべき機密^{きみつ}、
こ^{せい}此^{ぞくしん}の聖^{えん}せられたる^{あづか} 屬^{たま}神^この筵^{つみ}に與^{ゆるし}るを賜^{あやまち}いて、此^{なだめ}れが罪^{なだめ}の赦^{なだめ}、過^{なだめ}の宥^{なだめ}、
せいしん^{せいしん} たいごう^{たいごう} てんごく^{てんごく} しぎょう^{しぎょう} なんぢ^{なんぢ} お^お ゆうかん^{ゆうかん} に於^{しんあんあるい}ける勇^{ていざい} 敢^{ていざい}となりて、審^{ていざい}案^{ていざい} 或^{ていざい} は定^{ていざい} 罪^{ていざい}と
ならざるを^{いた}致^{たま}させ給^ええ、)

【 天主經 】

司祭) 主^{しゅさい}宰^{われら}よ、我等^{いさみ}に勇^{もつ}を以^{つみ}て、罪^えを獲^えずして、敢^{あえ}て爾^{なんぢてん}天^{かみちち}の神^よ父^いを籲^{たま}びて言う^{たま}を賜^ええ、



われらにおいめあるものをわれらゆるすがご
我等債者我等免如
とく、われらのおいめをゆるしたま
我等債免給
え。われらをいざないにみちびかず、
我等誘導
なわれらをきょうあくよりすくいたま
猶我等凶悪救給
え。

司祭) ^{けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ} 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、

ア ミ ン。

司祭) ^{しゅうじん へいあん} 衆人に平安、

なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) ^{なんぢら こうべ しゅ かが} 爾等の首を主に屈めよ、

しゅなんぢに。
主 爾

司祭) (^{み べ おう そのほか がた のうりよく もつ ばんゆう かくてい そのじれん おお} 黙誦: 見る可からざる王、其量り難き能力を以て萬有を畫定し、其慈憐の多き

^{もつ ばんぶつ む ゆう しゅ われらなんぢ かんしゃ しゅさい なんぢみづか} を以て萬物を無より有となしし主よ、我等爾に感謝す、主宰よ、爾親

^{なんぢ こうべ かが もの てん かえり たま けだしけつにく かが あら} ら爾に首を屈めし者を天より顧み給え、蓋血肉に屈めしに非ず、

^{すなわちなんぢおそ かが かが ゆえ しゅさい なんぢ ここ そな もの われら} 乃爾畏るべき神に屈めり、故に主宰よ、爾は此に奠えたる者を、我等

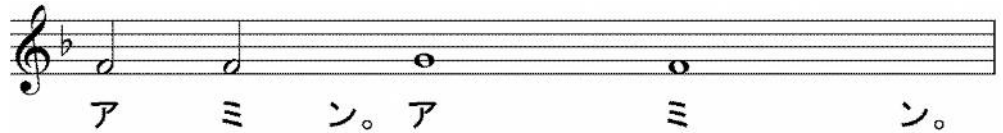
^{しゅうじん ぜん ため かくじん ひつよう おう ひとし わか こうかい もの とも} 衆人の善の爲に、各人の必要に應じて等く頌ち、航海する者と偕に

こうかい りょこう もの ともしょこう れいたい いし やまい うれ もの いや
航海し、旅行する者と偕に旅行し、靈體の醫師として、病を患うる者を醫

たま
し給え、)

司祭) なんぢ どくせいし おんちょう じれん じんあい よ なんぢ かれ しせいしぜん いのち
爾が獨生子の恩寵と慈憐と仁愛とに因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命

ほどこ なんぢ しん ともしんよう いま いつ よよ
を施す爾の神と偕に讃揚せらる、今も何時も世々に



司祭) (黙誦: しゅ われら かみ なんぢ せい すまい なんぢ くに こうえい ほうぎ
主イイススハリストス我等の神よ、爾の聖なる住所と爾が國の光榮の寶座

かえり たま うえ ちち ともしこ み われら ともしん きた
より眷み給え、上には父と偕に坐し、此には見えずして我等と偕に居る者よ、來

われら せい なんぢ けんのう て もつ なんぢ しじょう たい しそん ち われ
りて我等を聖にし、爾の權能の手を以て、爾が至淨の體と至尊の血とを我

ら さづ またわれら もつ しゅうじん さづ たま
等に授け、又我等を以て衆人に授け給え、

かみ われざいにん きよ われ あわれ たま かみ われざいにん きよ われ あわれ
神よ我罪人を淨めて、我を憐み給え、神よ我罪人を淨めて、我を憐み

たま かみ われざいにん きよ われ あわれ たま
給え、神よ我罪人を淨めて、我を憐み給え、)

司祭) つし き せい もの せい ひと
謹みて聽くべし、聖なる物は聖なる人に、



司祭) (黙誦: かみ こひつじ き わか かれ き ぶんり つね くら なが つ
神の羔は剖かれ分たる、彼は剖かれて分離せず、恒に食われて永く盡きず、

すなわちう もの せい
乃領くる者を聖にす、)

※信徒領聖まで、^{レーゲント}聖歌指揮者の指示に随って歌うこと。

(奉事規程が指定しているのは『領聖詞』、すなわち信徒領聖時と同じく「ハリストスの聖体を領け、

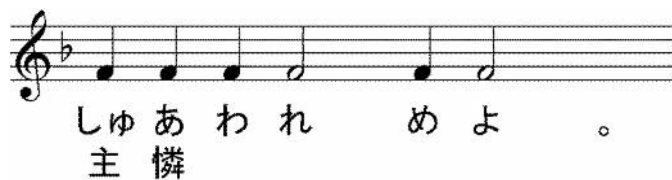
不死の泉を飲めよ。」を繰り返し歌うことです。

日本正教会では『領聖詞』に代えて、イルモスや讃詞「神は興き…」等を歌うことが多いですが、これに奉事規程上の根拠はありません。

歌えるものがない場合は、聖詠經を誦經しても構いません。)

【 乾酪及び雞卵に降福する祝文 】

司祭) ^{しゅ いの}主に禱らん、



司祭) ^{しゅさい しゅ われら かみ ばんぶつ ぞうかしゅ ぞうせいしゅ かた ちち けいらん しゅくふく}主宰・主・我等の神、萬物の造化主・造成主や、堅まれる乳と雞卵とに祝福

^{われら なんぢ いつくしみ まも たま われら こ くら なんぢ ゆたか たまもの なんぢ}して、我等を爾の慈に護り給え、我等が此れを食いて、爾の豊なる賜と爾

^{い がた めぐみ み ため けだしけんぺいおよ くに けんとう こうえい なんぢちち こ}の言い難き恵とに満てられんが爲なり、蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子

^{せいしん き いま いつ よよ}と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

【 信徒領聖 】

司祭) ^{かみ おそ こころ しん もつ ちか きた}神を畏るる心と信とを以て近づき來れ、



全員) ^{しゅ われしん か う みと なんぢ じつ せいかつ かみ こ ざいにん すく ため}主よ我信じ、且つ承け認めて、爾を實にハリストス生活の神の子、罪人を救うが爲

^{よ きた もの しゅうざいにん うちわれだいいち またしん こ すなわちなんぢ しじょう}に世に來りし者となす、衆罪人の中我第一なり、又信ず、此れは乃爾が至淨

^{たい こ すなわちなんぢ しそん ち ゆえ なんぢ いの われ あわれ わ じゆう じゆう}の體、此れは乃爾が至尊の血なりと、故に爾に祈る、我を憐み、我が自由と自由

ならずして、^{ことば おこない し し おか しよざい ゆる たま ならび われ}言と行にて、知ると知らずして、犯しし諸罪を赦し給え、並に我に

^{ていざい なんぢ しじょう きみつ う つみ ゆるし えいせい え いた たま}定罪なく、爾が至淨なる機密を領けて、罪の赦しと永生とを得るを致させ給え、ア

ミン。

かみ こ いまわれ なんぢ きみつ えん あづか もの い たま けだしわれなんぢ あだ き
 神の子よ、今我を爾が機密の筵に與る者として容れ給え、蓋我爾の仇に機
 みつ つ なんぢ ごと せつぶん な すなわちうとう ごと なんぢ う
 密を告げざらん、また爾にイウダの如き接吻を爲さざらん、乃右盜の如く爾を承け
 みと い しゅ なんぢ くに おい われ きおく しゅ いの なんぢ せい きみつ う
 認めて曰う、主よ、爾の國に於て我を記憶せよと、主よ、祈る爾の聖なる機密を領
 わ ため しんあんあるい ていざい れいたい いやし
 くるは、我が爲に審案或は定罪とならず、すなわち靈體の醫とならんことを、アミン。

【 (大パスハの) ^{キノニク} 領聖詞 】 ※ 全員が領聖し畢り、元の位置に戻るまで繰り返す。



司祭) (黙誦：ハリストスの復活を見て、聖なる主イイス・獨罪なき者を拜むべし、ハリ
 斯托スよ、我等爾の十字架を拜み、爾の聖なる復活を歌い讃む、爾は我
 らかみ なんぢ ほかた かみ し ただなんぢ なとな しんじゃ みなきた
 等の神なればなり、爾の外他の神を知らず、唯爾の名を稱う、信者よ、皆來
 りてハリストスの聖なる復活を拜むべし、十字架にて喜は全世界に臨めばな
 り、我等恒に主を讃め揚げて、其復活を崇め歌わん、主は十字架に釘うたる
 るを忍びて、死を以て死を亡ししによる、
 あらた ひか ひか しゅ こうえいなんぢ かがや
 新なるイエルサリムよ、光り光れよ、主の光榮爾に輝けばなり、シオンよ、
 いまいわ たのし なんぢ いさぎよ しょうしんぢょ なんぢ う しゅ ふくかつ よろこ
 今祝いて樂めよ、爾も潔き生神女よ、爾が生みし主の復活を歡び
 たま
 給え、
 ああおおい しせい ああちえ かみ ことば ちから なんぢ
 嗚呼大にして至聖なるパスハ・ハリストスよ、嗚呼智慧と神の言と能力よ、爾
 くに く ひ おい われら なおしたし なんぢ う たま
 が國の暮れざる日に於て、我等に猶親く爾を領けさせ給え
 しゅ なんぢ しそん ちもつ なんぢ しょせいじん きとう よ ここ きおく
 主よ、爾が至尊の血を以て、爾が諸聖人の祈禱に因りて、此に記憶せられ
 もの しょがい あら たま
 し者の諸罪を滌い給え、
 ひと あい しゅさい わ たましい おんしゅ われら こ ひ おい なんぢ てんじょう
 人を愛する主宰、我が靈の恩主よ、我等に、此の日に於ても、爾が天上

ふし きみつ う たま なんぢ かんしゃ われら みち なお われらしゅうじん
の不死の機密を領けさせ給いしを 爾 に感謝す、我等の途を直くし、我等衆 人

なんぢ おそ おそ けんご われら いのち まも われら あゆみ かた たま
を 爾 を畏るるの畏れに堅固にし、我等の生命を護り、我等の 歩 を固め給え、

こうえい しょうしんぢょ えいていどうぢょ およ なんぢ しょせいじん いのり ねがい よ
光榮なる 生 神女・永貞童女マリヤ及び 爾 が諸聖人の 祈 と 願 とに因り

てなり、)

司祭) ^{かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ} 神よ、 爾 の民を救い、 及び 爾 の嗣業 に福を降せ、

ハリスト スしより 死 復 活 つし 、 し を もって し を 死 以 死
ほろぼ おし 、 はか に ある もの に 滅 墓 在 者
い のち を たま え り 。 生 命 賜

司祭) (黙誦: ^{かみ ねがわ なんぢ しょてん うえ あ なんぢ こうえい ぜんち おお われ} 神よ、 願 くは 爾 は諸天の上に擧げられ、 爾 の光榮は全地を蔽わん、 我
^{ら かみ つね あが ほ} 等の神は恒に崇め讃めらる、)

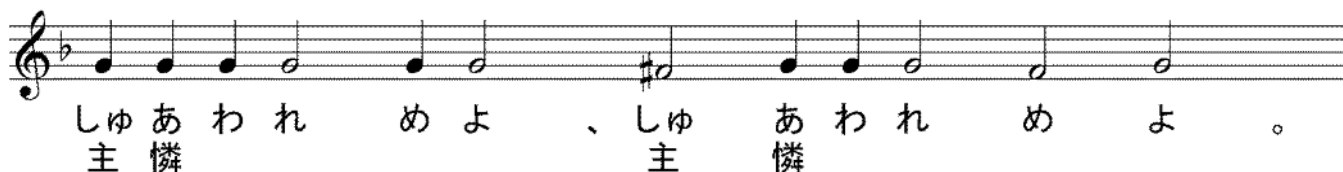
司祭) ^{いま いつ よよ} 今も何時も世に、

ア ミ ン。

ハリスト スしより 死 復 活 つし 、 し を もって し を 死 以 死
ほろぼ おし 、 はか に ある もの に 滅 墓 在 者
い のち を たま え り 。 生 命 賜

司祭) ^{つつし た しんせい しじょう ふし いのち ほどこ てんじょう おそ せい} 謹みて立て、 神聖・至淨・不死にして生命を 施す天 上 の畏るべきハリストスの聖

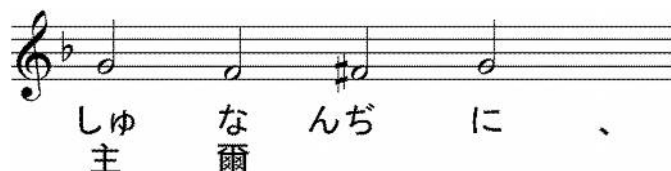
きみつ う よろ しゅ かんしゃ
機密を領けて、宜しく主に感謝すべし、



かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
司祭) 神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救い憐み護れよ、

こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい もと われらおのれ みおよ たがい おのおの
司祭) 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを求めて、我等己の身及び互に各

み もつ ならび ことごと われら いのち もつ かみ いたく
の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



けだしなんぢ われら せいせい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
司祭) 蓋爾は我等の成聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に、



へいあん い
司祭) 平安にして出づべし、



しゅ いの
司祭) 主に禱らん、



なんぢ さんよう もの ふく くだ およ なんぢ たの もの せい しゅ なんぢ たみ すく
司祭) 爾を讃揚する者に福を降し、及び爾を恃む者を聖にする主よ、爾の民を救い、

およ なんぢ しぎよう ふく くだ なんぢ きようかい じゅうまん まも なんぢ どう び あい
及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會の充滿を守り、爾が堂の美なるを愛す

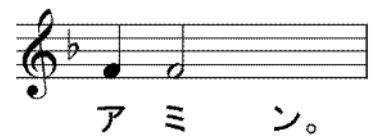
もの せい なんぢ しんせい ちから もつ かれら こうえい およ われらなんぢ たの もの のこ
る者を聖にせよ、爾が神聖の力を以て彼等を光榮し、及び我等爾を恃む者を遺

なか なんぢ せかい なんぢ しよきようかい しよしさい わくに てんのうおよ くに つかさど もの
す勿れ、爾の世界と爾の諸教會と諸司祭と、我が國の天皇及び國を司る者

およ なんぢ しゅうじん へいあん たま けだしおよそ ぜん ほどこし およそ ぜんび たまもの うえ
及び爾の衆人に平安を賜え、蓋凡の善なる施、凡の全備なる賜は、上

なんぢこうめい ちち くだ われらこうえい かんしゃ ふくはい なんぢちち こ せいしん けん
より、爾光明の父より降るなり、我等光榮・感謝・伏拜を爾父と子と聖神に獻

いま いつ よよ
ず、今も何時も世世に、



ハリスト スしよ りふくか つし、しをもつてしを
 死 復 活 死 以 死

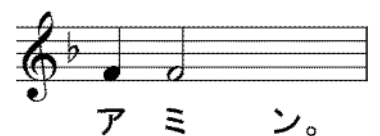
ほろぼ おし、はか にあるもの に
 滅 墓 在 者

いのちをたま えり。
 生 命 賜

誦經) われいづ とき しゅ ほ あ かれ ほ つね わ くち あ わ たましい しゅ を
 我 何れの時にも主を讃め揚げん、彼を讃むるは恒に我が口に在り、我が 靈 は主 を
 もつ ほこ おんじゅう もの き たの われ とも しゅ とうと とも かれ な あが
 以て誇らん、温 柔 なる者は聞きて樂しまん。我と偕に主を 尊 め、偕に彼の名を崇め
 ほ われかつ しゅ たづ かれ われ き い わ すべ あやう われ まぬか
 讃めん。我 嘗て主を尋ねしに、彼は我に聆き納れて、我が都ての 危 きより我を 免 れし
 たま め あ かれ あお もの てら かれら おもて はぢ う こ まづ
 め給えり。目を擧げて彼を仰ぐ者は照されたり、彼等の 面 は愧を受けざらん。此の貧し
 ものよ しゅ き い これ そのことごと かんなん すく しゅ つかい しゅ おそ
 き者呼びしに、主は聆き納れて、之を其 悉 くの艱 難より救えり。主の 使 は主を畏る
 もの めぐ まも かれら たす あぢわ しゅ いか じんじ み かれ たの ひと
 る者を環り衛りて、彼等を援く。味 えよ、主の如何に仁慈なるを見ん、彼を恃む人は
 さいわい およ しゅ せいじん しゅ おそ けだしかれ おそ もの とぼ わか
 福 なり。凡そ主の聖人よ、主を畏れよ、蓋 彼を畏るる者は乏しきことなし。少き
 しし とぼ う ただしゅ たづ もの なん こうふく か
 獅子は乏しくして餓え、唯 主を尋ぬる者は何の幸 福にも缺くるなし。

司祭) (黙誦： みづか ほうりつ しよよげんしゃ じょうまん ちち ていせい ことごと じょうまん
 親ら法律と諸預言者との 成 満にして、父の定制を 悉 く 成 満せし
 わ かみ つね われら ころろ よろこび たのしみ じょうまん たま
 ハリストス我が神よ、常に我等の心を 喜 と 樂 とに 成 満せしめ給え、
 いま いつ よよ
 今も何時も世世に、)

司祭) ねがわ しゅ こうふく そのおんちよう じんあい よ つね なんぢら あ いま いつ よよ
 願 くは主の降 福は、其 恩 寵 と 仁 愛とに因りて常に 爾 等に在らん、今も何時も世
 世
 に、



※ もし永眠者記憶を続けて行う場合はP104【 永眠者の爲の^{リテイヤ}熱衷祈祷 】に飛ぶ。

【 通常の終結 】

司祭) ハリストス死より復活し、死を以て死を滅し、

はか 墓 にあるもの 在者 に い 生 のちをたま 命賜
え り 。 しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわ
主 憐 主 憐 主 憐
れ めよ 、 ふくをくだ せ 。
福 降

司祭) 死より復活し、死を以て死を滅し、墓に在る者に生命を賜いしハリストス我等の眞の

神は、其至浄なる母、光栄にして讚美たる聖使徒、我等の聖神父コンスタンチノーポ

リスの大主教聖金ロイオアン、克肖捧神なる我諸神父、(某) 亞使徒日本の大

主教聖ニコライ、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、及び諸聖人の祈禱

に因て、我等を憐み救わん。彼は善にして人を愛する主なればなり、

ア ミ ン。

ハリスト スしよりふくかつし、しをもつてしを
死 復 活 死 以 死
ほろぼ おし、はか 墓 にあるもの 在者
滅 墓 在 者
い のちをたま え り 。
生 命 賜

ハリスト スしより 死 復 活 つかつし、しを 死 以 して 死
 ほろぼ おし、は 墓 かに 在 る もの に
 い の ち を た ま え り 。
 ハリスト スしより 死 復 活 つかつし、しを 死 以 して 死
 ほろぼ おし、は 墓 かに 在 る もの に
 い の ち を た ま え り 。
 わ れ ら に も な が き い の ち を た ま え り、しゅ
 我 等 永 生 命 賜 主
 の み っ か め の ふ く か つ を お が む 。
 三 日 目 復 活 拜
 か み よ、わ が く に の て ん の お う、お よ び
 神 我 國 天 皇 及
 く に を つ か さ ど る も の、わ れ ら の ふ しゅ
 國 司 者 我 等 府 主
 きょうセラフィ ム、お よ び こ と ご と く の せい きょう
 教 及 悉 正 教
 の ハリスティア ニンら を、い く と せ に も ま も り
 等 幾 歳 に も 護



〈 終了 〉

* 「アルトス」があるならP110【 「アルトス」の祝福 】へ。

【 永眠者の爲の熱衷祈禱 ^{リテイヤ} 】

ひとをあいするきゆうせ いしゅよ、しせしぎ
 人 愛 救 世 主 死 義

じんのたましいとともに、なんぢがぼくひの
 人 靈 借 爾 僕 婢

たましいをやすんぜしめて、かれらを
 靈 安 彼 等

なんぢにあるふくらくのいのちに、まもり
 爾 在 福 樂 生 命 護

たま あ え。しゅよなんぢがしよせいじんのあん
 給 主 爾 諸 聖 人 安

そくするところに、なんぢがぼくひのたま
 息 處 爾 僕 婢 靈

しいをやすんぜしめたま え。なんぢひとりひ
 安 給 爾 獨 人

とをあいするしゅなればなあり。
 愛 主

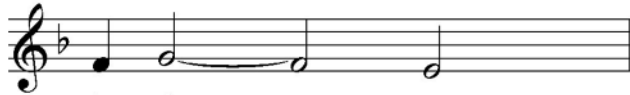
こうえいはちちとことせいしんにきす、
 光 榮 父 子 聖 神 歸

なんぢはぢごくにくだりてつながれしものの
 爾 地 獄 降 繋 者

くさりをときたるかみなり。みづから
 鎖 釈 神 親



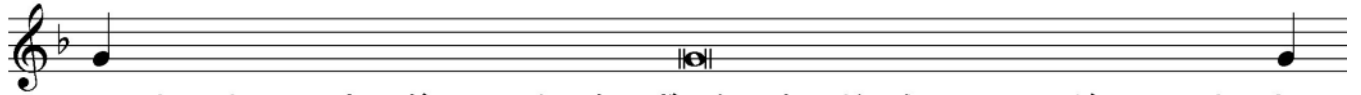
なんぢが ぼくひの たましいを やすんぜしめ
爾 僕 婢 靈 安



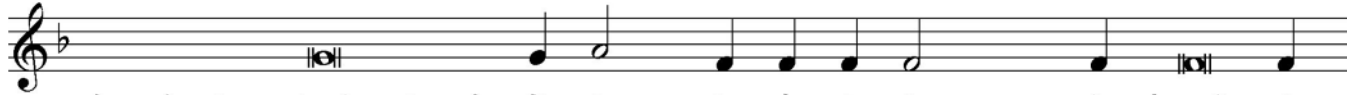
たま あ え 。
給



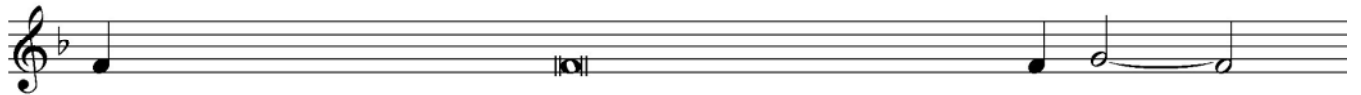
いまも いつも よよ に、アミン。
今 何時 世 世



ひとり いさぎよく きずなき どうていぢよ、たね
獨 潔 瑕 童 貞 女 種



なくして かみを うみ しものよ、かれらの
神 生 者 彼 等



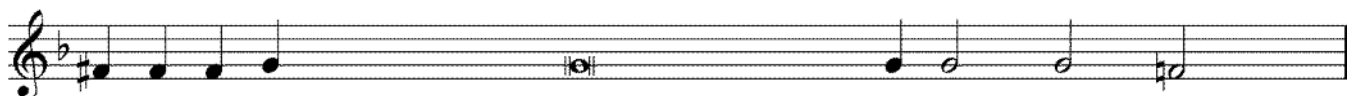
たましいの すくわれんことをいのりたま あ
靈 救 祈 給



え 。

【 重聯禱 】

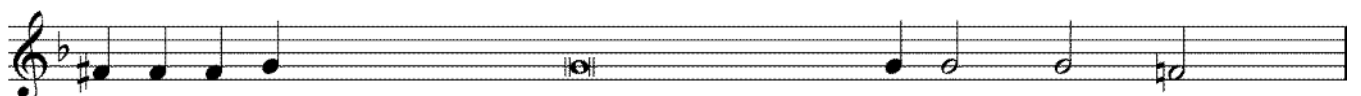
司祭) ^{かみ なんぢ おおい あわれみ より われら あわれ なんぢ いの き い あわれ}
神よ、爾の大なる 憐に因て我等を 憐めよ、爾に禱る、聆き納れて 憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

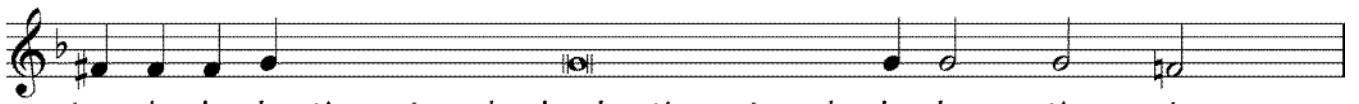
司祭) ^{またねむ かみ ぼくひ たましい あんそく ため およ かれら およ じゆう じゆう}
又寝りし神の僕婢(某)の 靈の安息の爲、及び彼等に凡そ自由と自由ならざる

^{つみ ゆる ため いの}
罪の赦されんが爲に禱る、



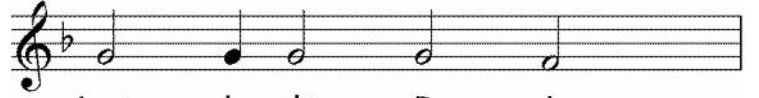
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{しゅかみ かれら たましい しよぎじん あんそく ところ い たま いの}
主神が彼等の 靈を諸義人の安息する處に入れ給わんことを祈る、



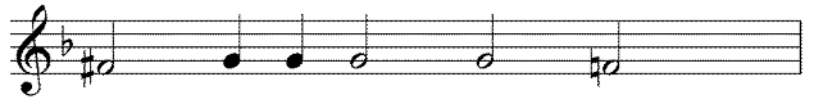
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
 主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{かれら} ^{かみ} ^{あわれみ} ^{てんごく} ^{しょざい} ^{ゆるし} ^{たま} ^{わがし} ^{おうおよ}
 彼等に神の 憐 と天國と諸罪の 赦 とを賜わんことを、ハリストス我死せざる王 及び
^{かみ} ^{ねが}
 神に願う、



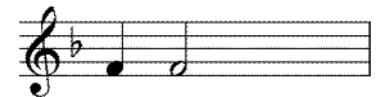
しゅ た ま え よ 。
 主 賜

司祭) ^{しゅ} ^{いの}
 主に禱らん、



しゅ あ わ れ め よ 。
 主 憐

司祭) ^{もろもろ} ^{れいしん} ^{もろもろ} ^{にくたい} ^{かみ} ^し ^{ほろ} ^{あくま} ^{むなし} ^{なんぢ} ^{せかい} ^{いのち}
 諸 の 靈 神 と 諸 の 肉 體 と の 神、死を亡ぼし 惡魔を 虚くし、 爾 の 世界に生命を
^{たま} ^{しゅ} ^{なんぢみづか} ^{ねむ} ^{なんぢ} ^{ぼくひ} ^{たましい} ^{ひか} ^{ところ} ^{しげ} ^{くさば} ^{へいあん}
 賜いし主よ、爾 親ら寝りし 爾 の 僕 婢 (某) の 靈 を 光る 處、茂き草場、平安
^{ところ} ^{やまい} ^{かなしみ} ^{なげき} ^{とお} ^{ところ} ^{あんそく} ^{ぜん} ^{ひと} ^{あい} ^{かみ}
 の 處、病 と 悲 と 歎 と の 遠 ざ かる 處 に 安 息 せ し め、善 に して 人 を 愛 する 神 なる
^{より} ^{かれら} ^{あるい} ^{ことば} ^{あるい} ^{おこない} ^{あるい} ^{おもい} ^{おか} ^{ことごと} ^{つみ} ^{ゆる} ^{たま}
 に 因 て 彼 等 が 或 は 言、或 は 行、或 は 思 に て 犯 し し 悉 くの 罪 を 赦 し 給 え。
^{けだし} ^{ひとひとり} ^い ^{つみ} ^{おこな} ^{もの} ^{ただなんぢ} ^{つみ} ^{なんぢ} ^ぎ ^{えいえん} ^ぎ ^{なんぢ}
 蓋 人 一 も 生 きて 罪 を 行 わ ざる 者 な し、唯 爾 は 罪 な し、爾 の 義 は 永 遠 の 義、爾
^{ことば} ^{しんじつ} ^{けだし} ^{われら} ^{かみ} ^{なんぢ} ^{ねむ} ^{なんぢ} ^{ぼくひ} ^{ふくかつ}
 の 言 は 眞 實 な り。蓋 ハ リ ス ト ス 我 等 の 神 よ、爾 は 寝 り し 爾 の 僕 婢 (某) の 復 活
^{いのち} ^{あんそく} ^{われら} ^{こうえい} ^{なんぢ} ^{なんぢ} ^{むげん} ^{ちち} ^{しせいしぜん} ^{いのち} ^{ほどこ}
 と 生 命 と 安 息 な り。我 等 光 榮 を 爾 と 爾 の 無 原 の 父 と 至 聖 至 善 に して 生 命 を 施 す
^{なんぢ} ^{しん} ^{けん} ^{いま} ^{いつ} ^{よよ}
 爾 の 神 と に 獻 ず、今 も 何 時 も 世 世 に、



ア ミ ン。

【 永眠者の爲の小讃詞 ^{コンダク} 】



ハリスト スよ、な ん ぢ が ぼ く ひ の た ま し い
 爾 僕 婢 靈



を、しよ せ い じ ん と と も に、や ま い
 諸 聖 人 偕 疾

も かな し み も な げ え き も な く 、 お わ
 悲 歎 終
 り な き い の ち の ある と ころ に や す ン ぜ
 生 命 處 安
 し い め た ま あ え 。
 給

【 終 結 】

司祭) ハリストス死より復活し、死を以て死を滅し、

は か に ある も の に い の ち を た ま
 墓 在 者 生 命 賜
 え り 。 しゅ あ わ れ め 、 しゅ あ わ れ め 、 しゅ あ わ
 主 憐 主 憐 主 憐
 れ め よ 、 ふ く を く だ せ 。
 福 降

司祭) 死より復活し、死を以て死を滅し、墓に在る者に生命を賜いしハリストス我等の眞の

神は、其至浄なる母、光栄にして讚美たる聖使徒、克肖捧神なる我諸神父、(某)

亞使徒日本の大主教聖ニコライ、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、及び

諸聖人の祈禱に因て、寝りし僕婢(某)の霊を諸義人の住所に入れ、アヴラアムの

懐に安んぜしめ、諸義人の列に加え、及び我等を憐み救わん。善にして人を愛す

る主なればなり、

ア ミ ン。

司祭) 主よ、爾の僕婢(某)の福なる寝に永遠の安息を與え、彼等に永遠の記憶

な たま
を爲し給え、

え い え んの き お
永 い 遠 んの き お
く 、 え い え んの き
お 憶 く 、 え い え ん
憶 の き お 憶 く
の き お 憶 く
ハリスト スしよ り ふくか つし 、 しを もって しを
死 復 活 死 以 死
ほろぼ お し 、 はか に ある もの に
滅 墓 在 者
い の ち を た ま え り 。
生 命 賜
ハリスト スしよ り ふくか つし 、 しを もって しを
死 復 活 死 以 死
ほろぼ お し 、 はか に ある もの に
滅 墓 在 者
い の ち を た ま え り 。
生 命 賜
ハリスト スしよ り ふくか つし 、 しを もって しを
死 復 活 死 以 死

ほろぼおし、はか にあるものに
滅 墓 在 者

いのちをたまえり。
生 命 賜

【 萬壽詞 】

かみよ、わがくにのてんのおう、および
神 我 國 天 皇 及

くにをつかさどるもの、われらのふしゆ
國 司 者 我 等 府 主

きょうセラフィム、およびことごとくのせいきょう
教 及 悉 正 教

のハリステアニンら を、いくとせにもまもり
等 幾 歳 にも 護

たまえ。
給

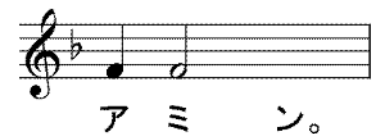
< 祈祷終了 >

【 「アルトス」 の祝福 】

司祭) ^{しゅ いの} 主に 禱らん、



司祭) ^{ぜんのう かみ ぜんりょく しゅ い とき なんぢ たみ くる} 全能の神、全 力の主、イスライリがエギプトより出づる時、爾 の民がファラオンの苦
^{どれい と とき なんぢ ぼく もつ こひつじ ほふ めい われら} しき奴隷より釋かるる時に、爾 の僕モイセイを以て 羔 を屠らんことを命じて、我等の
^{ため あま じゅうじか ほふ ぜんせかい つみ にな こひつじ なんぢ しあい こ わ しゅ} 爲に甘んじて 十 字架に屠られて、全世界の罪を荷う 羔 なる 爾 の至愛の子、我が主
^{よしょう たま しゅ われらけんび こころ もつ なんぢ いの なんぢいま} イイスハリストスを預 象し給いし主よ、我等謙卑の 心 を以て 爾 に祈る、爾 今も
^{こ パン かえり これ こうふく これ せいせい たま けだしわれらなんぢ しょぼく てき えいえん} 此の餅を 顧 みて、之に降 福し、之を成 聖し給え。蓋 我等 爾 の諸 僕も、敵の永 遠
^{どれい ちごく と がた なわめ われら と じゅう なんぢ こわ しゅ} の奴隷、地 獄の解き難き縲 紲より我等を解きて、自由 にせし 爾 の子我が主 イイスハリス
^{こうめい ふくかつ そんき こうえい およ きねん ため いまこ すくい ほどこ} トスの光 明なる復 活の尊 貴、光 榮、及び記念の爲に、今此の「パスハ」の 救 を施 す
^{ひ おい なんぢ いげん まえ これ ささ いの われらこれ ささ これ せつぷん およ これ} 日に於て、爾 の威 嚴の 前に之を捧 ぐ。祈る、我等之を捧 げ、之に接 吻し、及び之を
^{しょく もの なんぢ てんじょう こうふく あづか もの な なんぢ ちから もつ およ やまい} 食 する者を 爾 の天 上の降 福に 與る者と爲し、爾 の力 を以て凡 其の 病 と
^{つつが われら とお しゅう そうけん あた たま けだしなんぢ こうふく いづみ いやし ほどこ} 恙 とを我等より遠 ざけて、衆 に壮 健を予 え給え。蓋 爾 は降 福の 泉、醫 を施
^{もの われらこうえい なんぢむげん ちち なんぢ どくせい こ しせいしじんいのち ほどこ なんぢ} す者なり、我等光 榮を 爾 無 原の父と、爾 の獨 生の子と、至 聖至 仁生命を 施 す 爾
^{しん けん いま いつ よよ} の神とに 獻 ず、今も何時も世 世に、



司祭) ^{こ こ せいすい そそ もつ こうふく せいせい ちち およ こおよ せい} 此の「アルトス」は斯の 聖 水の灑 がるるを以て降 福し成 聖せらる、父、及び子及び聖
^{しん な よ} 神の名に因りてなり、アミン。

りょうせいかんしゃしゅくぶん
【 領 聖 感 謝 祝 文 】

かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き
神や光 榮は 爾 に歸す、神や光 榮は 爾 に歸す、神や光 榮は 爾 に歸す、

【 第一祝文 】 しゅわ かみ なんぢわれざいにん す なおなんぢ せい きみつ あづか もの
主我が神や、爾 我 罪 人を棄てずして、尚 爾 の聖なる機密に 與 る者

いた たま なんぢ かんしゃ われた もの なんぢ しじょう てん たまもの う
と致させ給うを 爾 に感謝す、我堪えざる者に 爾 が至 淨 なる天の 賜 を受くるを

ゆる たま なんぢ かんしゃ しゅさい ひと あい しゅ われら ため し ふくかつ われ
容し給うを 爾 に感謝す、主 宰・人 を愛する主、我等の爲に死して復 活し、我が

たましい からだ おん あた これ せい ため われら こ おそ べ いのち ほどこ
靈 と 體 とに恩を與え、之を聖にするが爲に、我等に此の恐る可くして生命を 施 す

きみつ たま もの もと こ きみつ われ たましい からだ いや およそ てき がい か
機密を賜いし者や、求む此の機密は、我にも 靈 と 體 とを癒し、凡 の敵の害を驅

われ ころ め あきら われ たましい ちから へいあん はぢ え しん いつわり
り、我が 心 の目を明 かにし、我が 靈 の 力 を平安にし、耻を得ざる信とし、偽

あい えいち み なんぢ いましめ まも なんぢ しんせい おんちよう ま なんぢ
なき愛とし、睿智を充たし、爾 の 誠 を守らしめ、爾 が神聖の恩 寵 を益し、爾

くに つ たま われ か ごと こ きみつ なんぢ せいせい
の國を嗣がしむる者となるを得せしめ給え、我は此くの如く、是の機密にて 爾 の成 聖に

まも つね なんぢ おんちよう おも またおの ため せいかつ すなわちなんぢわ しゅさいおよ
護られ、常に 爾 の恩 寵 を思い、復己が爲に生活せず、乃 爾 我が主 宰 及び

おんしゅ ため せいかつ もつ えいせい のぞみ いた こ よ はな えいえん いこい か しゅく
恩 主の爲に生活し、以て永生の 望 を懷き、此の世を離れて、永 遠の 息 、彼の 祝

もの た こえ およ なんぢ かんばせ い つく びぜん み もの かぎ たのしみ
する者の絶えざる聲、及び 爾 が 顔 の言い盡されぬ美善を見る者の限りなき 樂 の

ところ いた けだし わ かみ なんぢ なんぢ あい もの まこと のぞみ い つく
處 に至らん、蓋 ハリストス我が神や、爾 は 爾 を愛する者の 眞 の 望 と言い盡さ

たのしみ およ ぞう う もの なんぢ よよ ほ うた
れぬ 樂 なり、凡そ造を受けし者は 爾 を世世に讃め歌う、「アミン」

【第二祝文 聖大ワシリイの原文】 しゅさい かみ ばんせい おう ばんぶつ ぞうせいしゃ およ
主 宰ハリストス神、萬世の王、萬物の造成者や、凡

われ たま ところ しょぜん かついのち ほどこ しじょう なんぢ きみつ う たま
そ我に賜いし 所 の諸 善、且生命を 施 す至 淨 なる 爾 の機密を領けさせ給いしを

なんぢ かんしゃ またなんじ いの ぜん ひと あい しゅ われ なんぢ おおい した なんぢ
爾 に感謝す、又 爾 に祈る、善にして人 を愛する主や、我を 爾 が 庇 の下に、爾

つばさ かげ まも われ いき た いた まで いさぎよ りょうしん もつ とうぜん
が 翼 の蔭に護り、我に呼吸の絶えんとするに至る迄、 潔 き良 心を以て、當然に

なんぢ せいたいせいけつ う もつ つみ ゆるし えいせい う いた たま けだしなんぢ いのち
爾 の聖 體 聖 血を領け、以て罪の 赦 と永生とを得るを致させ給え、蓋 爾 は生命

かて せいせい いづみ しょぜん たま しゅ われらなんぢ ちち せいしん こうえい けん いま
の糧、成 聖の 泉 、諸 善を賜う主なり、我等 爾 と父と聖 神とに光 榮を獻ず、今

いつ よよ
も何時も世世に、「アミン」

【 第三祝文 聖シメヲン「メタフラスト」の原詩 】 わ ぞうせいしゅ あまん おのれ み かに
我が造成主、甘 じて己の身を糧と

われ あた ひ ふとうしゃ や もの もと われ や なか すなわちわ ひやくたいしよせつ
して我に與え、火にして不 當 者を焚く者や、求む我を焚く母れ、乃 吾が 百 體 諸 節

しんぷく い わ しょざい いばら や たましい きよ おもい せい すじ ほね かた
心腹に入り、吾が諸罪の棘を焚き、靈を淨め、思を聖にし、筋と骨とを固め、
ごかん あきら わ ぜんしん なんぢ おそ おそれ くぎ つね われ おお われ たも
五官を明かにし、吾が全身を、爾を畏るる畏に釘うち、常に我を庇い、我を保
われ たましい がい もろもろ おこない ことば まも われ きよ われ あら われ かざ
ち、我を靈を害する諸の行と言とより護り、我を淨め、我を滌い、我を飾
われ おさ われ ひら われ てら わ またつみ すまい ひとりなんぢ せいしん
り、我を治め、我を啓き、我を照し、我が復罪の住所たらずして、獨爾が聖神の
すまい あらわ およそ あくしゃおよそ よく われせいたい い よ なんぢ いえ もの
住所たるを顯し、凡の悪者凡の慾は、我聖體の入るに依りて爾の家となりし者
に 逃ぐること、火より逃ぐるが如くならしめ給え、我其轉達者として、諸の聖者、
しょひん しんし なんぢ ぜんく ちえ しと およ なんぢ むてんしじょう はは なんぢ すす じ
諸品の神使、爾の前驅、智慧なる使徒、及び爾が無玷至淨の母を爾に進む、慈
れん しゅわ なんぢ かれら きとう い なんぢ えきしゃ ひかり こ たま けだし
憐の主我がハリストスや、彼等の祈禱を容れて、爾の役者を光の子となし給え、蓋
ひとりしぜん しゅ なんぢ われら たましい せいせい こうみょう われらみなかみ しゅさい よろ
獨至善の主や、爾は我等の靈の成聖と光明なり、我等皆神と主宰に宜し
ところ ごと ひび こうえい なんぢ けん
き所の如く、日に光榮を爾に獻ず、

【 第四祝文 】 しゅ われら かみ ねがは なんぢ せいたい わ ため えいせい
主イイススハリストス我等の神や、願くは爾の聖體は、我が爲に永生
なんぢ せんけつ つみ ゆるし ねがわ こ かんしゃ まつり わ ため きえつ
となり、爾の尊血は、罪の赦とならん、願くは此の感謝の祭は、我が爲に喜悅
そうけん あんらく またおそ べ なんぢ さいど こうりん とき われざいにん なんぢ こうえい
と壯健と安樂とならん、又畏る可き爾が再度の降臨の時、我罪人に、爾が光榮
みぎ た え たま なんぢ しじょう はは しょせいじん きとう よ
の右に立つを得せしめ給え、爾が至淨の母と諸聖人との祈禱に依りてなり、

【 第五祝文 至聖生神女に捧ぐ 】 しせい ちょさい しょうしんぢょ わ くら たましい ひかり
至聖なる女宰・生神女、我が昧みたる靈の光、
わ たのみ おおい かくれが なぐさめ よろこび なんぢ われた もの なんぢ こ しじょう
吾が憑恃と幘幘と避所と慰藉と歡喜や、爾が我堪えざる者に、爾の子の至淨の
たいしそん ち う もの え たま なんぢ かんしゃ なおいの まこと ひかり
體至尊の血を領くる者となるを得せしめ給いしを爾に感謝す、猶祈る、眞の光を
う もの わ ころ れいもく あきらか ふし いづみ う もの われつみ ころ
生みし者や、吾が心の靈目を明にせよ、不死の泉を生みし者や、我罪に殺され
もの い たま じれん かみ じあい はは われ あわれ わ ころ しょうかん ひつう
たる者を生かし給え、慈憐なる神の慈愛の母や、我を憐み、吾が心に傷感と悲痛、
わ おもい けんそん わ とりこ いねん よびかへし たま われ いき た いた
吾が思に謙遜、吾が虜となりし意念に呼還を賜い、我に呼吸の絶えんとするに至る
つみ え しじょう きみつ せいせい う たましい からだ いやし う いた
まで、罪を獲ずして、至淨なる機密の成聖を受けて、靈と體との醫を得るを致し、
ならび われ つうかい うけとめ なみだ あた しょうがいなんぢ かしょうさんえい たま けだし
並に我に痛悔と承認との涙を與えて、生涯爾を歌頌讚榮せしめ給え、蓋
なんぢ よよ さんび こうえい み こうむ
爾は世々に讚美と光榮とを満ち被る、「アミン」